特務支援課メンバーが過ごす

クロスベル自治州のゆる～い(?)日常！

英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～

第1回

エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、『碧の軌跡』シリーズ。続編となる『閃の軌跡』、『創の軌跡』においても激動の中にあり、様々な壁が立ち塞がっていたが、怯むことなく立ち向かっていったのがロイド・バニングス率いる特務支援課メンバーだ。そんな特務支援課メンバーが、もしかしたら過ごしていたかもしれない日常を描く、魅力たっぷりの一冊をご堪能あれ！

第1話 『ティオとみっしぃの日』

やわらかな陽射しの降り注ぐ昼下がり。
早朝から任務に出ていたロイドは、ようやく特務支援課へと帰ってきた。昼食は取り損ねたけれど、ティータイムには間に合いそうだ。
リビングとしても使っている会議スペースに顔を出す。
「やあ、ただいま」
ロイドの声に、テーブルを囲んでお茶をしていた三人ともが、顔をあげる。
赤毛の青年――ランディが、ビッと片手を振った。
「よおっ、遅かったな！　どっかのお嬢さんと、お楽しみだったか？」
「お嬢さんではないけど、荷物を届けた先でね……」
「ほう⁉」
「お婆さんの話が終わらなかったんだ」
「それは、お楽しみじゃねえよ！」
「ロイドは真面目なのよ、ランディと違ってね」
ため息まじりに肩をすくめたのは、パールグレイの長髪が美しい少女――エリィだった。
その隣に座っていた少女が、席を立つ。
「ごちそうさまです」
ライトブルーの髪に白い肌――ティオは、まるで子どものように見える。実際十四歳で

しかなく、本来ならば特務支援課の危険な任務に参加するような年齢ではない。
しかし、彼女は魔導杖（オーバルスタッフ）を使いこなす実力者だ。
ティオは半分ほどミルクの残ったマグカップを持つと、ロイドの横を通り過ぎていく。
「………………ジト」
「え？」
すれ違いざま、睨まれたようにロイドは感じた。
自室へ戻ろうとするティオに、エリィが声をかける。
「ティオちゃん、明日は何時に出る？」
「……午後は混雑すると思います。朝食のあと、すぐに出発しましょう」
「そうね！　そうしましょ」
「はい」
いつも無表情でクールなティオだが、仲間に見せるやわらかい微笑みを残して、会議スペースから立ち去った。
ロイドは入れ替わるように座る。
エリィが紅茶と――昼食抜きを察したのか、パンケーキを切ってくれた。
「ありがとう」

「これ、私とティオちゃんで焼いたのよ」
「そうなんだ、美味しそうだね。そういえば、エリィたち、明日どこか行くのか？」
「ええ、私たち非番だから、ティオちゃんとお洋服を買いに行こうと思って」
「なるほどね……じゃあ、べつに機嫌が悪いってことはないのか……俺の気のせいだったのかな？」
「どうかしたの？」
「うーん……さっき、ティオに睨まれたような……？」
　ほほう、と身を乗り出したのは、ランディだった。
　ニヤリと笑う。
「そういや、最近、ティオすけがロイドにだけそっけないよな～」
「うっ……やっぱり？」
　他の人までそう感じるということは、自分の気のせいではないのだろう。
　エリィがテーブルを叩く。
「もしかして、ティオすけに何かしちまったのか？　あんなこととか、こんなこととか⁉」
「冗談でしょ⁉　まだティオちゃんは、子どもなのよ⁉　あ、子どもじゃなければいいってわけじゃないけど……とにかく、ダメよ！　そんなの」
　子どもなんだから――とエリィは強調する。

ロイドは首をかしげた。
「俺はティオのこと、子どもだとは思ってないけど……？」
「えっ⁉　まさか、ロイド……本当に……⁉」
エリィが唇を震えさせる。
ランディまで驚いて目を見開いた。
「おいおい、マジかよ……⁉」
そんな反応をされるとは意外だ。
「ふたりとも、どうしたんだ？　ティオは一人前の支援課メンバーだろ？　大人と同じように接するべきだと思うけどなぁ」
エリィがパタパタと手を振る。
「あ、そうよね！　そうね！　ティオちゃんは立派な支援課のメンバーだものね！」
ランディがうなだれていた。
「まぁ、ロイドだもんな～。どうせそんなことだろうと思ったぜ」
「な、なんだよ……俺、変なこと言ってないだろ？　それより、ティオのことだよ」
「そうだな。まぁ、そんなに難しいことじゃない」
「わかるのか、ランディ⁉」
「ロイド、よく聞け――何もしてないのに女が冷たいときの理由は三つしかない！　気づかず傷つけることを言ってしまったか、何かして欲しがってるのに何もしないからか、約束を忘れてるからか、浮気が見つかったかだ！」
「三つしかないと言いながら四番目があるうえ、それは俺とぜんぜん関係ないと思うけど……」
「数字なんて細かいことさ」
おおざっぱな性格のランディだった。
エリィが思案顔をする。
「ん～……ロイドってとんでもなく鈍いところがあるけれど、傷つけるようなことは言わないと思うわ」
「じゃあ、決まりだな！　何かして欲しがってるのに何もしないからだ！」
「何かって？」
ロイドの問いに、ランディが口ごもる。
「つまり、ナニカというのは……ええっとだな……はぁ、どっちもお子様みたいなものだし、その線はないよな」
「その線？」
「もう、ランディはバカなことばかり言って……あとは、約束を忘れてるとか？　ロイドに限って、そんなことないわよね？」

「約束か……忘れたりはしてないけど、まだ果たせてない約束ならあるかな」
「そうなの？」
「ああ、前にティオと、『ふたりでミシュラムのテーマパークに行く』って約束したんだ」
「は⁉」
「でも支援要請は尽きないし、非番が重なっても、なかなか休めなくて……」
「待て待て！　非番の日でも仕事してるな～とは思ってたけど、そんな約束を放ったらかしてたのかよ⁉」
「ふたりで行くって、どういうこと⁉　ティオちゃんとふたりっきり⁉　ティオちゃんとロイドだけでテーマパークに行くの⁉」
　いきなり詰め寄られて、ロイドはひっくり返りそうになる。
「あ、ああ……」
　すべて肯定だった。
　突き飛ばされた。
　派手な音をたてて床に転がる。
「イテテ……何するんだよ？」
「それは、こっちのセリフだ、馬鹿野郎！　いいかよく聞け！
女の子との約束は緊急支援要請にも勝る‼」

　ずどーん、とランディが断言した。
「なんだって⁉」
　ロイドの背後で雷が鳴った――気がした。
　エリィがため息をつく。
「それは言い過ぎにしても、さして緊急でもない仕事より後回しにされてたら、約束を守る気がないか、忘れてると思っちゃうわね……ティオちゃんがかわいそうになってきたわ」
「いや、俺は忘れてたわけじゃなく、プライベートなことよりも仕事を優先しないといけないと思ってさ。だって俺たち特務支援課っていうのは、この街（クロスベル）の平和を守るためのものだから……」
「女の子の幸せより優先すべき平和なんてない‼」
　ふたつ目の雷鳴だった。
「非番を代わってあげるから、今からティオちゃんを誘ってきたらどう？」
「そんな、エリィ。悪いよ」
「私よりティオちゃんに悪いでしょ。ずっと待たせてたなんて」
「うっ……わ、わかりました」

「今すぐ！」
「は、はい！」
そのようなわけで、ロイドはティオを連れて、ミシュラムワンダーランドに行くこととなった。

翌日——
水上バスの扉が開くと同時に、ティオが桟橋へと降り立つ。すたすたと正門へ向かった。クールを装っているが、脇目もふらず、歩みも明らかに早い。
「ロイドさん、ミシュラムです」
「あ、ああ……」
それは当然なのだけれども、瞳を輝かせているティオを見たら、ロイドは何も言えなくなった。
つまり、自分の考えている『ミシュラム』と、ティオの言っている『ミシュラム』は重みが違うのだろう。
ロイドは出発前にランディに言われたことを思い出す。

「いいか？　女の子を連れて行くってのはな、ただ行けばいいってもんじゃない」
「えっ、そうなのか？」
「その場所で楽しい思い出を作ってこそ、だろうが」
「楽しい思い出……」
「ああ、一生モノの楽しい思い出だ」
「一生モノの!?　なるほど、ティオと約束したときは、そんな簡単なことでいいのかと思ったけど……俺が甘かったようだ」
「百戦錬磨の俺が、ばっちり教えてやるよ」
「ありがとう、ランディ」
そうして、空が白むまで〝一生モノの楽しい思い出〟の作り方を教わった。

「よし、今日は気を引き締めていかないとな」
「どうかしましたか、ロイドさん？」
「あ、ええっと……まずは入園チケットを買わないとね」
「それなら大丈夫です。この日のために、ＭＷＬ（ミシュラムワンダーランド）ワンデーフリーパスを買っておきました。すべての施設で自由に遊べて、ランチとドリンクまでついてきます」

「え？　それだと、俺が連れてきてもらったみたいになっちゃうけど……」
「……はっ⁉」
「もしかして、ずっと楽しみにしててくれた？」
「そ、それは……当然です」
「……ごめんな、待たせちゃって」
「いえ、わたしの一方的なお願いでしたから。あと、勘違いしないでください……わたしが楽しみにしていたのは、みっしぃに会えることですので」
「うん？　それはわかってるよ。ティオは大のみっしぃ好きだもんな」
「……ぜんぜん、わかってません」
「え？」
　すたすた、とティオが足早に進んでしまう。
　もしかして機嫌を損ねてしまったのだろうか？　ロイドは小首をかしげる。
　――なるほど、こいつは難度の高いミッションだ。
　小さく拳を握りしめると、ティオの後を追いかける。非番ということで装備（トンファー）は置いてきた。武器が役立つ状況とは思えないが、それだけに心許なかった。

　ロイドたちはゲートをくぐり、ワンダーランドの奥へと進んでいく。
　ふたりの後ろに、距離を置いて物陰に隠れつつ尾行する者の姿があった。
　ランディである。
　彼と一緒にエリィもいる。
　それに、支援課で面倒を見ている身よりのない女の子――キーアもいた。
　ランディは懐からオーブメントを取り出した。多様な機能を持った第5世代戦術オーブメント、通称《ＥＮＩＧＭＡ（エニグマ）》は、通信機能も備えている。
「こちら、ランディ……目標はミシュラムに入ったようだぜ」
　スピーカーから流れてくるのは、彼らの上司であるセルゲイ課長の声だ。
『対象の様子はどうだ？』
「今のところ、手もつないでねぇな。現在、正門から鏡の城方面に向かって移動中」
『この支援要請の重要度は〝緊急〟だ。最優先で当たってくれ』
「了解！」

鋭い返事をし、ランディはエニグマを懐に戻した。
エリィが目を丸くする。
「これ緊急なの⁉ ていうか、支援要請なの⁉」
「そうだ」
「本部に報告されちゃうの⁉」
「……依頼者は、ロバーツ主任らしいぞ」
「頭痛がひどくなりそう……」
ロバーツ主任とは、ティオの出向元であるエプスタイン財団の研究者で、彼女の上司にあたる人物だ。
あっ、とキーアが指さす。
「ロイドたち、アイス食べてる！ いいな～、キーアも食べたい！」
「着いて早々に食べ物かよ……どういう段取りしてんだ、あいつらは？」
「ねえねえ、キーアもアイス食べたい」
「ついて来るならワガママ言わないって約束じゃなかったか？」
「ううぅ～……」
涙目になりながらも、キーアは下唇を噛んでがまんした。
ランディが肩をすくめる。

「しゃーねえな、後で買ってやるから。な？」
「ホント⁉ ランディ、やさしい～」
「あら、ごちそうさま」
「お嬢もかよ⁉」

ロイドたちは、みっしぃアイスを食べていた。
みっしぃをイメージしたグレーとホワイトのツートンアイスに、みっしぃの絵がプリントされたクッキーが乗っている。
「おいしいかい、ティオ？」
「はい……何より食べることができてよかったです。このみっしぃアイスは期間限定のうえ、1日344個限定で昼にはなくなっていると評判でした」
「なるほどね」
だから、まず最初に来たというわけだ。
ランディには、休憩するのは三つくらいアトラクションを回ったあとがいいと言われたけれど、ここは臨機応変に対処して正解だったろう。

味は普通のアイスだったように思うけれど、ティオが喜んでくれたならよかった。
「さて、どこへ行こうか」
ロイドは周りに視線を巡らせる。
ミシュラムのテーマパークは、楽しげな施設がいっぱいあった。先が長い。
そのなかでも目を引くのは鏡の城だろうか。
たたっ、と急にティオが駆けだした。
「え？　ティオ⁉」
「ロイドさん、みっしぃです！」
見れば彼女が駆けていく先には、みっしぃがいた。
こうして、着ぐるみに瞳を輝かせる姿は、歳相応の子どもにしか見えない。
こんなに喜んでくれるなんて、連れてきてよかったな、とロイドは思った。
「なにしてるんですか、ロイドさん！」
「え？」
見れば、カメラを持ったスタッフが待っている。
ティオのほうも、みっしぃの横に立って、髪を手櫛で直したりして、準備万端だ。
「記念撮影です」
「ああ、そうか。え、俺も写るの？」

「当然です……ロイドさんと来た記念なんですから」
「なるほど」
「ロイドさんは、そこ。動かないでください。みっしぃが隣で、わたしがその隣です」
「はい」
「みししっ★」
テキパキとしたティオの指示に、ロイドもみっしぃも軍隊の兵士みたいにビシッと従う。
みっしぃを中心に、左右に並んだ。
バックは鏡の城。
太陽は右上に輝いている。
なるほど、こだわりを感じさせるポジショニングだ。
スタッフが声をかけ、パシャリとカメラのシャッターを押した。帰りに正門の近くで受け取れるらしい。
「この写真、大切にします」
ティオが表情をほころばせ、熱っぽく語る。その相手は、みっしぃだったが。
「みししっ、楽しんでいってね～」
「はい」
みっしぃが、ぽむぽむとティオの頭をなでる。

いつものクールな表情のまま、頬を紅潮させているのが、なんだか微笑ましかった。
背後から甲高い声があがる。
「おっ、みっしぃだ！」
「わーい、みっしぃだ～!!」
小さな子どもたちが駆け寄ってきた。
ティオは名残惜しそうにしつつ、みっしぃから離れる。
みっしぃはＭＷＬの大人気マスコットで、もう記念撮影も終わったのだから独占するわけにはいかない。
それでも、すこし離れたところから、その姿を見つめ続ける。
走ってきた男の子ふたりが、みっしぃに体当たりした。抱きついたのかもしれないが。
「うおー、おれ知ってんぞー、みっしぃって、中に人いるんだろー!?」
「見せて見せてー!!」
「みししっ、そんなことないよ～？」
「でも、父ちゃん言ってたもん！」
「言ってたー!!」
「みしし……」
スタッフまで弱り顔だが――教育方針は、ご家庭により様々だから仕方ない。やや無粋

だとは思うけれど、とロイドは肩をすくめた。
「みっしぃも大変なんだな、ティオ」
感情の消えた顔をした彼女が、つかつかと歩いていく。
「……」
「えっ、ティオ？」
「あなたたちは、間違っています」
いきなり子どもたちに説教をしだした。その威圧感に子どもたちがたじろぐ。
「だって……父ちゃんが……」
「それは嘘です。みっしぃの中に人など入っていません」
「じゃあ、どうしてしゃべってるんだよー!?」
「みっしぃは、しゃべるものです。当然でしょう。なんの不思議もありません」
ティオが本気で舌戦をはじめてしまった。
説得できればよかったけれど、そうそう都合よくいくはずもない。
「んじゃあ、みっしぃの頭を取ってみようぜ！　そしたら、わかるだろー!?」
「……ッ!!」
無表情だったティオに怒気が宿った。
すっ、とリュックのなかに手を入れる。

ロイドがトンファーを置いてきているように、ティオもまた今日は魔導杖を持ってないわけだが。

その手には、戦術オーブメントが握られていた。

「エニグマ、駆動……」

ティオが魔法（ブーツ）の準備に入る。

「待った！　待った！　ティオ、もう行こう！　そうだ、鏡の城に行ってみようか！」

慌てたロイドは、彼女の手をつかみ、引っ張って連れ出した。

「君たちも、みっしぃを困らせちゃダメだぞ⁉　じゃあね！」

ティオの迫力に涙ぐんでる男の子たちと、ゆるゆると手を振るみっしぃと苦笑するスタッフを残してロイドたちは鏡の城へと向かった。

離れたところから、その様子を眺めていたのは、三人――ランディ、エリィ、キーア。

「ねえねえ、ランディ」

「なんだ、キー坊？　まだアイスは無理だからな」

「みっしぃの中に人なんて入ってないよね？」

「え⁉　あ～いや、それは……まぁ……いないような、そうでもないような……」

「だって、みっしぃはみっしぃでしょ？」

「ああ、そうだな……そうだといいな」

ランディが、キーアの純真な瞳に苦悩していると、ハッとエリィが息を呑んだ。

「大変！」

「どうした、お嬢⁉」

「ロイドとティオちゃんが……‼」

慌ててランディは、草むらに身を隠しつつふたりへと視線を送る。

まだ不服そうなティオを引きずるようにして、ロイドが鏡の城を指さしていた。

エリィが声を絞り出す。

「手……つないでる」

「……ああ、そうだな」

「つないでる……」

「まぁ、テーマパークだしな」

手くらいつないで当然だろう――お嬢も、たいがい初心（ウブ）だな、とランディは息を吐いた。

キーアが、そっとエリィの手をにぎる。

「エリィも手つなぎたいの？　じゃあ、キーアがつないであげるね」

「ん……ありがとう」
エリィの表情がやわらぐ。
えへへとキーアが笑い返した。

鏡の城に着くと、鐘の音が聞こえてきた。
見上げる。
「この鏡の城の一番上には、鐘があって……ふたりで鳴らすと、願いが叶うそうですね」
「そうらしいね」
入園時にもらったパンフレットに、そう書いてある。
ロイドは城を見上げた。
「ティオは鐘を鳴らすとしたら、どんなお願いをするんだ？」
「……そうですね」
じっ、と見つめてくる。
なんだろう？　とロイドは言葉を待った。
見つめ合う。

ティオが、かすかに頬を染める。
「……ロイドさんと……もっと……」
「ん？　俺と……なに？」
「………………いえ、なんでもないです」
「？」
「ロイドさんと……なかなか見つからないという、みーしぇを探したいです」
「ああ、みーしぇか」
みっしぃの妹のピンク色のマスコットだ。ワンダーランドのなかでも、とくに珍しいという噂だが、今日はいるのだろうか？
「探してみましょう……まずは、こちらから」
「わかった」
そんなわけで、唐突に、みーしぇを探して園内を駆け回ることになった。
捜査の基本は足だ！
マップに×印を記入しながらエリアを絞り込んでいく。
相手が動くといっても走って移動しているわけではないだろうから、こちらが素早く捜査ポイントを絞っていけば発見できる可能性は高い——はずだった。
広い。

ふたりで行動しているといっても、別行動というわけにはいかないから、必然的にひとりで捜査しているようなものだ。
ロイドは見晴らしのいい場所まで出て、息をつく。
「はぁ、はぁ……きつくなったら言うんだぞ、ティオ？」
「へいきです」
今日のティオは、いつになく元気だった。ロイドのほうが先にめげてしまいそう。

「はぁ、はぁ……ロイドのやつ……どういうプラン……してんだ⁉」
急に走りだしたものだから、尾行に気づかれたのかと思ったが、そうではなかったらしい。
いったい何が目的なのかわからないが、走り回るロイドたちを追いかけて、ランディたちも走らされていた。
エリィも肩で息をしている。キーアが青ざめた顔をしていた。
「あぅ……もう……だめ……キーアもう走れないよ……」
「無理するな、キー坊」

「でもひとりでは残していけないわ」
「ああ、そうだな。お嬢も残って休んでろ。俺はひとりで尾行する」
「そんな……」
「気になるのはわかるけどよ、キー坊をひとりにはできないだろ？」
「もちろん、そうね。じゃあ、落ち着いたら連絡して」
「りょーかい」
ふたりを残して、ロイドたちのほうへと足を向ける。
背後からエリィが声をかけてくる。
「ランディ、気をつけて……」
「フッ……大丈夫さ。ティオすけのセンサーは優れちゃいるが、テーマパークの騒がしさのなかじゃ、役に立たないハズだ」
「それじゃあ、私たちは休憩所へ行くわね」
「ああ、俺の代わりにアイスを買ってやってくれ」
「わーい、アイスー‼」
急に元気になったキーアに苦笑しつつ、ランディは走りだした。

しばらくして――

まるで犯人捜査のような熱意で走り回っていたロイドたちだが、さすがに疲労が溜まったのか、話しこんだ後、休憩所へと向かいはじめた。
ロイドが「もうすこしワンダーランドを楽しもう」と持ちかけ、「遊びながら探しましょうか」とティオが応じたわけだが。離れて尾行していたランディが知るよしもなかった。
休憩所に向かうロイドたちを見て、慌ててエニグマを取り出す。
「……やばい……出ないぞ」
そういえば、尾行任務ということでエニグマは音がしないように設定してあった。
鉢合わせなんてことになったら、大変だ！
ランディはエニグマでの呼び出しを繰り返した。

その頃、エリィは休憩所の店外にあるパラソルテーブルでくつろいでいた。
走り回っているランディには悪いと思ったが、休憩するからには最大限に休むのも任務のうちだ。
キーアにアイスを買ってあげ、自分はクッキーとアイスレモンティーを頂いた。
みっしぃのプリントされたクッキー。こんな日でなければ、ティオのためにお土産にしたかもしれない。
「あ」
キーアが指さす。
「なに？」
「ロイドとティオだ」
「え!?」
慌てて視線を向ければ、たしかに疲れた足取りで歩いて来るロイドたちの姿があった。
エリィは席を立つ。
「隠れるわよ、キーアちゃん！」
「なになに、こんどは隠れんぼー？」
「そんなところ！」
デートを尾行していたなんて知られたら、嫌われてしまうかもしれない……すくなくとも、ティオは喜ばないだろう。
店の外を走って逃げるだけの時間はないと判断し、エリィは目の前の店に入った。
建物の柱の陰に身を寄せる。
ほどなくして、ロイドたちが店に入ってきた。
ティオがメニューを指でなぞる。

「おすすめは、みっしぃカレーだそうです。甘口ですが、濃厚だとか」
「いいね。飲み物はどうする？」
「そうですね……私は、みっしぃソーダにします」
「じゃあ、俺は、みーしぇレモネードにしよう」
　それぞれ、水色のソーダと、ピンク色のレモネードが出てきた。カレーも受け取って、外のパラソルテーブルに落ち着く。
　エリィはふたりの様子を窺いつつ、バッグからエニグマを取り出した。着信が5件もある。
　――しまった！
　周りが騒がしかったから気づけなかったらしい。
　すぐに連絡を返す。
「……ランディ？」
『よ～やく繋がったか！　お嬢、ロイドたちが――』
「あやうく見つかるところだったわ」
『ははは、まぁ、バレてないなら、セーフだな。目標の様子は？』
「様子……」
　視線をロイドたちのほうへ移す。

　ちょうど、レモネードを傾けたところだった。
「お、これ美味しいな」
「そうですか。実は、みーしぇレモネードと迷っていたのですが……」
「ちょっと飲んでみる？」
「!?　…………………いいのですか？」
「え？　そりゃ、味見くらいなら」
「量の問題ではないと思いますが……わかりました。では、い、いた、いただき、ます」
　機械仕掛けみたいな固い動きでティオがレモネードのグラスを持つ。すこし迷ってから、グラスの端に唇をつけた。さすがに、ロイドの使ったストローを咥えるのは恥ずかしかったらしい。
　なんとも初々しかった。
　ぽつり、とエリィは漏らす。
「いいなぁ……」
『お嬢？　それが〝目標の様子〟の報告かよ？』
　エニグマで通信中なのを失念していた！
「ハッ！　いえ、その……レモネードが美味しそうだったのよ」
『まぁ、そういうことにしておくか。俺も喉が渇いたな。ちょいと休ませてもらうか。店

での行動は、お嬢がフォローしてくれ』
「了解」
エニグマをバッグに戻して、ふと気づく。
キーアがいない⁉
慌てて店内に視線を巡らせる。
カウンターでジュースを受け取っているのを見つけた。
駆け寄る。
「キーアちゃん、なにしてるの⁉」
「ロイドと同じのが飲みたくなっちゃって」
「はぁ……もう勝手なことしちゃダメよ。びっくりしたじゃないの」
「はーい」
店員さんが安堵の笑みを浮かべる。
「ああ、よかった。お母さんですか？　みーしぇレモネード、30ミラになります」
「……ッ⁉　あの……まだ……18です」
「え？　みーしぇレモネードは、30ミラなんですが……？」
「私……この子の、姉、のようなもの……です。まだ18歳ですから」
「あっ、申し訳ありません！　大人びてらっしゃるもので！」

「いえ……」
ぺこぺこ謝る店員に、エリィは静かに30ミラを差し出すと、ゆらゆらとカウンターを離れた。
キーアが後をついてくる。
「ごめんね、エリィ。そんなに悪いことだと思わなくて……ジュース飲む？　ロイドが美味しいって言ってたよ？」
「……大丈夫よ、キーアちゃんはなにも悪くないわ」
大人びて見られることには慣れているが、子どもがいると思われたのは、ちょっとショックなエリィだった。
「ぐす……まだ18歳なのに……」
そこへ、ランディがやってくる。
「よお、調子はどうだ？」
「ちょっ⁉　ちょっと、見つかったらどうするつもり⁉」
「この店、裏側にも出入口があるんだよ。どうした？　浮かない顔して？」
さすが女の表情には鋭い。
でも相談するようなことではない、と思う。
「なんでもないわ」

「そうなのか?」
「ハァ~……こうして、テーマパークでキーアちゃんを連れてると、親子三人に見えたりするのかしらね?」
「なっ⁉　な、なに言ってんだ、お嬢⁉」
ランディが珍しく焦っていた。
「どうかしたの?」
「いや、お嬢もたいがい……やれやれ、なんでもねえよ」
キーアは、みーしぇレモネードを飲んで御満悦だった。
「おいしー‼」

ロイドたちはランチのあと、いくつかのアトラクションを見て回り——
陽が西に傾いてきた。
「もうすぐ日が暮れるな……」
「はい」
「夜には花火とかあがるらしいよ」

「え……あの……夜ですか」
「向こうに見える立派な建物は、ホテルかな? そういえば、ミシュラムのホテルって、どこもすごく豪華だからな」
「ホテル……⁉」
ティオの顔が赤くなっていく。
ぱたぱたと手で首筋を扇いだりして。
そんな彼女の様子など、ロイドは気づくはずもなく。
「ねえ、ティオ」
「……っ⁉」
「明日も仕事だから、暗くなる前に帰ったほうがいいと思うんだけど……ん? どうかした? 疲れてるのか?」
「い、いえ……そうですね。わたしとしたことが……わかりました。では、次で最後にしましょう」
「どれがいい?」
「まだまだ、いっぱいありますが……えっと、あれに」
ティオが選んだのは、観覧車だった。
八角形のゴンドラが巨大な円を描いて廻っている。

「いいね」
「はい」
ロイドはティオと、ゴンドラに乗った。ごうんごうんと昇っていく。
ワンダーランドどころか、ミシュラムぜんぶが見渡せた。
穏やかな午後の陽差しに包まれた楽園。
ほぅ、とティオが吐息をこぼす。
「……素敵です」
「思い出に、なったかな？」
「え？」
「一生の思い出になるくらい……楽しめたかな？　俺は、ティオとの約束を果たせたんだろうか……？」
「ふふ……もちろんです。ありがとうございました、ロイドさん」
「よかった」
ロイドは椅子に背を預ける。
体から力が抜けていくような安堵を感じた。
観覧車から降り、ロイドたちは正門に向かって歩きはじめる。
途中、ふと売店に寄った。
「ロイドさん、なにか欲しいものがあるんですか？」
「いや……高価なものは買えないけど……これなんか、どうかと思って」
ロイドは《ラバーストラップみっしぃ》を手に取り、差し出した。
ぶんぶんとティオが手を左右に振る。
「そんな、悪いです。連れてきてもらったうえに」
「いや、今日はチケットまで用意してもっちゃったからね。ティオさえ気に入ったなら、贈らせてくれないか？」
「もちろん、かわいいと思いますけど……」
ティオが目を輝かせる。
「じゃあ、これを……」
「ロイドさん……」
そのとき、楽しいテーマパークに不釣り合いな甲高い悲鳴が聞こえてきた。
「なんだ⁉」
「なにごとでしょうか⁉」
商品はいったん置いて、ロイドは悲鳴のしたほうへと走りだす。すぐ後をティオも追いかけてきた。

逃げて来る客たちの間を縫って、ロイドたちは広場へと出た。
そこには、ペンギンに似た青色の魔獣が！
「ペングーだ！」
広場に青色のペングーが二匹いる。
まさかテーマパークに魔獣が出るとは思わなかった。
「ロイドさん、あれを！」
ティオが指さした先には、逃げ遅れている子どもの姿が。男の子がふたり、怖すぎて腰が抜けてしまっているらしい。
「あわ……わわ……わ……」
「うわーん‼」
そのふたりをかばうようにして、みっしぃが立ちふさがっている。
テーマパークのマスコットなのに⁉
ロイドは素手のままだが、ためらっている暇はなかった。市民の安全を守ってこその警察官──特務支援課だ！
全力で駆け寄り、ペングーの前へと飛びだす。
「クロスベル警察です！　ここは俺たちに任せてください！」
「みなさん、早く逃げてください」
ともに駆けつけたティオが、市民を安全なところへと誘導する。
子どもたちの手を引きながら、みっしぃが頭をさげた。
「みししっ、ありがと～」
こんな状況にもかかわらず役柄を崩さないとは……ロイドは妙なところで感心してしまった。
ティオは感動に震える。
「じーん……特務支援課に出向して以来、こんなにうれしかったことはありません」
「えぇっ、そこまで⁉」
「負けられませんよ、ロイドさん」
「あぁ、もちろんだ！」
ティオが魔法に意識を集中させる。足元に魔方陣が浮かびあがった。
「……エニグマ、駆動」
「速攻でケリをつける！」
今にも飛びかかってこようとするペングーの機先を制して、ロイドは間合いを詰めると

拳を叩きつけた。
ぎょわ！　ぎょわ！　とペングーが声をあげて、のけぞる。
「……ぐッ‼」
ロイドの拳に痛みが走った。
もう一体のペングーが嘴でつついてきた。
キシャー‼
おじぎするような動作は愛嬌があるものの、ハンマーのように重たくて固い嘴を体ごとぶつけてくる攻撃だ。その威力は半端ではなかった。
「ぐあっ⁉」
「ロイドさん⁉　この……ダイアモンドダスト‼」
足元に冷気が広がる。
ペングーの周囲に白い結晶が集まった。
氷の槍が現れる。
魔法で作られた無数の氷槍が、魔獣へと向かって飛ぶ。
命中するたびに冷気を撒き散らして氷が砕け散り、美しい輝きを放った。
水系の強力な攻撃魔法だ。
ぎょわ〜〜ッ⁉　と青色のペングーたちが悲鳴をあげる。

がっくりと動かなくなった。
どうやら魔獣たちは戦意を喪失したようだ。
ティオが息をつく。
「ふぅ……敵集団、撃破しました」
「やったか……」
ところが、またも甲高い悲鳴が聞こえた。
広場にある建物の陰から、赤色のペングーが現れたからだ。しかも、八匹も！
ロイドの背筋が凍りついた。
――あんなにも数が多いなんて‼　ふたりだけでは、防ぎきれない。
魔獣たちが、グアグアと叫びながら、逃げる客を追いかける。
「やめろー‼」
ロイドは駆けつけて、赤色ペングーの横面に一撃を食らわせた。相手の注意を引きつける。
しかし、多すぎる。
六匹ほどが散り散りになって客たちを追いかけ回す。
ティオの魔法も、これほど散り散りになられては、効果範囲に捉えきれない。
――このままでは、みんなを守れない！

「くっ……どうすれば⁉」
そのとき、物陰から長身の男が走り出てきた。
聞き慣れた声が響く。
「こっちは俺に任せときな！　おおぉぉぉ……‼　クリムゾンゲイル‼」
巨大な斧槍が、ペングーたちを薙ぎ払った。
続いて、発砲音があがる。別の方向へと走っていたペングーがもんどりうって倒れた。
「ここは通さないわ！」
現れたのは、パールグレイの長髪をなびかせる美しい少女だった。
ロイドは驚いて声をうわずらせてしまう。
「ラ、ランディに、エリィも⁉」
ティオも目をしばたいた。
「……おふたりとも……どうしてここに⁉」
離れたところから、「ロイド、ティオ、がんばれー‼」と声がした。
「キーアまでいるのか⁉」
「おしゃべりは後だ！　こいつが必要だろ、ロイド！」
ランディが放り投げたのは、使い慣れた装備(トンファー)だった。
「持ってきてくれたのか⁉」

「こんなこともあるかもしれん、ってセルゲイ課長がな！」
「すまない、ランディ‼」
ティオが再び魔法の魔方陣を浮かびあがらせる。
「エニグマ、駆動……みなさん、お願いします！」
「まかせて！」
「おっしゃぁッ‼　とっとと終わらせるぜ！」
「よし、一気に行くぞ！」
ランディたちの加勢を得て、ロイドとティオは魔獣を撃退することに成功した。

魔獣が現れた原因は、柵の取りつけ不良だった。
弱っていたところがあって、壊されて入ってこられてしまったらしい。
ミシュラムの保安責任者が何度も頭を下げて感謝してくれた。
それよりも、ティオには、みっしぃのお礼ひと言のほうがうれしかったようだが……
「本当にありがとうございました！　今から、すべてのフェンスを入念に点検しなおし、がっちり補強します‼」

責任者の人が固く約束してくれた。
ロイドはうなずいて返す。
「そうしてください。楽しい場所だからこそ、安全第一ですからね」
ＭＷＬを出た頃には、すっかり西日が差していた。
「いや〜、だいぶ遅くなっちまったな〜」
ランディがぼやく。
キーアが大きなあくびをして、エリィが気遣う。
「自分で歩ける？」
「へーき……むにゃ……んにゅ」
いつも通りの平和な特務支援課の風景だ。
ティオがジト目なこと以外。
「……それで？　どうしてミシュラムにいたのですか？」
「ギクッ」
ランディが目を逸らす。
そういえば、とロイドは小首をひねった。
「たしかに妙だな。ランディもエリィも非番じゃないはずなのに」
「あ、いや……今日のは支援要請だったんだ。そうだよな、お嬢？」
「えっ⁉　私に振られても……」
「エリィ〜、もう隠れんぼしなくていいの〜？」
「ちょっ、キーアちゃん⁉」
ティオの表情が曇っていく。
「……つまり、わたしとロイドさんを、つけてきたのですか？」
「えっ？　そうなのか？」
ぶんぶん、とランディが首を横に振った。
「ち、違うって！　偶然！　お、俺は……そう！　お嬢とデートしてたんだよ！」
「ええっ⁉　じょ、冗談じゃないわよ！　そんなこと絶対にしません！」
「お嬢、ここは話を合わせるとこだろ⁉」
「そんなこと言われても……だ、だめよ、そんなの」
頬を染めてエリィがうつむく。
ティオが口をへの字にした。
「エニグマ、駆動……」
ぶおん、と魔方陣が広がっていく。
「えっ、ティオ⁉」

慌ててロイドは止めに入るけれども、気づくのが遅れた。
耳まで真っ赤にしたティオが、ランディへと手を突き出して――魔法を発動する。
「お仕置きです！　アイスハンマー!!」
「うひゃ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!?」
夕焼けに染まるミシュラムの桟橋に、騒がしい悲鳴が響きわたるのだった。

第2話

『エリィと仔猫の内緒話』

英雄伝説 零の軌跡
～午後の紅茶にお砂糖を～

第2回

特務支援課メンバーが過ごす

クロスベル自治州のゆる～い(?)日常!

エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、『碧の軌跡』シリーズ。続編となる『閃の軌跡』、『創の軌跡』においても激動の中にあり、様々な壁が立ち塞がっていたが、怯むことなく立ち向かっていったのがロイド・バニングス率いる特務支援課メンバーだ。そんな特務支援課メンバーが、もしかしたら過ごしていたかもしれない日常を描く、魅力たっぷりの一冊をご堪能あれ!

しとしと雨が降っている。
深夜に落ちはじめた灰色の雫は、翌日の昼を過ぎても止む気配さえない。
今日は急ぎの支援要請もないので、ロイドは特務支援課の会議スペースで書類を広げていた。
そこへ、エリィがやってくる。
「おつかれさま、ロイド。紅茶をいれたわ」
「ああ、ありがとう」
置かれたふたつの白いティーカップには琥珀色が揺れ、ほのかに湯気があがっている。
エリィが隣の席に腰掛けた。パールグレイの長い髪をかきあげ、自分のぶんのティーカップを傾ける。
ついロイドは見とれてしまう。
知的な眼差しと均整の取れたスタイル。上品な美貌と、落ち着いた雰囲気……まるで美術館の絵画のように完成されていた。
特務支援課で同僚になってからしばらく経つが、いまだに彼女とふたりきりになると緊張することがある。
エリィは同い年とは思えないほど大人びて、美しい少女だった。
「これは《黒の競売会（シュヴァルツオークション）》の報告書かしら？」

「え？　あ、うん……いろいろあったから、セルゲイ課長に報告するにしても説明することが多くなっちゃってさ」
「たしかに、たくさんの事があったものね」
「思い出してみると自分でも驚くよ。変装までして乗り込んだなんて」
「ロイドのフォーマルな格好、なかなか似合ってたわよ？」
「か、からかわないでくれよ」
「うふふ……」
　エリィの白い指が書類のうえで円を描く。
「ここには会場内の見取り図を入れるのかしら？　よかったら手伝うわ」
「俺は助かるけど……エリィだって忙しいんじゃないのか？」
「急ぎの用事はないから平気」
「そうなのか？　ありがとう、エリィ」
「な、仲間だもの、助け合うのは当然でしょう？　むしろ、最初から頼んでくれていいのに」
　彼女は照れたように視線を手元に落とした。
　エリィはクロスベル市長の孫娘であり、政界に進むために高い学識を身につけている。今は、理由あって警察に身を置いているが。
「エリィがいてくれてよかったよ」

「あら、こんなときだけ？」
「そんな意味じゃないさ……エリィにはいつも助けてもらってる。エリィがいてくれたから、ここまでやってこれたんだ。これからもずっと一緒にいて、助けてほしい」
「え………それって……」
　エリィの顔が耳まで赤くなっていった。
「書類の作成だけじゃなく、捜査のときや、魔獣との戦いのときにも、すごく助かってる。エリィのオーラレインがなかったら、なんど全滅しているか――」
「……はぁ……まったくこの人は……」
　頬を染めた彼女が、がっくりと肩を落とした。
　ロイドは首を傾げる。
「ん？　どうかしたのか、エリィ？」
「……どうせ、そんな話だろうと思ったわよ。はぁ……早く書類を片づけてしまいましょう」
「あ、ああ……？」
　そんなことをやっていたら、玄関扉が勢いよく開かれた。
　元気のいい声があがる。
「ロイドー！　ネコさーん！」
「ん？」

大声をあげながら会議スペースに走ってきたのは、幼い女の子――キーアだった。なんと、ずぶ濡れで。
衣服は肌にはりつくほど水を吸い、ライムグリーンの髪からは、ぽたぽたと雫が落ちている。
ロイドとエリィは、あわてて立ち上がった。
「キーア、どうしたんだ⁉　傘は⁉」
「風邪ひいちゃうわ！　タオルを取ってくるわね」
「みゃ〜う」
キーアが鳴いた。いや、キーアの抱きかかえているものが。
駆け寄ったロイドに、ぬっと突き出されたのは――濡れてネズミみたいに細身になった仔猫だった。
「んとね、迷子なんだって」
キーアが答える。濡れた髪や衣服をエリィにタオルで拭かれながら。
「にゃおーん」

まるで会話しているかのように仔猫が鳴いた。
実際、キーアは動物の言葉が、かなり正確に理解できる不思議な力を持っている。
ロイドたちと出会った経緯も不可解だったし、名前以外の記憶を失ってもいる。なにかと謎の多い子だった。
それはともかく――
「迷子の仔猫か」
どうしたものか、とロイドは首をひねる。
耳から尻尾の先までずぶ濡れだった仔猫だが、今はエリィが用意したタオルにくるまっていた。
「みゃ〜う」
さかんに仔猫が鳴きはじめる。
「なんだろう?」
「まだ寒いのかしら?」
ロイドとエリィは戸惑ってしまう。
ふんふん、とキーアが仔猫の声を聞いてうなずいた。
「んとね……お腹すいたんだって」
「ああ、なるほど。今、サモーナとタイタンしかないけど、それでいいのかな?」

ちょっと前に釣りあげた魚の名を挙げる。釣りはロイドの数少ない趣味のひとつだった。
う〜ん、とエリィが小首をかしげる。
「仔猫には大きすぎないかしら？　食いしん坊なコッペにならいいでしょうけれど」
コッペというのは、この特務支援課のビルに住みついている黒猫だ。
ロイドが釣ってきた魚をあげると喜んでくれる。
「たしかに、仔猫には大物すぎるか」
にゃ〜にゃ〜と仔猫が鳴いていると、また玄関が開いた。傘をたたみながら小柄な少女が入ってくる。
「ただいま戻りました……今、猫の鳴き声がしませんでしたか？」
帰ってきたのは、ライトブルーの髪の少女――ティオだった。
その後ろに、大柄な赤毛の青年――ランディもいる。
「よお、なに集まってんだ？」
「お帰り、ティオ、ランディ……さっき、キーアが仔猫を拾ってきたんだ。迷子らしい」
「仔猫……ですか」
「こんな雨の日に迷子になるなんざ、ついてねえな」
「お腹を空かせてるみたいなんだけど……サモーナだと大きすぎるよな？」
「温かくしたミルクがいいかと」
「ああ、なるほど」
「すぐ用意するわね」
台所に向かうエリィに、ランディが声をかける。
「その後でいいから、俺たちの飯も頼むぜ？」
「ええ、忘れてないわよ」
ロイドの袖口を、くいくいとキーアが引っぱった。
「ん？　どうしたんだ？」
「ねえ、ロイド……ネコさん飼っちゃだめ？　めーわく？」
じっとキーアが見つめてくる。
不安と期待の入り交じった表情をしていた。
「もともと、コッペも住んでるわけだし、迷惑ってことはないけど……ちゃんと世話できるか？」
「うん！」
「よし、それなら後で課長にも言っておくよ。迷子ってことなら、元の飼い主が見つかるまで預かっておいたほうがいいだろうし」
「やった〜‼」
「わたしもお手伝いします、キーア」

「ありがとー、ティオ！」
「任せてください。キーアが喜んでくれるのなら、不眠不休でもへっちゃらです」
「うーん、仔猫のためにティオが倒れないでくれよ……？」
　ロイドとしては、仔猫やキーアだけでなくティオのことも心配してしまう。
　やれやれ、とランディが雑誌を片手にソファーへ体を沈めた。
「まぁ、がんばれよ」
　その顔をキーアがのぞきこむ。
「ランディは、ネコさんキライ？」
「べつに嫌いじゃねえさ、キー坊。でもな、俺は仔猫ちゃんのお世話をするのは、ベッドの上だけって決めてるんだ」
「ふーん、いっしょに寝てあげるんだね！」
「そうそう」
「ランディさん……最低です」
　ティオにジト目で睨まれて、ランディが雑誌に視線を落として逃げた。
　ふぇ……とキーアがアゴを上げる。
「……ふぇくしょん！」
「うわ!?」

　顔を寄せられていたランディがのけぞった。
　キーアが鼻をすする。
　ロイドはハンカチを手にして膝をつくと、鼻をぬぐってやった。
「大丈夫か、キーア？」
「う、ん……ぐしゅ……」
　ティオが床に落とされたタオルを拾いながら、キーアの服に触れる。
「タオルで拭いただけでは乾かないようですね。風邪をひいてしまうかもしれません。キーア、その濡れた服を着替えましょう」
「わかった！」
　言うが早いか、上着をつかんでまくりあげる。
　白くて細いお腹があらわになった。
「キ、キーア、まだ早いです。脱ぐのは着替えを用意してからです」
「ああ、そっか！」
「こっちに来てください。体が冷えているので、シャワーを浴びましょう」
「うん！」
　ティオがキーアを連れていく。
　ロイドとランディは、小さくため息をついた。

「本当に女性陣がいてくれて、助かるよ」
「まったくだ」

エリィが人肌に温めたミルクを用意してくれ、仔猫は一心不乱に舌を動かす。
前足を皿の中に入れてしまうほどの勢いだった。
ちょっと驚いた様子でエリィが見つめる。
「とってもお腹が空いてたみたいね」
「空腹のときに食べた物の味は、格別だからね」
「ロイドにも、そんな経験があるの？」
「ああ、警察学校のサバイバル訓練のときに……動けなくなるほど空腹になったんだ。ようやく食べられたときは、ごく普通の保存食が、それはもう涙が出るほど美味しく感じられたな」
「そ、それは大変だったわね」
仔猫の食事が終わる頃、シャワーを浴びて着替えたキーアとティオが戻ってきた。
「あったまってきたよー!!」

「お待たせしました」
ロイドとエリィとランディが応じる。
支援課のビルには、この五人と、セルゲイ課長と、コッペという黒猫がいて——
そして、もう一匹。
ぬっ、と姿を現した。
「…………………………グルル」
それは大型の白狼だった。ティオやキーアなら背に乗れてしまいそうなほど大きい。
ツァイトという。
この土地の伝承にある神狼そっくりの、風格と威厳に満ちた狼である。その迫力は軍用犬が恐れをなしてひれ伏すほどだった。
迷子の仔猫と目が合う。
小さな双眸に映りこむ伝説の白狼。
仔猫、固まった。
ガクガクガク、と震えはじめる。
「フゥ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～!?」
「……ガウ？」
「だ、大丈夫だからな！」

ロイドは仔猫を抱き上げた。
両腕の中に隠してやり、ッァイトが視界に入らないようにしてやる。
同時にティオが、指導に入った。彼女もキーアと同じように動物と会話ができる。
「ッァイト、小さい動物というのは、あまり恐がりすぎると体調を崩したり、死んでしまうこともあるそうです」
「ガゥ」
「そうですか、知っていますか。では、小さな仔猫がッァイトを見て怖がることも理解できますね？」
「ガオゥ、グルゥ」
「そうですね、街で暮らしている仔猫ですから、大きな動物を見慣れていないようです」
「……ガゥ」
「はい。そういうことなので、しばらくは、自重してください」
「グルゥ……ゥゥゥ……」
流れるような毛並みの尻尾が、へたりと垂れ落ちた。ふ～と鼻息をもらし、ッァイトが部屋から出て行く。
大きな体が、心なしか小さく見えた。
エリィが肩をすくめる。

「かわいそうな気もするけれど……仕方ないわよね。とっても怯えちゃってたもの」
「そうだな」
ロイドも同感だった。
キーアが仔猫のことをのぞきこむ。
「だいじょうぶ？」
「ああ、もう落ち着いたみたいだ」
仔猫は空腹と緊張から解放され、満腹感もあってか、うとうとしはじめていた。
ロイドの腕に体を預け、目を閉じる。
「わ～、赤ちゃんみたいだね！」
「たしかに、似てるかもしれないな」
「ねー？　ロイドは、結婚したら赤ちゃんほしい？」
キーアが無垢な瞳で見つめてくる。ピクッとエリィとティオが反応した。
じっと三人の視線が集まる。
当のロイドは弱り顔だ。
「子どもか……考えたこともないけど……」
「ほしくないの？　ロイドは、子どももキライ？」
「いや、子どもは好きだよ。そうだなあ……たぶん結婚したら欲しいと思うだろうな」

エリィとティオが頬を朱に染めた。
「そ、そうよね、結婚したら子どもは欲しいわよね……」
「ロイドさん、子どもが好きなんですね」
「えへへ……そっか。キーアも赤ちゃんほしいな！」
　にっこりとキーアが笑みを浮かべる。
　ぽん、とランディが頭をなでた。
「ほ～う、でもよ、キー坊は赤ちゃんの作り方なんて知ってんのか？」
「キーアは知らないけど……ランディは知ってるの⁉」
「当然だろ～」
「教えて！　教えて！」
「よしよし、このランディさんにまっかせなさい！　いいか、赤ちゃんってのはな、大人の男と女にしか作れないんだぞ」
「へー、大人……じゃあ、ランディとエリィならできる⁉」
「そりゃ、もちろん。たぶんな」
「ふぇ～……どうやって作るの？」
「俺とお嬢がか？　まぁ、誰でも似たようなもんだが、まずはベッドのうえで――」
　ふふふふふ……と凍えるような笑みをこぼして、エリィがランディの肩をつかんだ。

「なにを話しているのかしら？」
「え？　い、いや、ちょっとばかし社会の勉強を……いや、生物のほうかな？」
「ふふふ……まだ子どものキーアちゃんに、まさか妙なこと教える気じゃないでしょうね？」
「ランディさんこそ道徳の授業が必要かと」
　ティオが手厳しい。
　しかし、彼は悪びれずに返す。
「いや、俺は、赤ちゃんが欲しいというキー坊の将来のためにだな――」
「まったく、ランディは……子どもに子どもの作り方を教えないでちょうだい」
「キーア、学ぶべきタイミングを間違えると、こういう悪い大人になってしまいます」
「ふぇ～？　ランディ、悪いオトナなの？」
「うっ……」
「そうよ～、悪いことしたら謝らないとね」
「はい、その通りです」
「じー」
　エリィとティオとキーアに見つめられて、ランディは白旗をあげた。
「ううぅ……しーません」

「よろしい」
「反省してください」
「あはは……」
やれやれ、と見ていたロイドは肩をすくめる。
「とにかく……そろそろ、夕飯にしよう」
その提案に、みんなが賛成した。

セルゲイ課長が戻ってきてから遅めの夕飯を取って、そろそろ明日に備えて眠ろうか、という時間――
仔猫はタオルにくるまって眠っていた。
ところが、くしゅん、と小さなくしゃみをした。
「あら？　もしかして風邪をひいてしまったのかしら？」
エリィが不安そうにする。
ティオが仔猫の様子を確かめた。
「……体温は正常です。しかし、体力を消耗しているので、温かくして寝たほうがいいかと」
「なるほど」
どうしたものか、とロイドは考えこむ。
キーアが仔猫を抱きあげた。
「んじゃね、キーアがいっしょに寝る！　ロイドもいっしょに寝よ。いいでしょ？」
「え？　キーアの部屋で？」
「うん！」
「そうだな……それしかないか」
一階にはツァイトがいるし、弱っている仔猫をコッペのように屋上で寝かせるのは無理がある。キーアの部屋なら安心だろう。
ロイドが承諾すると、ティオがジト目になった。
「仔猫とキーアを独り占めですか、ロイドさん……あんまりです」
「そうよ、ずるいわ」
「エリィまで!?　じゃあ、やめておこうか？」
「ダメよ。風邪をひいたらどうするの!?」
「ど、どうしろと……」
「じゃあみんなで一緒に寝よー！」
キーアの言葉に、その場が凍りつく。

様々な思惑が錯綜しかけたが、「そんな大きなベッドはないから、無理だよ」というロイドのツッコミにより提案は却下された。
セルゲイ課長があくび混じりに言う。
「ロイド、しばらくはキーアと一緒に仔猫の面倒も見てやれ」
「あ、はい」
「キーア、いっしょにめんどう見る！」
おそらく、セルゲイ課長は〝キーアと仔猫、両方の面倒を見てやれ〟と言ったのだろうけれど。
いずれにしてもそういうことになった。

三日が過ぎて――
結局、仔猫はキーアの部屋で飼うことになった。
最初に寝かせたベッドを〝自分の寝床〟と覚えてしまったらしく、他に場所を作ってあげても、キーアの部屋の前で待つようになってしまったからだ。
仔猫の世話をするために、ロイドやティオも出入りするので、まるで共有スペースのような感じになっていた。
早朝、そんな猫部屋と化した304号室に顔を出すと、珍しいことに仔猫しかいなかった。
「あれ？　キーアはどこにいったんだ？」
ロイドは首を傾げる。
ふんふんふ～ん♪　と鼻唄交りでキーアが戻ってきた。
手には《霜降りヒレ肉》を持っている。
「はい、シロカゲ！　あ～ん」
シロカゲというのは、キーアが命名した仔猫の名前だ。
みっしぃと並んで人気キャラクターである《カゲマル》にあやかったらしい。
「にゃ……にゃ……にゃぁお～～ん」
そのシロカゲが目を白黒させて後ずさる。
差し出された肉のほうが、仔猫の体よりも大きかった。
「キーア、そんな大きな肉じゃ、シロカゲは食べられないと思うぞ？」
「ツァイトは美味しいって言ってたよ？」
「う～ん、ツァイトは食べられるだろうけど……もうミルクはないのか？」
「うん。切れてるみたい」

「そうか……いつもより減るのが早くなるものな。それじゃ、今から一緒に買いに行くか」
「やったー‼」
　ロイドはキーアを連れて出かけることにした。
　手早く外出の支度をさせる。
　階段を降りた。
　ちょうど朝食の準備をしていたエリィが声をかけてくる。
「あら、お散歩なの？」
「ミルクが切れたみたいだから、キーアと買ってくるよ」
「もうすぐ朝食だけれど……後にしたら？」
「モルジュに行くだけだから、すぐ戻れると思う。朝食の後は支援要請を受けたいし」
「そうね……なら、焼きたてのパンもお願い」
「了解」
「やったー、焼きたてパン！」
　はしゃぐキーアの手を引いて、ロイドはベーカリーカフェ《モルジュ》へ向かった。
　西通り――
　支援課ビルを裏手側から出てすぐ、パラソルテーブルのならぶオープンカフェがある。
　煉瓦の建物からはパンを焼く香ばしい薫りがただよってきていた。

　店内に入る。
　パン職人のオスカーが笑顔を見せた。
「おう、よく来たな！」
「おはよう、寄らせてもらったよ」
　オスカーはロイドの幼馴染みで、店主のモルジュの弟子だ。最近は新聞（クロスベルタイムズ）で紹介されるほどの腕前だとか。
「おはよー、オスカー‼」
「キーアちゃんも買い物を手伝ってるのか。偉いな」
「えへへ、オスカー、ミルクちょうだい！」
「おう、アルモリカ村から入荷したばかりの新鮮ミルクがあるぞ」
　ロイドは商品棚を見る。
「えっと……焼きたてパンだと……これかな？」
「焼きたてなのは、それと、これ。今日も新作パンがあるぜ。試しに食べてみてくれよ」
「いいのか？　ありがとう、オスカー。頂かせてもらうよ」
　そこへ、エプロン姿の少女が、カウンター裏にある厨房からトレーに焼きたてのパンを乗せてやってきた。
「はい、これ、焼きあがったばかりのクロワッサン」

モルジュの娘、ベネットだ。
ちらちらとオスカーのほうを気にしている。
ベネットは彼をライバル視してパン作りに励んでいるのだけれども……その当人にはまるで意識されていないという、ちょっと不憫な子だった。
「ちょうどいいタイミングだったな。ベネットの作るパンも最高に美味いんだぜ」
晴れた空のような笑みを浮かべて賞賛するオスカーの言葉に、ベネットがそっぽを向いて顔を赤らめる。
「と、当然じゃないの……」
ロイドは苦笑しつつトレーにならんだクロワッサンを取った。
「うん、たしかに美味しそうだ。それじゃあ、これも頂こうかな」
「あ、ありがとう」
ぺこり、とベネットが頭を下げた。
ロイドがオスカーと会計をしているとき――
ねえねえ、とキーアがベネットに耳打ちする。
「あのね……」
「ん？　なあに？」
「……ロイドがね、キーアの子どもがほしいって」

「はああっ!?」
信じられないものを見るような顔したベネットに、まじまじと見つめられた。
彼女たちの会話を聞いていなかったロイドは、理由がわらず『?』を浮かべる。
店を出るときまでずっと、ベネットが戸惑った様子だった。
「ミルクの瓶、キーアが持ちたい！」
「え？　でも、階段もあるし……結構重いぞ？」
「でも持ちたいんだもん」
「うーん、よしわかった。ミルクを運ぶのはキーアに任せるよ。ただし、両手でしっかり持つこと」
「うん！」
せっかくお手伝いをする気になっているのだから、と瓶を任せる。
ロイドは気遣いつつ、ゆっくり帰ることにした。

キーアの部屋のドアが、かすかな音をたてて開く。
廊下に人の姿はなく、部屋の中から出てくる人もいない。

もしも、誰かが見ていたなら風でも吹いたかと思っただろう。
ドアの隙間から、滑るように白色の仔猫が出てきた。
「にゃあ～～……」
シロカゲは無人の廊下を音もなく歩いていく。
たたた、と階段を降りた。
ソファーのならべられた応接スペース。そこで、青と白のマフマフしたものを見つけた。
「にゃおん？」
なんだろう？　とシロカゲは好奇心を発揮して、たしっ、と爪を立てた。
「…………」
ツァイトは朝のまどろみのなかにいた。
人ならざる鋭敏な感覚は、寝ていてさえ周囲の状況を把握する。むろん仔猫が近づいていることも察知していたが、どうせ気づいて逃げていくだろうと高をくくっていた。
しかし、どうやら身じろぎもしなかったせいで、ツァイトを置物かなにかと勘違いしたようだ。
だらんと床に伸ばしていた尻尾に、爪を立てられた。
なんの痛痒もない。

たとえ刃物や銃器であっても、己が傷つけられることなどないとツァイトは知っている。
あるいは、最強と名高い遊撃士――風の剣聖とやらであればわからないが。
たしっ、たしっ、と仔猫が尻尾を叩く。
毛の一本とて痛みはしないが、心地よい時間を邪魔されて、口の端が歪んだ。
重火器すら砕き散らす牙が、わずかに覗く。
どう自らの存在を知らせようか？
小さい存在に慈愛を示す白狼ではあるが、仔猫のおもちゃに甘んじるほど矜持を捨てているわけではない。
追い払う算段をしたとき、ふとティオの言葉が蘇った。
「小さい動物というのは、あまり恐がりすぎると体調を崩したり、死んでしまうこともあるそうです」
ティオやキーアが仔猫を大切にしているのは理解している。
ロイドは熱心に元の飼い主を探しているようだ。
エリィが常々仔猫の健康を気遣っているのも知っている。
そして、無関心を装いつつランディやセルゲイですら。

たとえば、今、ツァイトが立ち上がって――
爪を立てているのが巨大な狼の尻尾だったと、仔猫が気づいたら？
驚いて死ぬかもしれない。

「……ッ‼」

ツァイトは呼吸さえ止めた。

誇り高き白狼としては、仔猫殺しなどという汚名をかぶるわけにはいかなかった。

さっさと飽きてくれるのを祈るが、よほど気に入ったのか、仔猫は尻尾にじゃれついてきた。

「にゃゃあ～～～！」

さらに、爪を立てて背中へとよじ登ってくる。

「ふに！　ふに！」

好奇心と冒険心が小躍りをしているようだ。

痛くも重くもないが、むしろ転げ落ちないか心配だったし、なにより自分に気づくのではないか、と気が気ではない。

とうとう、仔猫はツァイトの三角の耳の間へと到達した。

「にゃゃあ～～～‼」

「………………」

ツァイトは石化でもしたかのように全身の筋肉を硬直させていた。

しかし、仔猫がうかつにも足を滑らせる。

転げ落ちてきた。

鼻先に爪を立てられる。

「～～～ッ⁉」

ツァイトは思わず鼻息を吹いてしまった。

仔猫が床に落ちる。

「ふぎゃ⁉」

ひっくり返った姿勢のまま見上げた。

目が合う。

お互いに固まった。

冷や汗が背筋をつたう。ツァイトは、かつてないほどドキドキしていた。

仔猫がガクガクと震えて――

ジョ～～～～、と絨毯のうえにアンモニア臭のするシミを広げた。

それから、おそらく仔猫にとっては全力で……ツァイトにとっては、ハラハラするほど前足と後ろ足をもつれさせながら、階段を駆け上がっていった。

「にぎゃ～～～～～‼」

「…………フゥ」

死ななくてよかった、とツァイトはため息をこぼす。

しかし、お気に入りの寝床には、すっかり仔猫の臭いをつけられてしまった。支援課の誰かが絨毯を洗うまで使い物にならないであろうことは疑いようがない。

「グルル……」

そのとき、ロイドとキーアが支援課ビルに戻ってきた。

ツァイトの横までできて、ふたりが立ち止まる。

「ん？　なんか臭うな……？」

「ほんとだね」

「これは……まさか……」

「あ～、ツァイトがおもらししてる～!!」

「なんだって!?」

「ガルゥ!?」

キーアに指さされて、ロイドよりもツァイトのほうが驚いた。

ぶんぶん、と首を左右に振る。

「ガウッ！　ガウッ！」

「ほえ？　ああ、ちがうの？」

キーアが言葉を理解できるおかげで、えん罪は晴れたが、いたく自尊心を傷つけられたツァイトだった。

仔猫が来てから一週間が経ち――

ロイドたちは会議スペースとしても使っているリビングで昼食を済ませた。

午後の支援課の活動をはじめようかと思った矢先、警察本部に出向いていたセルゲイ課長が戻ってきた。

「ロイド、ティオ、ちょっと来てくれ」

「はい」

「なんでしょうか？」

ふたりして課長室に呼ばれた。

「エプスタイン財団のロバーツ主任から、支援要請があってな。もう導力端末にも登録されていると思うが……」

「ロバーツ主任ですか？」

「なにやら、また面倒な予感がします」

ティオにとっては上司にあたる人物で、どうやら彼女のことを娘のように溺愛している様子なのだが、愛情表現が特殊すぎて、うまく伝わっていないらしい。
「どんな支援要請なんでしょうか？」
「それは依頼者から聞いてくれ。先方からお前たちを指名してきたんでな。知らぬ仲でもないし、なにか理由があるに違いない」
「わかりました」
「めんどくさいです」
「ティ、ティオ⁉」
「わかっています。ちゃんとがんばります」
いつにも増して平坦な口調のティオだった。
セルゲイ課長がタバコに火をつけ、ふぅ～と紫煙をくゆらせる。
「エプスタイン財団には、なにかと世話になってるんでな。できるだけの協力はしてやれ」
「ええ、確かに、導力ネットワークのおかげで、捜査も効率的にやれていますからね」
「ま、そういうことだ」
「ティオを支援課に出向させてくれたことにも、感謝しているし」
「あ………」
彼女の頬に微かに朱が差した。

くるり、とティオが背を向ける。
「……ロイドさん、早く行きましょう。他の支援要請もありますし、効率的に終わらせるべきかと」
「ああ……いや、ちょっと待っててくれ」
「どうかしましたか？」
「出かけることを伝えておいたほうがいいだろうし、仔猫(シロカゲ)のことを頼んでくるよ」
三階にある部屋を訪ねる。
ドアを開けたエリィが表情をほころばせた。
「あら、ロイド、どうかしたの？」
「支援要請があって、今から出かけるんだ」
「そうなの？　じゃあ、すぐに準備するわね」
「あ、いや……ロバーツ主任からの指名で、俺とティオだけで行くことになった」
「えっ、そうなの……」
エリィの表情が、すこし沈んだ。
それだけ積極的に支援課の活動に取り組んでいるのだろうとロイドは解釈する。
「すまない……そのうえ、こんなことを頼むのは気が引けるんだけど、でも頼れるのはエリィしかいなくて」

「えっ？　あの、なんでも言って、ロイド」
「ありがとう。じゃあ、シロカゲのことを頼む。キーアも今日は他の子どもたちと出かけてるんだ」
「あ……仔猫？」
「俺もティオもキーアも留守にするし、ランディや課長に頼むわけにもいかないからな。間違って外に出てしまったり、またツァイトのところへ行ってしまわないよう見てて欲しいんだ」
　ふぅ、とエリィがうつむく。
「そうね……必要なことだと思うわ」
「頼めるかな？」
「ええ、もちろんよ。心配しないでロバーツ主任のところへ行ってきて」
「ありがとう、エリィ」
　笑顔で見送ってくれた。

　エリィは読みかけの本を持ってキーアの部屋を訪ねた。
　ベッドで寝ていた仔猫が、「にゃお？」と鳴く。
「ん……シロカゲちゃん、いっしょにお留守番よ……」
「にゃおーん」
　エリィは椅子に腰掛け、本に目を落とした。
　こんなにゆっくりした時間を過ごすのはひさしぶりで、ずっと読むのを楽しみにしていた本なのだけれども——目が文字のうえを滑ってしまう。
「ふぅ……」
「にゃーご？」
　気がつくとシロカゲがベッドから降りて、エリィの足下に来ていた。
　首筋を脚にすり寄せてくる。
「もしかして、慰めてくれてるのかしら？」
「にゃおーん」
「……あの人は、どうして気づかないのかしらね？」
　ロイドの顔を思い浮かべると、エリィの気持ちは揺れてしまう。
　今までは、ひとりを寂しいなんて感じなかったのに。
　支援課に来て、ほとんどの時間を四人で過ごしたせいかもしれない。
「最近、いっしょにいることが減ったわよね。

それは、細かい支援要請が増えて、全員で行かなくなったせいもあるし……
ひとりひとりのできることが増えたせいもあるし……
仕方のないことだとわかっているけれど」
「にゃぁおお～ん」
仔猫を相手に人生相談なんて意味のないことだと思うけれど、だからこそ言えることもあった。
「もうすこし、いっしょにいてくれても……
最近はティオちゃんやキーアちゃんとばかりで。
あ、もちろん、私と彼はお付き合いしているとか、そういうのではないのよ⁉
だから、私といっしょにいる必要とかは、ぜんぜんないけれども！」
エリィは仔猫を相手に慌ててフォローする。その無意味さは承知しているが。
「……彼が、そういうことに関心がないのはわかってるの。
この街を守りたい……その正義感に一途な人だって、ちゃんとわかってる。
そこが、彼の魅力というか……
いいところっていうか……」
赤面してしまう。
仲のいい友だちにも、こんなことは言えないに違いない。

すっかり頬が熱くなっていた。
汗まで出てきた。
部屋の窓を開けて、外の空気を入れる。
ほてった首筋に心地よかった。
「ふぅ～……」
「にゃ～～ご」
「ん……平気よ。言ってるほど思い詰めてないわ。
今も同僚としては普通に接してくれてると思うし……
たぶん、頼りにされてると思うし……
それだけでも幸せなことだわ。
でも、たまにはプライベートで誘ってくれても……」
そうしないと、不安になるでしょ——という言葉は飲みこんだ。
「にゃぁおお～ん」
ふたたび、シロカゲが胸に首筋を寄せる。
胸に溜めこんでいたものを言葉にしただけで、ずいぶんと気持ちが軽くなった気がする。
興が乗ったエリィは「ロイドってば、あのときは、こんなこと言ったのに」だとか「ここまで言ったのに気づかないなんて」だとか。

要するに〝ロイドが朴念仁で寂しい〟というようなことを延々とシロカゲに語って聞かせた。
陽が傾き――
そろそろ夕飯の支度をしようかと立ち上がる。
「ふふ……すっかり聞いてもらっちゃったわね。もっとも、猫を相手に話したところで、誰かに言われることなんて……な……い……」
さんざん洗いざらいしゃべってしまってから、エリィは、今さらになって思い出した。

ティオもキーアも動物の言葉がわかる。

「きゃあああぁぁぁ〜〜〜〜!?」
ビクッ、とシロカゲが驚いて飛び退いた。
エリィは顔を青ざめさせる。
「な、なし！　今までの、なしね!?　お願いだから、聞かなかったことにして！」
「にゃ……にゃお……？」
「ああ、私には動物の言葉なんてわからないし……」
そもそも、どこまで理解されているのか。

忘れて欲しいと頼んだところで伝わるのか。
いつものエリィならば、仲間のスキルを把握して最善手を打つのだが、すっかり油断していたと言う他はない。
泣きそうだった。
そのとき、階下からキーアの甲高い声が聞こえてくる。
「ただいまー!!」
「キーア、帰ったら手を洗わないと」
「風邪の予防は大切かと」
「はーい！」
ロイドとティオも帰ってきたようだ。
どうしたらいいか、まったく考えがまとまらない。焦っているせいだとは思うが、落ち着かなければと思えば思うほど、思考が空回りしてしまう。
「あ……うぁ……」
階段を上ってくる足音がする。
「うーん、すっかり遅くなっちゃったな」
「これほど時間がかかるとは、予想外でした」
「シロッカゲ〜♪　シロッカゲ〜♪」

よりによって、動物と会話ができるふたりと、ロイドがやってくるなんて。
「にやゃゃあ～～～‼」
妙に興奮した鳴き声に、振り返る。
シロカゲが窓から身を乗り出していた。外を舞うチョウチョに前足を伸ばして。
「にゃっ！」
その身が、窓の外へと転げた。
――落ちる⁉
「だめぇぇぇ～～～～～～～～～～‼」
エリィは弾かれたように駆け寄ると、思い切り手を伸ばした。
シロカゲの体をつかむ。
しっかりと。
「ふにゃっ⁉」
「ほっ……」
安堵したのもつかの間、エリィ自身の体も、窓から大きく出てしまっていた。
石畳の地面が見える。
遠い。
部屋は三階だ。

この高さで、もしも頭から落ちたなら――
「い、いや……」
まだなにもできていない。
まだやりたいことがいっぱいある。
仔猫だって無事では済まない。
「た、たすけ……ロイド～～～～～～～～‼」
「エリィーーーッ‼」
叫び声がして、ドアが砕けんばかりに開かれた。
直後、外へと落ちかけていたエリィの脚が、がっしりとつかまれる。
止まった。
「あ……」
「大丈夫か、エリィ⁉」
「ロ、ロイド……？」
「ご無事ですか、エリィさん！」
「エリィ、だいじょーぶ⁉」
ティオとキーアも声をかけてくる。
安堵したとたん、すこし涙がこぼれてきた。

「くぅ……だいじょうぶ……あげてくれるかしら？」
「あ、ああ……」
エリィは胸にシロカゲをしっかりと抱きしめて、部屋に引き戻してもらった。

安堵のあまり、エリィは床にへたりこんでしまう。
「はぁ……ありがとう、ロイド……もうダメかと思ったわ」
「ふ〜、よかった」
彼のほうも、床に膝をついた。
あやういところで助けられたシロカゲをキーアが抱きしめる。
「よかったね、シロカゲ！」
「ほんとうです。エリィさんもシロカゲも無事でなによりでした」
ティオも胸をなでおろした。
申し訳なくて、エリィはうつむいてしまう。
「ごめんなさい……私が窓を開けておいて、シロカゲちゃんから目を離したばかりに……」
「いや、俺も窓を開けてたことはあるし、たまたまだと思う。それより、エリィが飛び出さなかったら助けられなかった」
「でも……」
「エリィ、シロカゲを助けてくれて、ありがとう」
「え、そんな……ロイドがいなかったら、私だって……」
「ありがとー、エリィ！」
「助けたのは事実なのですから、誇っていいのでは？」
「そう……かしら？」
「にゃーお、にゃっ、にゃっ……」
キーアの腕のなかで、シロカゲが鳴き声をあげた。
ティオとキーアが耳を傾ける。
「どうしましたか？」
「ふんふん……？」
「あ……!?」
すっかり忘れていた。
エリィはシロカゲに秘めた想いをあらんかぎり、それこそ日が暮れるまで打ち明けてしまったのだ。
青ざめた顔に気づいて、ロイドが心配そうに声をかけてくる。

「大丈夫か、エリィ、どこか痛めたのか?」
「う、ううん……違うの……」
「でも……」
「私なら、平気よ」
ティオとキーアが、シロカゲから話を聞いている。
知られるのは、すごく恥ずかしい。
けれども、こんな形ではあっても想いが伝わるのなら、それでも――
「ううぅ……でも、やっぱり……」
「やっぱり、どこか痛いのか、エリィ?」
目を伏せるエリィに、ロイドがそわそわと落ち着かない。
話を聞き終えたティオがうなずいた。
「わかりました……そう、伝えればいいのですね?」
「くっ……」
エリィは覚悟を決めた。
わたわたと《ティアラルの薬》やら《キュリアの薬》やらを取り出しているロイドを見つめる。
「ねぇロイド、ちゃんと聞いて」

「え?」
「ちゃんと……ロイドに聞いて欲しいの」
「あ、ああ?」
覚悟を決めた。
ティオが、いつも通りの平坦な口調で――
「ええと……
〝命の恩人の秘密を漏らすほど、あっしは野暮じゃありませんや。お嬢さん、安心してくんなせぇ〟
……だそうです。どういう意味でしょうか?」
「あはは、シロカゲは、ときどきわかんないこと言うよね!」
エリィは固まっていた。
――そういう性格だったの!? と衝撃を受けていた。
ロイドが首を傾げる。
「よくわからないけど……シロカゲは意外としっかり者みたいだな」
「あ、あはは……あははは………」
エリィは脱力のあまり、自分でもよくわからない笑い声をもらしていた。
つられるようにキーアも笑う。

ロイドとティオは、不思議そうに眺めていた。
そこに、ランディが入ってきた。
「よお、楽しそうにしてるとこ悪いけど……お客さんだぜ」
「え？　ああ、誰だろう」
「その仔猫も連れて行ったほうがいいぞ」
「ほえ？」
ランディにうながされて、キーアはシロカゲを抱いたまま一階に降りていく。
みんなが出てから、エリィは乱れていた衣服を整えて、後に続くのだった。

ロイドたちは玄関へと降りた。
来客というのは、遊撃士のリンとエオリアだった。
「おや、そいつが迷子の仔猫だね？」
「ああ！　ティオちゃん、いつ見てもかわいい！　お姉さんになでなでさせて～♥」
男勝りなのがリンで、ティオににじり寄っているのがエオリアだ。

「えっと……今日はどういった用件で？」
「この写真の猫を探してくれって、遊撃士協会（ギルド）に依頼があったんだよ」
　リンが写真を取り出す。
　見てみると、キーアの抱いているシロカゲそっくりの猫だった。
「元の飼い主からの依頼があったのか」
「ああ、ランディが〝支援課にいる〟って教えてくれたのさ」
　リンに水を向けられると、赤毛の青年がぽりぽりと頬をかく。
「まぁ、飼い主が探してるなら遊撃士協会のほうに話が行ってるんじゃないかと思ってよ」
「ランディ、飼い主を調べてくれてたんだな」
「別にたいしたことじゃねえっての。買い物のついでに寄っただけだ」
　ティオが眉をひそめて。
「それで……迷子の仔猫を探していたことと、わたしがなでられていることに関係はあるのでしょうか？」
「ん～？　ないわよ？」
　ぐいぐい、とティオがエオリアを押しのける。
　リンが肩をすくめた。
「いいかげんにしとかないと、嫌われるよ」

「ああん！　それはダメ！　お姉さん、泣いちゃう！」
　あちらのことは置いておいて——
　ロイドはキーアの傍らに膝をついた。
「キーア、シロカゲを……」
「うぅ～……」
　元の飼い主が見つかったといっても、キーアは別れを惜しんでいるようだ。
　こうなることは予想できたのに、自分のミスだ、とロイドは自責の念にかられる。
　そこへ、エリィが降りてきた。
「ロイド……まかせてもらっていい？」
「え？　ああ、頼む」
　エリィがキーアの前にしゃがみこむ。ゆっくりと諭すように話しはじめた。
「キーアちゃん……シロカゲちゃんの家族が見つかったのよ？　それは、うれしいことで

キーアがシロカゲに視線を落とした。
「うれしいね！　家族が見つかったよ、シロカゲ！」
「にゃゃゃあ～」
「えへへ！　シロカゲもうれしいって！」
リンがうなずき、エオリアがシロカゲを受け取った。
「ばっちり、元の飼い主に届けるよ」
「またね、キーアちゃん。それと、ティオちゃんも」
リンとエオリアが支援課ビルの玄関を出る。
ランディは軽く片手をあげ、ツァイトは階段の陰から見送っていた。
最後に、仔猫の鳴き声がした。
扉が閉まる。
「ふふ……〝ありがとう〟……だそうです」
ティオがつぶやく。
笑顔で見送っていたキーアが、ぽろぽろと涙をこぼしはじめた。
ぐっ、とエリィが抱きしめてあげる。
「えらいわよ、キーアちゃん」
「うえええええ～～～‼」

ロイドはそんな仲間たちを温かく見守っていた。

第3話『ノエルの休日』

雲ひとつない快晴だった。
東通りには風車や果物屋が商品を並べている。
ロイドは特務支援課の仲間たちと手分けして聞きこみをしていた。
もう昼過ぎだ。ひととおり情報を集めたし、そろそろ約束した合流場所へ向かおうか、
と思ったとき――
「ん？　あれは……」
白いニット帽とノースリーブセーターに短パンという愛嬌がありながらも快活な格好の
少女に目をとめた。
手すりにもたれて、ぼんやりと陸橋の下を走る導力列車を眺めている。
「やあ、ノエル曹長じゃないか」
「わわっ……ロイドさん⁉　お疲れ様です！」
私服だってのに彼女は、お手本として警備隊の教本に載りそうなほど寸分の隙もない敬
礼をした。
「はは……相変わらずだな。その服からすると今は休暇じゃないのか？」
「あ、そうでした。あわてると、つい出ちゃうんですよね」
「別にいいんじゃないかな」
「え？」

「それだけ、ノエル曹長が警備隊の仕事に真剣だってことだから」
「あ…………」
少女の頬が、わずかに赤くなった。
ノエル・シーカーが所属しているのは、この街（クロスベル）の警備隊だ。
警備隊は外敵から自治州を守るための組織であり、軍隊のようなものだが――政治的に
も地理的にもエレボニア帝国とカルバード共和国に挟まれた特殊性ゆえ、様々な制約を課
せられている。
名称や装備だけでなく、訓練の内容にまで。
「警察官の俺が知ってる事情なんて、ごく一部だろうけど、予算も装備も限られたなかで
他国の軍隊と同じ重責を担ってるんだ。警備隊は本当にすごいよ」
「うーん、そうなんですかね。目の前のことで精一杯やってるだけですけど……いまいち
実感ないです」
「……なにかあったのか？」
「え？」
「いつもより元気がないみたいだ。それに、たいてい休暇はフランと一緒なのに、今はひ
とりみたいだし」
ノエルとフランは姉妹で、とても仲がいい。ノエルは警備隊員でフランは警察官だが、

休日を合わせて出かけるほどで、とくに妹のフランが〝お姉ちゃん大好きっ子〟なのは警察内でも有名だ。

「ふふ……ロイドさんにはかなわないなあ……さすがは捜査官ですね」

「俺が聞いていいことなのかは、わからないけど……」

「いえ、せっかくだから聞いてください。といっても、情けない話になっちゃいますけど」

二日前――

ノエルは巡回の途中、古戦場の前でクルマを停めた。

助手席のバレル隊員が身を乗り出す。

「なんだこれは⁉」

「酷いですね」

古戦場は見通しが利かない地形のうえ、街道に比べて強い魔物が棲んでいるのでゲートで封鎖してあったのだが、それが何者かに押し破られていた。

ノエルとバレルは軽装甲車から降り、ゲートを調べる。

「魔法(アーツ)とか火薬ではなく、強い力で押し開けたみたいですね。ゲートが曲がっちゃってます」

「つ、強い力だって……？　まさか、大型の魔獣が……あわわ」
「いえ、これは……おそらく、導力車で押し通ったんだと思います」
「なんだって⁉」
「ほら、ゲートに黒色の塗料がついてます。タイヤの跡もありますし」
「なんだ、導力車の仕業か。ほっとしたよ……月の僧院のことを思い出しちゃったじゃないか」
「あのときは大変でしたね」
　ノエルは肩をすくめる。
　以前、月の僧院に出現した奇怪な魔獣を発見したとき、バレルが驚きのあまり寝込んでしまったのだ。
「ふふん、人間がやったとわかれば怖いことはないぞ。どこの誰だかしらないけど、きっちり捕まえてゲートを弁償させてやらないとな！」
「はい！」
「でも、ふたりだけで古戦場に入るのは危なそうだから、応援を呼ぼうぜ！」
「あ、そうですね」
　ノエルはエニグマ――通信機にもなる第5世代戦術オーブメントを取り出し、連絡を取る。

「はい、こちらタングラム門警備隊であります！」
「巡回警備中のノエル曹長です」
「お疲れ様です！」
「ソーニャ副司令に繋いでもらえますか？」
「すみません。副司令は、急に本部から呼び出されてご不在であります」
「また？　最近、多いですね……」
「なにかありましたか？」
「ええ、今、古戦場のゲートにいるんですが――」
　ノエルは状況を説明し、応援を要請した。
　ここまでは問題なかった。警備隊のマニュアル通りの手順だ。
　ところが、古戦場の奥から発砲音が聞こえてきた。
　ノエルとバレルは顔を見合わせる。
「ゲートを押し通った人が、戦ってるんでしょうか？」
「今のは、機関銃の音じゃなかったか？　ただの民間人じゃなさそうだぞ？」
「だとしても、誰かが魔獣と戦っているのは間違いありませんね……」
「なあ、ノエル曹長、妙なことは考えるなよ？　ゲートを壊して機関銃を持ってるようなヤツだぞ。応援を待って慎重に行動したほうがいい」

「たしかに、危険はあるかもしれません……でも、誰であろうと民間人を守るのは警備隊の重要な役目です。応援を待っていたら手遅れになるかもしれないんです！」
「う、うーん……ああ、もう……本当に月の僧院のときを思い出しちゃうよ。よし行こう、ノエル曹長！」
「はい！」

古戦場――
わずかなタイヤ跡を追って奥に進んだノエルたちは、ちょうど魔獣に囲まれているトラックを見つけた。
「黒色のトラック……‼」
「ノエル曹長の言ってたとおりだね。前のほうに傷がついてる」
箱形（バンボディ）トラックの周りには、黒ずくめの機関銃を持った男たちが、全部で四名ほど。
巨大な牙を持つトカゲのような魔獣――ブレードファングと戦っていた。
「くそっ！　ぞろぞろ寄ってきやがって！」
「おい！　もう充分だ、引き上げるぞ！」
「待て、導力車を攻撃されたらまずい……ん？」
「け、警備隊か⁉」

こちらに気づいたらしい。
ゲート破りの犯人と、魔獣――どちらも放ってはおけない。
ノエルは迷ったが。
「警備隊です！　魔獣はあたしたちに任せてください！　貴方たちには事情を聞かせてもらいます。そこで動かないでください！」
犯人たちの前に飛び出し、魔獣に電磁ネットを浴びせた。
バレルがアサルトライフルで支援する。
「命令、聞くかな？」
その懸念はノエルにもあったが、まさか魔獣と一緒になって犯人たちを攻撃するわけにもいかない。
黒ずくめたちが、ニヤリと笑った。
「助かったぜ、警備隊さんよ」
「くくく……まったくだな」
「よし、行くぞ！」
「急げ！」
連中はトラックに乗りこむと、ノエルの言葉など無視して逃げ出してしまった。
「なっ⁉」

「は～、やっぱりこうなったか……応援の連中が間に合ってればいいけど……」
「くっ……」
　ノエルたちは急いで魔獣を倒し、ゲートまで戻ったが、すでに犯人の姿はなかった。

　その日の夕方。
　本部から帰ってきたソーニャ副司令に、ノエルは古戦場での顛末を報告した。
「すみません……犯人を逃がしてしまって……」
「ノエル曹長の判断は正しいわ」
「しかし……」
　ソーニャ副司令は、ふたりだけで突入した危険性や、犯人を逃がしてしまった過失を「仕方がない状況」と言ってくれた。
　しかし、ノエルには自分が失敗したという思いが強かった。
　副司令が眉をしかめる。
「最近、珍しい魔獣を自治州外のコレクターに売るブローカーがいるらしいわ」
「魔獣をコレクション……ですか⁉」
「ええ、危険だと思うけれど、魔獣を保護する法律なんてないものね」
「古戦場には街道では普段見ることができないような珍しい魔獣がいます……つまり、今日の犯人は……」
「そうと決まったわけではないけれど」
「やっぱり、あたしが捕まえてれば！」
「ふぅ……仕方がないわね。ノエル曹長……」
「はい！　全力で捜索します！」
「そうね。ただし、三日ほど休みを取りなさい」
「ええっ⁉」
「これは命令よ。復唱」
「……あ、はい（イエス・マム）……ノエル・シーカー曹長……三日間の休暇を頂きます」
「ゆっくり街を見てくるといいわ」

「――というわけなんですよ」
　ノエルはうつむいて、肩を落とした。
　ずっと黙って聞いていてくれていたロイドが、ゆっくりとうなずく。
「なるほど。それで、休暇だっていうのに落ちこんでたのか」

「自分が情けなくて……ハァ……」
「うーん……でも、ソーニャ副司令は正しい判断だって言ってたんだろ？　俺も同感だな」
「でも、結局、犯人を逃がしてしまったから……」
「それは仕方ないんじゃないか？」
「警備隊は忙しいのに、こうして休暇を与えられてるのは、やっぱり反省しろってことだと思うんです。私は副司令のお役に立ててないのかも……」
「いや、ノエル曹長……君に限ってそんなことは――」
　そのとき、ロイドのエニグマに着信があった。「すまない」と断ってから彼は懐から取り出し、ボタンを押す。
「はい」
　スピーカーから少女の澄んだ声が漏れ聞こえてくる。どうやら、相手は特務支援課の仲間――エリィだった。
『ロイド、集合時間を過ぎてるけど……なにかあったの？』
「あぁ、ごめん。ちょっと話しこんでたんだ」
『まだ東通り？　もうみんな集まってるし、そちらに行きましょうか？』
「いや、大丈夫だ。予定通り中央広場で落ち合おう」
『わかったわ、待ってるわね』

　ロイドが通信を終えた。
　ノエルは申し訳なくて頭を下げる。
「すみません……お忙しいところ、長話してしまって」
「いや、俺のほうこそ途中になってしまって、すまない」
「あたしは大丈夫ですから、早くみなさんのところへ行ってあげてください」
「……わかった、また会おう。俺も、ノエル曹長にはゆっくり街を見てほしいな」
「え？」
「それじゃ」
　ソーニャ副司令と同じ言葉を残して、ロイドは足早に中央広場へと向かった。
　彼の姿を見送ってから、ノエルはため息をつく。
「ゆっくり街を見る……か。そんな気分でもないけど、線路ばかり眺めてるのも時間がもったいないかな」
　ノエルは龍老飯店（りゅうろうはんてん）で遅めの昼食を取ることにした。

龍老飯店の名物――天下一炒飯は、ぱらぱらの米粒にもかかわらず噛むとふっくらで、

口のなかで味と香りが広がる。
醤油と胡椒に、エビやカニなど海鮮の風味が添えられ、どれだけ食べても飽きがこない。
スープや餃子との相性も最高だった。
「ふぅ～、堪能したな～」
タングラム門の食堂にいるティマスの料理も美味しいが、この味はこの店でないと味わえない。
看板娘のサンサンが話しかけてきた。東方風のドレスがよく似合っている。腰まわりの細さなんて同性でも見とれてしまうほどだ。
「お客さん、いい食べっぷりね」
「え？　あはは……そ、そうですか？」
「おかわりはどうする？」
「ふふ、おなかいっぱいです。ごちそうさまでした」
「ありがとうね！」
ノエルは支払いを済ませると龍老飯店を後にした。

ぐっと伸びをする。
「う～ん、いっぱい食べたら、ちょっと元気が出たかな」

我ながら単純だなあ、と思う。
さて、次はどこへ行こう？
いつもならフランが新しい店とか、特売セールとか、イベントとか、あれこれ下調べしてくれるのだが、今回は急だったため、彼女のほうは休みを取れなかった。
フランのがっかりした声を思い出す。
「……なにか買っていってあげようかな」
東通りの屋台を眺めてみる。クマのヌイグルミも売っていた。
あのクマ、うちの子に似てるかな？　でもうちの子のほうがかわいいよね――なんて思ったり。
ふらふらと見てまわっていたら、ドンと肩が当たってしまった。
「あっ、すみません」
「へへ……いや、こちらこそ。よそ見してたもんでさ」
相手はノエルより少し年上くらいだろうか。背は高いが痩せており、ひょろっとした印象がある。
髪は長くて鎖のネックレスをぶらさげ、金の指輪をつけていた。物腰はやわらかいが、ちょっと威圧感がある。
「君さ、このへんじゃ見かけない顔だけど、旅行者かい？」

「え？　いえ……」
最近は休暇を取れてなかったし、フランと一緒だと東通りに来ることは少ない。
「ふーん、じゃあ、地元（クロスベル）の人？」
「そうですね」
「そうか……今、ひとり？」
「ええ」
「へへ……とっておきのお買い得品があるんだ。よかったら、特別にわけてあげるよ」
愛想のいい笑顔を向けてくるが、どうやら物売りのようだ。
「いえ、そういうのは……」
「そう言わないでさ。な？　こっちに来てくれよ。人前じゃ見せられないんだよね」
「……」
ただの物売りというには、すこし胡散臭い。
警察の真似事をする気はないが、詳しい話を聞いてみることにした。
東クロスベル街道へと伸びる通り道へと連れてこられる。
この時間に街を出入りする人は少ないらしく、周りは閑散としていた。
「そのお買い得品って？」

「へへ……幸運を呼びこむ魔法のアイテムさ」
「まさか……!?」
しばらく前に起きた事件を連想し、ノエルは警戒心を強める。
だが、彼が懐から出したのは、ぜんぜん関係のなさそうな品物だった。
「……メダル？」
「こいつは、幸運を呼びこむメダルさ。今なら半額にしてあげるよ。お買い得だろ？」
どこかの国の硬貨だろうか。初めて見るデザインだが、それほど特別な物ではなさそうだ。金や銀というわけでもないみたいだし。
「はぁ……たんなる縁起物か」
「本来は２００００ミラするが、１００００ミラでいいぜ」
「えっ!?」
法外な要求に絶句した。
「なんなら、持ってるミラ、全部でもいいけどな」
「あなたは……!!」
長髪の男から愛想笑いが消えていた。恫喝するような鋭い血走った目つきで睨んでくる。
気がつくと、ノエルの背後に似たような風体の男がふたりほど近づいていた。
仲間がいたらしい。

囲まれてしまう。
「へへへ……」
「お嬢ちゃん、さっさと買ったほうがいいぜ？」
「そうそう、幸運のメダルがあれば、ケガをしなくて済む。ありがたいだろ？」
「くっ……!!」
こんな連中でも市民は市民、警備隊員である自分がケガをさせるわけには。
しかし、これは犯罪だ。放っておくこともできない。
なんとかケガをさせずに捕まえて、警察に知らせないと、とノエルは、あれこれ考える。
男が怒声をあげた。
「さっさと出すもん出しな！　俺たちはこの街を牛耳っているテスタメンツなんだぜ!?
地元のやつなら、当然、知ってるはずだよな!?」
「なんですって!?」
テスタメンツは旧市街を根城にする不良グループだ。
しかし、そのリーダーは、一般市民への押し売りなどという卑劣な犯罪をさせる人物と
は思えなかった。
さほど面識があるわけではないが……
あのロイドが気を許すくらいには、筋の通った人物だったはず。

そのとき——
彼らの背後に、すっとひとりの青年が立った。
中性的な美貌の持ち主だった。皮肉めいた笑みを唇の端に乗せる。
「やれやれ、テスタメンツに君たちみたいな恥知らずがいたなんて、知らなかったな」
男たちが慌てて振り返った。
「なっ!?」
「なんだ、てめえ!?」
「ッ!?　待て……こいつは……!!」
長髪の男の制止も聞かず、ふたりが殴りかかる。
「すっこんでろ！」
「くらえ！」
「シッ」
短い呼気と同時に、青年が左手の拳を放った。
男たちには見えなかっただろう。
常日頃から警備隊で戦闘訓練を受けているノエルだからこそ、かろうじて動きを追うこ
とができた。
それほど、速い。

「ガッ……⁉」
「グゥ⁉」
うめき声をもらして、殴りかかった男たちふたりが膝をつく。
最初にノエルに声をかけてきた長髪だけは、青年を知っていたらしい。
「……ワ、ワジ」
「ああ、ワジ・ヘミスフィアさ。一応、テスタメンツのヘッドをやらせてもらってる。君のことは見たことないけどね」
「う、ううぅ……行くぞ、おまえら‼」
「ぐうぅぅ……」
「おぼえてやがれ……‼」
男たちが逃げていく。
ぽかん、と見ているとしかできなかったノエルだが、あわてて追いかけようとする。
「ちょ……あなたたち！　警察に……‼」
「いいから」
ワジに止められた。
その表情は氷のよう——今の男たちを寛大に許したという雰囲気ではない。
「なにか、あるの？」

「どういう意味だい、僕はべつになにも……おや、お姉さんは……」
「あたしは警備隊のノエル・シーカー曹長です」
「ああ、ロイドと一緒にトリニティに来たことがあったよね。軍服も似合ってたけど、今日の格好も、なかなかいいじゃない」
「そ、そんなことより……なぜ、あの人たちを逃がしたの？」
「あんなの小物だろ？」
「君は気にしないかもしれないけど……ああいうのを放っておいたら、この街が、どんどん市民にとって危険な場所になっちゃうんだよ⁉」
「やれやれ、またお説教かい？」
「必要なら何度だってします」
「……ただ逃がしたわけじゃないさ。あれは僕のほうで始末をつける」
「やっぱり、なにか理由があるのね」
「お姉さんは警備隊の人だろ。市内の治安なんて管轄外じゃない？」
「見なかったことにしろって言うの？　そんなことできないよ。管轄なんて関係ない」
「ふむ……困ったな」
「ちゃんと話して」
じっ、とワジを見つめる。

彼は視線を逸らしていたが、ノエルの真剣さは感じているはずだった。
「……人が見てるよ？　笑われてる」
「ごまかしたって無駄です！」
「やれやれ……仕方ない、ついてきなよ」

旧市街、プールバー《トリニティ》――
地下にあるいかがわしい雰囲気の店だった。
以前、来たことがあるが、あのときはロイドたちと一緒だった。
今はノエルひとりだ。
腰掛けたソファーの対面にワジが座っている。
彼の背後にはスキンヘッドで巨躯の男が立っていた。
そして、遠巻きにしているが、そろいの青装束をまとった男たちがこちらを見ている。
彼らこそ本物のテスタメンツだろう。
緊張する。
「……」

「ふふ……まさか、ここまでついて来るなんてね。ノエル、君って意外と迂闊じゃない？」
「一応、ワジくんを信用してるから」
「へえ？　そんなに僕と親しかったっけ？」
「そうね……正確には、あたしが信用してるのは、ロイドさんだと思う」
「ふぅん、なるほどね」
「ワジ君に多少の問題はあるかもしれないけど、あのロイドさんが信用している人なのだから、あたしも信用しようと思う」
「……ただの考えなし、というわけでもないいか」
「あの人たちを逃がした理由、教えてくれないかな」
「ＯＫ」
ワジが指を鳴らすと、テスタメンツのひとりがワインとグラスを持ってきた。
手慣れた様子でグラスにワインを注いでいく。
「ちょっと君、未成年でしょう!?」
「前にも言っただろ？　ノンアルコールさ」
「し、信用できません！」
「……今、僕を信用してるって言ったばかりじゃないか……ほら、君も試してみたら？」
「う……」

ノエルは差し出されたグラスを受け取りはしたものの、口はつけなかった。

「さて、連中に関してだけど……これはアッバスのほうが詳しいかな」

話を振られ、ワジの背後にいる大男が口を開いた。意外にも落ち着いた口調で、まるで神父のようだ。

「三ヶ月ほど前のことだ。彼らはテスタメンツに入りたいと言ってトリニティにやってきた。ちょうどワジは留守にしていたが、そもそもテスタメンツはワジを信望するメンバーが集まって自然とできたもの……入るのも出るのも、決められたルールは存在していない」

「それじゃ、彼らはメンバーの一員なんですか？」

「いや。いくらルールはないといっても、不適格な者であれば、俺が入団を拒否している」

「え？　でもワジ君がテスタメンツのヘッドのはずじゃ……」

「チームのことはアッバスに任せてるからね」

「そ、そうなんだ……」

不良グループのイメージからは遠いけれど、そんなこともあるのかもしれない。

アッバスが話を続ける。

「俺の見立てでは、あの者たちは表で恭順を示しながら裏で悪事を働くような輩に思えたのでな」

「ちょっと会っただけで、そんなことまでわかっちゃうんですか⁉」

「その後、街で恐喝をすることまではわからなかったがな」

アッバスは口を閉ざした。

テスタメンツのメンバーから渡されたメモを見ていたワジが、話の後を継ぐ。

「まぁ、そんなわけで……彼らはテスタメンツってわけじゃないけど知らん顔もできないからね。この件は僕たちが始末する。警察や警備隊はお呼びじゃないのさ」

本来ならば、当然、警察に通報するべきだろう。

しかし、彼らは街の不良グループだ。そんな理屈が通じるはずもない。

「あれ？　でも、おかしくない？　それなら、なおさら逃がした理由がわからないんだけど……」

「群れないと悪さもできない小物たちが、テスタメンツを騙ってメダルの押し売りなんて、ちょっと巧妙すぎると思わない？」

「あ……言われてみれば……」

「黒幕がいるのさ。そいつは街の不良を使ったり、以前のマフィアのルートを利用して、ずいぶん強引にミラを掻き集めてるみたいだ」

聞き捨てならない言葉が飛び出して、ノエルは身を乗り出した。

「マフィアのルート⁉」

「もう、個別の事件については警察が動いてる。特務支援課にも要請が行ってるみたいだ

よ？」
「なっ!?」
警察の一部署である特務支援課への要請が、こんな不良グループに流れているなんて驚きだった。
あとでフランに伝えておかなければ、と思う。
ワジがグラスを傾ける。ルビー色の液体が形のいい唇を濡らした。
「ふふ……おしゃべりはおしまいだよ。これから僕は用事がある。さあ、お客様がお帰りだ」
彼がソファーから立ちあがる。
同時に、テスタメンツのメンバーたちがノエルに近づいてきた。
まるで教主に従う信徒のようだ。
先ほどの長髪の男たちとは全く違う不気味な威圧感。
「くっ……事情を知った以上、あたしだって見て見ないふりをすることはできない！」
「ワジの言葉は絶対だ。ここは帰ってもらおう」
「きみ、ボタンが取れかけてる！」
「え？」
ノエルに手を伸ばそうとしていた青年が、あわてて胸元を確かめる。
「そっちのきみはリストバンドが緩んでる！　制服を着るなら、きちっと着なさい！」

「や、Ja（ヤー）」
もうひとりのメンバーも、ノエルに気圧された。
このまま黙って帰るわけにはいかない。
「ワジくんの〝用事〟って、その黒幕に絡んだことだよね？　それなら、あたしも行く。このまま放っておくなんてできないもの！」
「やれやれ、そのクソまじめな性格、誰かさんを思い出すね。これは、なにを言ってもムダかな？」
「ちゃんと戦力になるから」
「その格好でかい？」
「非番だけど、緊急招集に備えて最低限の装備はもってきてる」
ノエルはバッグからサブマシンガン（ラピッドフレイム）を取り出した。
ぴしっ、と見せつける。
ところが、ワジが肩を揺らして苦笑した。
「いや……そういうことじゃなくてさ。ふふ……アッバス、こちらのお姉さんに服を用意してくれるかな？」
「いいのか？」
「まぁ、女性が同伴してるほうが警戒されにくいしね」

ノエルの頭に「?」マークが飛んだ。
てっきり黒幕の居場所に乗りこむのだと思っていたのだが、違うのだろうか。
「僕の見立てては、84、60、86でDってところかな」
「え？ あっ!? ちょっ……ええええっ!?」
ノエルは思わず胸元を両手でかばった。ちゃんと服を着ているのに、まるで裸にされたみたいに恥ずかしい。
「その反応は当たりみたいだね」
「ふむ、ではすぐ用意しよう」
淡々とアッバスがうなずく。
「な、なに？ 服って、どういうこと!?」
「ふふ……最高級のレストランに入るなら、ドレスは当然じゃないか」
ワジが貴婦人をエスコートするホストの笑みを浮かべた。
そういえば、彼の副業は……

歓楽街——

ノエルたちはクロスベルが誇る最高級レストランのひとつ《プレミアム》の前にいた。
細長い塔のような建物が全てVIPをもてなすための店になっている。
夜の街で窓明かりに照らされ佇む、蒼い正装に身を包んだワジは、まるで物語の世界からやってきたかのようだった。
「ヒールは低めにしたけど、慣れないかな?」
「え？ あ、うん……それに、このひらひらしたのが……」
ノエルに用意されたドレスはピンク色で、フリルスカートはかわいらしいが、胸元も背中も開いた艶っぽいデザインだった。
恥ずかしくて外に出られない、と半泣きになっていたら、ワジが白いファーショールを羽織らせてくれたのだ。
一応、気遣われているのかもしれない。
上等な絹に、本物の毛皮。
形のいいリボンと、揺れるフリル。
——こんなの、フランだったら似合いそうなドレスだけど、あたしには似合ってないだろうな——とノエルは、こっそりため息をついた。
「レストランに入れば、しごく当然の格好さ。あまり恥ずかしがってると目立っちゃうよ?」
「そ、そうだよね……」

ノエルは警察官ではないが、これは潜入捜査のようなものだ。おどおどして犯人に警戒される新米みたいな失敗はしていられない。
小さなバッグに納めた銃の重みを確かめる。
「大丈夫……行こう、ワジ君」
「……へえ、仕事をする顔つきになったね」
ワジに連れられて、ノエルは《プレミアム》の四階を訪れた。
黒を基調とした内装。
意外と柱が多く、テーブルのほとんどに視界が通らない。
個室のように区切られてはいないのに隣の客と目が合うことはない。そんな造りだった。
店の奥にはグランドピアノが置かれ、綺麗な女性ピアニストが静かな曲を奏でている。
「見てごらん、奥のほう」
「ピアノの横？」
黒色の扉があった。
「ああ……詳しいことは、テーブルで話そうか」
「うん」
「足元が暗いから、気をつけて」
すっと、左手を取られる。

ごく自然な動作なものだから、思わず手を預けてしまった。
「あ……」
今さら急に離したら、変に目立ってしまうだろうか。
うつむく。
いつもノエルは警備隊で戦闘をこなしているから。
女性らしいすべすべした肌ではない、と思われやしないか、気になってしまった。
まさか尋ねるわけにはいかないけれども。
「うぅ……」
ウェイトレスに案内されて、ノエルたちは入口近くの席に腰を下ろした。
このテーブルも他から柱の陰になっている。
「ピアノの横にドアがあったろう？」
「うん」
「あの先がＶＩＰルーム。今回の事件の黒幕は、そこにいる」
「え⁉　どうして、そこまでわかってるの……？」
「街で悪さをしてる小物たちが、僕に締め上げられたんだ。当然、ボスのところへ行って、こう尋ねるだろう。〝ワジに目をつけられた。どうしたらいい？〟ってね」
「そのために、彼らを逃がしたの⁉」

つうっ、とワジが人差し指をノエルの唇に触れた。
「レディが……大きな声を出したらだめだよ?」
「ご、ごめん」
マナー違反でもあるが、そもそも目立ってしまってはいけない。そのうえ、唇に指先で触れられて、ノエルは恥ずかしさに顔が熱くなった。
きっと耳まで赤くなっているに違いない。
ウェイトレスが注文を取りに来た。
ワジがメニューも見ないで料理を選び、すらすらとワインまで注文する。
「ちょっと、ワジ君……」
「目立たないほうがいいだろ?」
「ぐっ……」
さすがのノエルでも、ここで言い争うほどバカではない。飲まなければいいだけだし、犯人たちに気づかれないほうがいい。
店員が一礼して立ち去り、またふたりきりになる。
「ふふ……さしずめ、若いホストと、初めてホスト遊びをする良家のお嬢さんってところかな?」
「はぁ!?」

「僕がホストだってことは、店の者たちは知ってるし。そう思われてたほうが好都合だろ?」
「う……ま、まぁ……」
「それで、さっきの話の続きだけど――」
「だいたい、わかったわ。ワジ君は、わざと逃がして仲間に後をつけさせたんでしょ?」
「正解」
「そして、あたしと話してるうちに、その仲間が戻ってきてメモで報告したんだよね」
「へえ？　メモを見てたことに気づいてたんだ。なかなか、やるじゃない」
「ソーニャ副司令の薫陶(くんとう)を受けてるから」
「タングラム門の副司令か。聞いたことはあるよ、有能らしいね」
「そりゃもう、実質的に警備隊のトップと言ってもいいくらいだし」
「今度、司令に就任するらしいじゃない」
「えっ!?　まだ一般への情報公開はしてないのに!?」
「ふふ……でも警備隊のなかでは発表されてるだろ?」
「それは、まぁ……あ、言えないよ」
ウェイトレスが前菜(オードブル)を運んでくる。お皿の絵が透けるほど薄く切られたハムが乗っていた。
ノエルは目をしばたたく。

「これが高級なんだね……警備隊の食堂だと、お皿にどっさり盛られてるんだけどな……すごく高いのに量が少ないなんて、ちょっと不思議な感じがする」
「食べてみれば、肉の魅力が量と歯ごたえだけじゃないってわかると――」
　ワジが声を潜めた。
「……出てきたよ」
「ッ⁉」
　柱と柱の合間から見覚えのある長髪と、その仲間たち――三人組の姿が見えた。
「ビンゴ。報告は正確だったね」
「なんとか隙を見つけて捕まえないと……」
「いや、僕たちのターゲットは、ＶＩＰルームの中のほうさ。小物はアッバスに任せよう」
「来てるの？」
「ぞろぞろ大勢で動いたら目立つから、僕たちの後から来て、このビルの外で待機する手筈になってる」
「そうなんだ……ワジ君もだけど、あのアッバスさんも、とてもただの不良とは思えないんだけど」
「ふふ……そうかい？」
　三人組がテーブルのそばを通り過ぎ、そのまま店の外へと出て行く。

　気づかれないよう、ノエルたちは前菜を食べて客のふりをし、やり過ごした。
「ふぅ～、行ったみたいね」
「前菜（オードブル）、なかなか美味しかったろ？」
「う……舌のうえでとろける肉があるなんて知らなかったわ。これは、ちょっとダメかも」
「おや？　お口に合わなかったかい？」
「しばらく他のハムが食べられなくなっちゃいそう」
「ふふ……次はスープ、その次は魚料理が出てくると思うよ」
「そうなんだ。はぁ～……他の料理も食べてみたいけど……そういうわけにはいかないものね！」
　ノエルは苦笑しながらバッグを手に取る。見た目に反した重みが、今は心強い。
　肩をすくめてワジが席を立った。
「――じゃあ、行こうか」
「ええ！」

ワジが顔見知りのウェーターに耳打ちし、店から人払いするよう言いつける。

ノエルはバッグからサブマシンガンを取り出し、ピアノの近くにあるドアを引き開けた。
踏みこむ。
「全員、動かないでください！」
室内の者たちへと銃を向けた。
中央にテーブルがあり、酒瓶がならんでいる。左右向かい合わせのソファーに、四人の男たちが座っていた。
黒ずくめの格好をした男たちが、驚愕に目を見開く。
「なっ⁉　なんだ、てめえら⁉」
「警察か⁉」
「うわぁ、う、撃つな！」
「チッ……あのガキども、つけられやがったか……」
腰を浮かしかけた相手にノエルは銃口を向ける。見覚えのある連中だった。
「あ、あなたたちは！」
「おや、知り合いかい？」
一緒に部屋に踏みこんだワジが、意外そうな声で訊いてきた。
ノエルは視線を犯人たちから外さず、うなずく。
間違いない。

「ええ……先日、古戦場でね」
黒ずくめの一人が気づいたようだ。
「もしかして、おまえ……あのときの警備隊か⁉」
「そうです。魔獣から助けてあげたのに、無視して逃走したのはあなたたちですね？　今度こそ、じっくり事情を聞かせてもらいますよ⁉」
ワジが小首を傾げる。
「この連中は、マフィアのルートを使ってミラを集めてるらしいけど、そのとき警備隊に見つかったのかな？」
「おそらくね……珍しい魔獣をコレクターに売るブローカーじゃないかって、ソーニャ副司令は言ってた」
「魔獣を？　それは妙な商売をはじめたものだね。ふむ……もう他の裏組織が台頭してるから、まともなルートが残ってなかったのかな」
チッ、と黒ずくめのひとりが舌打ちする。
「よく知ってるじゃないか……ワジ」
「君の名前は知らないけどね」
「俺はドゥッチオだ。まぁ、覚える必要はないがな……例の一件のせいでルバーチェ商会は力を失い、ほとんどの取引先は黒月に押さえられちまった……だから俺たちは、工夫し

てミラを稼ぐことにしたわけさ」
「工夫？　無茶の間違いじゃない？　荒っぽい稼ぎ方だよね。警察に目をつけられ、警備隊と揉めて……ぜんぜん長く続ける気はないって感じだ。短期間で資金をためて外国に高飛びってとこかな？」
「なんですって⁉」
　ワジの洞察に、ノエルはもちろん、ドゥッチオたちも驚いていた。
「チッ……頭の回る面倒な野郎だ！　そのとおり、だから、俺の名前は覚える必要がないのさ。帝国へ行ったら変えるつもりだからな！」
　周りの黒ずくめたちから笑いがもれる。
「くくく……そうだな。帝国人らしい名前がいい」
「ギリアスってのはどうよ、大物になれるかもな！　ハハハ」
　ノエルは不審に思った。
　不良グループのヘッドであるワジがいて、銃を構えた警備隊の自分がいる状況で、なぜ彼らは落ち着いていられるのだろうか。
　切り抜ける策があるというのか。
　それは、いったい？
　ドゥッチオが胸元に手を置いた。

「ここには、導力通信機を改造したスイッチが入ってる……何に使うと思う？」
「仲間でも呼ぶつもり？」
「くくく……そんなものはいない。こいつは、爆弾に繋がってるんだ！」
「爆弾⁉　いったい、どこに……⁉」
「この建物の中さ！」
「そんな⁉」
　高級ホテル《プレミアム》には、大勢の重要人物が訪れている。
　もしも、爆破されて死傷者が出たら、大変なことになるだろう。
「俺たちはかまわないんだぜ？　ちょいと上のほうのフロアが吹っ飛ぶだけさ」
　ドゥッチオが胸元から、スイッチを取り出す。手に握れるていどの黒色の筒に赤いボタンがついていた。
　獣のような笑みを浮かべる。
「どうする？　その銃で俺を撃ってみるか？　もしかしたら、はずみでボタンを押しちまうかもしれねえけどな！」
「くっ……」
　ノエルは市民の安全を守る警備隊員だ。警察官と管轄こそ違うものの根底は変わらない。
　いや、どんな立場であろうと変わらないだろう。

犯人を捕まえるために誰かの命を犠牲になんてできない。
ノエルは銃をおろした。
「ううぅ……」
「もしかして、また逃がすのかな？」
ワジが肩をすくめる。
ぐっとノエルは歯がみした。
「人命は最優先だし、この状況じゃ……」
「まぁ、そうだね。今回は下調べが足りなかったかな。まさか、ホテルに爆弾をしかけてるなんてね」
武器は持っていなかったワジだが、降参の証に両手を軽く挙げた。
ドゥッチオたちが哄笑する。
「ふはは！　好い様だな！　警備隊員とテスタメンツのワジが言いなりとは！」
下衆な物言いに、ワジが眼光を鋭くした。
「べつに僕はホテルを爆破されてもかまわないよ？　君たちが破滅を望むならね。このお姉さんに絶対に従わなければいけない理由はないんだし？」
「ぐっ……」
ドゥッチオたちが気色ばむ。

ノエルは眉をひそめたが、彼の立場ならホテルの従業員や宿泊客より、相手を捕らえることを優先しても不思議はない。
「ワジ君……」
「わきまえてるよ。彼らが紳士的なうちは、ね」
「ふんっ。まぁ、いい……行くぞ」
ドゥッチオが立ち上がる。
他の黒ずくめたちが、「移動するのか？」と尋ねる。
「ああ、警備隊だの不良だのに乗りこまれたってことは、他の連中にも見つかってる可能性が高いからな」
「なるほど。まずいな」
「よし、移動しよう」
「もうミラも充分あるしな！」
他の者たちはともかく、リーダー格のドゥッチオという男は頭が切れるようだ。
スイッチを見せつけるようにして命令してくる。
「ゆっくりと部屋を出るんだ。おかしな真似をしたら……わかってるな？」
「言われなくとも……」
「君こそ、うっかりで押さないでくれよ？」

「減らず口を叩くんじゃねえ」
ＶＩＰルームを出ると、ピアノの演奏をしていた女性も、店員たちの姿もなくなってい
た。
ワジの言葉に従い、みんな逃げたようだ。もちろん客もいない。
「くそっ！　店の連中、ふざけやがって！」
ドゥッチオが苛立たしげにテーブルを蹴飛ばす。派手な音をたてて倒れ、ガラス板が砕
け散った。
ノエルは厳しく叱りつける。
「なんてことするの⁉」
「うるせえ！　早く行け！」
「くっ……」
廊下に出て、エレベーターに乗る。
黒ずくめはレストランの地下へと向かうボタンを押した。
かすかな浮遊感。

ジオフロント――
最高級レストラン《プレミアム》の地下には、駐車場が広がっていた。
ノエルは思わず感嘆をもらしてしまう。
「ふぁ～、すごい……雑誌でしか見たことないような高級導力車が……わわっ！　ライン
フォルト社のフラグシップ・スポーツカーに、あっちはヴェルヌ社の限定モデル⁉　ジオ
フロントに、こんな区画があったなんて……」
「おい、早く歩け！」
苛立たしげにドゥッチオがスイッチを見せつけ、命令してくる。
ワジが鼻で笑った。
「ここに魔獣を輸送するためのクルマがあるのかな？」
「……ふん、そういうことだ」
駐車場の一角に、黒色のトラックが駐まっていた。
後ろを向けているから目立たないが、前側(フロント)に古戦場のゲートを破ったときの傷が残って
いる。

「僕たちを連れてくる必要はなかったんじゃない？」
「あいにく、俺は用心深いんだ。爆弾のことを知られてから、お前たちを自由にしたら、どんな対処をされるかわからないからな」
「なるほどね」
「お前ら以外にも、俺たちのことを嗅ぎ回ってる連中がいるようだからな……ベルガード門に向かうまで、念のため人質になってもらうとしよう」
ドゥッチオ以外の黒ずくめたちが大きめの鞄から機関銃を取り出した。
三人ともがワジへと銃口を向ける。
「くくく……だが、人質は一人で充分なんでな」
「へぇ、そうかい？　――やってみなよ」
「余裕ぶってんじゃねえぞ、ワジ！　おまえの仲間はホテルの外だろうが！　こんなところに助けに来るやつはいないぜ⁉」
「くくく……」
「あばよ、ワジ！」
三人が銃の引き金を引こうとする。その前に、ノエルは立ちはだかった。
「やめなさい！　そんなことはさせません！」
一番驚いたのはワジだった。

「ノエル⁉　どきなよ、彼らは冗談で銃を構えてるわけじゃない」
「あたしだって、冗談でこんなことしてるわけじゃない！　警備隊の一人として、あたしがクロスベル市民を守ります！」
「……僕、不良グループのヘッドなんだけど」
「そんなの関係ないでしょ！　ワジ君が、たとえ不良だとしても、クロスベルの市民であることに違いはないんだから！」
「そう……そうだね」
ワジが微笑んだような気がしたが――背後のことだったので、その表情を見ることはできなかった。
ノエルは黒ずくめたちを見据える。
「どうしても人質をひとりにしたいなら、あたしを撃ちなさい！」
「チッ……うるせえ女だ……いいだろう！　そんなに死にたいなら、おまえが先だ‼」
男たちが引き金に力をこめる。
「くっ……」
ノエルは目を閉じた。
最初に浮かんだのはフランと母親の顔――そして、警備隊の制服をまとった亡き父の後ろ姿。

ソーニャ副司令と、タングラム門の仲間たちの表情。つらい訓練の日々。充実した毎日。
——初めて警備隊に配属された誇らしい気持ち。あの日は、まだ警察学校の生徒だったフランがお小遣いを奮発してクロスベルで一番大きなケーキを買ってきて、母親と三人では食べきれないと思っていたら、近所の人たちや日曜学校の頃の友だちまでお祝いに来てくれて……

　　みんな、ごめん……

ノエルの体が、背後から引っ張られた。
「ふわっ⁉」
ワジが腰に左腕を回してきて、抱き寄せられるような格好になる。
彼が右手を、黒ずくめたちへと突き出した。
静かに宣言する。
「やらせるわけにはいかない……はぁぁぁぁぁ……‼」
呼気と同時に、魔法とも闘気とも違う、不思議な輝きが彼の体から発せられる。
まさに銃を撃たんとしていた黒ずくめたちが、呼吸すらも止めてしまったかのように身じろぎもせず立ちつくす。

「ううぅ……な、なんだ……!?」
それほどの威圧感にもかかわらず、ノエルは温もりさえ感じられる。
「こ、これって……？」
「ぐううぅ……ワ、ワジィィィ！　爆弾が、どうなってもいいってのか!?」
ドゥッチオがスイッチを振り上げた。
ノエルは悲鳴にも似た声をあげる。
「だめぇぇぇぇ!!」
そのとき、駐車場の奥から駆けてくる足音が響いてきた。
青と白のジャケットを着た、ブラウンの髪の青年が走ってくるのが見えた。
「あ……ああ……」
ノエルの視界が涙で歪む。
彼の仲間――パールグレイの髪の少女と、赤髪の青年。そして、魔導杖（オーバルスタッフ）を構えた少女も一緒だ。
「……ロイドさんっ……!!」

ノエルが感極まった様子で名前をつぶやいた。
うなずきを返す。
エリィが拳銃（ロストキャンベル）を構え、ランディがスタンハルバード（テスタロッサ）を突き出した。
ティオが導力杖（フローレンティン）を黒色の導力車に向ける。
「ロイドさん、このトラックです。警備隊から捜索要請のあった導力車とデータが一致しました」
「よし、ようやく見つけたな」
一歩、前に出る。
「ノエル曹長、ワジ……どうしてここにいるのかは、わからないが……どうやら間に合ったみたいだな？」
ワジがいつものクールな笑みを浮かべて、両手を広げる。
「ナイスタイミングだよ、ロイド」
「はぁ～」
脱力しかけたノエルだったが、表情を引き締める。
「あっ、ロイドさん！　ホテルに爆弾が！」
「くくく……そういうことだ、特務支援課！　さんざん世話になったがな。この場でまとめて始末してやるぜ！」

ドゥッチオがスイッチを突き出して叫んだ。
ティオが得意げに笑みを浮かべる。
「導力通信を使った爆弾ですか。たしかに、物理的には巧妙に隠されてましたが、導力ネットワーク側からは丸見えでしたね」
「な、なに……？」
「レストランのシステムと無関係に追加されていましたから。あれでは、わざわざ爆弾の位置を知らせる案内板を用意したようなものかと」
「……ッ⁉」
ドゥッチオがスイッチを押した。
カチン、と乾いた音が駐車場の奥へと消えていく。
爆発音はしなかった。
何度も何度もスイッチが押される。
「ばかな！　ばかな！　見つけられたとしても簡単には解体できない爆弾のはずだ‼」
ランディがくたびれた顔をして、肩をまわした。
「まあ、火薬の扱いは、それなりに慣れてるんでな。ひさしぶりだったけど、たいして時間はかからなかったぜ？」
「なっ……⁉」

ドゥッチオが絶句し、ワジがヒュウと口笛を鳴らす。
「やるじゃない」
「よかった……本当によかった……」
声を震わせるノエルの瞳には涙が浮かんでいた。
ロイドは前に出る。
「古戦場ゲートの器物破損、警備隊による停止命令の無視、ならびに、恐喝事件関与の疑いで、逮捕する！」
「くそがぁ‼」
ドゥッチオがスイッチを投げ出す。
そして、トラックの後部ハッチに飛びついた。ロックが外される。
飛び出してきた黒い影は、二足歩行する巨大なトカゲのような魔獣だった。
キシャアアアアアァァァァァァァァァァー‼
咆哮に、ティオが目を見開く。
「気をつけてください！　ブレードファングです！」
魔獣を放ち、その隙に黒ずくめたちが逃げようとする。
エリィの銃弾が、その目論見を防いだ。
遠くから撃ちこまれた一撃が、エレベーターのスイッチを破壊したのだ。

「逃がすものですか！」
「くそっ！　おのれ……こうなったら、まとめて始末してくれる‼」
「うおおおぉぉ～～～‼」
　ドゥッチオたち四人が機関銃を構える。
　魔獣が獰猛な雄叫びをあげ、鋭い牙のならんだ口を開き、飛びかかってきた。
　ロイドは武器（オールラウンダー）で迎え撃つ。
「行くぞ、みんな！」
「わかったわ！」
「OKです！」
「アイサー」
　ノエルとワジも、それぞれが武器を取った。
「援護します！」
「やれやれ……」

　ロイドたちはノエルやワジの支援もあって、魔獣を撃破し、ドゥッチオたちを捕らえる

ことができた。
　犯人たちは床でのびている。
　ロイドは警察本部に連絡を入れて、護送車を回してもらえるよう手配した。
「――はい。よろしくお願いします」
　エリィが拳銃をホルスターにしまい、ランディがスタンハルバードを床につく。
「ま、こんなもんかね」
　ワジが服のほこりを払い落とした。
「それじゃ、ロイド……そろそろ、僕たちは行かせてもらうよ」
「え？　そうなのか？」
「せっかく君に会えたのに、名残惜しいけどね……僕たちは、ただレストランで食事をしていただけさ。そうだろう？」
　話を振られたノエルが、悩んだふうに眉を寄せる。
「うーん、でも警察の調査に協力するべきだと思うし……」
「その格好で、かい？」
「うっ……」
　今さらのように、ノエルはひらひらした自分の格好を見下ろし、赤面する。
　戦闘しているときに、ファーショールもどこかへ行ってしまって、胸元も背中もあらわ

になっていた。
私服はトリニティに預けたままだ。
ロイドは自分のジャケットをノエルに羽織らせた。
「あ……ロ、ロイドさん」
「ノエル曹長が踏みこんでくれてなかったら、彼らに逃げられていたかもしれない。助かったよ」
「えっ、いえ、そんな！　あたし、爆弾に気づいてなくて、あやうく逃がしてしまうところでした。それどころか自分やワジ君の命まで……」
「たしかに、危険はあったかもしれない。でも、一連の事件の犯人を捕らえることができたのは、曹長たちのおかげだと思う」
ロイドは笑みを浮かべる。
沈んでいたノエルの表情が雪解けのようにやわらかくなっていった。
「……はい」
「ノエル曹長、ワジ……協力、感謝する。犯人の情報は集めてあるから大丈夫だと思うけど、必要なら後で話を聞きにいかせてもらうよ」
「了解しました、ロイドさん！」
「そのときは、君のためにとっておきのワインを開けるよ。二人っきりで朝まで語り明かそうじゃない」
「ワジ……いろいろ、つっこみどころが多すぎるぞ……」
がっくりとロイドは肩を落とした。
みんなが苦笑する。
ジオフロントの奥のほうから、機械の駆動音が響いてきた。
鋭敏な感覚を持つティオがつぶやく。
「大型エレベーターの音です。護送車が来たようですね」
「ふふ……先に行くよ。アディオス」
ワジが非常階段のほうへと足を向ける。
後についていくノエルが、途中で振り返った。
「ロイドさん……」
「ん？」
「あたし、明日まで休暇なんです」
「ああ、そう言ってたな」
「ですから……その……」
エリィとティオが、驚いた顔して見つめる。ランディとワジは苦笑していた。
輝くような晴れきった笑顔でノエルが敬礼する。

「あたし、明日はゆっくり街を見てみます！　自分が守るものを、この目で！」
「ああ」
「それでは、失礼します！」
そう言って――
ドレス姿の警備隊員は、階段へと駆けていくのだった。

第4話 『リーシャと銀のハイキング』

英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～

第5回

特務支援課メンバーが過ごす
クロスベル自治州のゆる～い(?)日常！

エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、『碧の軌跡』シリーズ。続編となる『閃の軌跡』、『創の軌跡』においても激動の中にあり、様々な壁が立ち塞がっていたが、怯むことなく立ち向かっていったのがロイド・バニングス率いる特務支援課メンバーだ。そんな特務支援課メンバーが、もしかしたら過ごしていたかもしれない日常を描く、魅力たっぷりの一冊をご堪能あれ！

おだやかな日差しが、アルカンシェル劇場の二大スターの看板を照らしていた。
一枚はトップスターのイリア・プラティエ。豪奢な金髪の美女である。
もう一枚は、大型新人アーティストのリーシャ・マオ。神秘的な美貌の少女だ。
彼女たちを中心とした舞台で、アルカンシェル劇場の名は周辺諸国にも知れ渡っていた。
その控え室でのこと――
午前の練習が終わると、リーシャはすぐに練習用の衣装から私服へと着替えた。
「思ったより長引いちゃった……急がないと……」
そこへ、ぬうっと背後から手が伸びてくる。
むんずっ！　とリーシャの胸が、その両手に掴まれた。
「ハッ⁉」
「ひゃっ⁉」
「リ～シャ～？」
胸をつかんできたのは、金髪の女性だ。
「あ……イ、イリアさん……⁉」
「そんなにあわてて、どこへ行くのかしら？」
まだ彼女は《太陽の姫》の衣装を着たままで、まるで本物のお姫様みたい。
（まぁ、本物のお姫様なら、女の子の胸をつかんだりしないだろうけど……）

とリーシャは内心で苦笑した。
「あの～、イリアさん……ちょっと、今日は、人と会う約束がありまして……」
「なんですって⁉　まさか、彼氏が⁉」
「そ、そんなわけないじゃありませんか！　だいたい、稽古ばかりで、作る暇なんか！」
「うん、知ってた……まぁ～、この胸に誘われて言い寄ってくる男は星の数でしょうけれど」
もにゅん、もにゅん、と白くて細い指に、リーシャの胸がもみしだかれる。
「はぅ⁉　あ……そんな……イリアさん、だめです。そんなにしたら……」
「リーシャって、それほど背は高くないし、体だって細いのに、胸ばかり、こんなにも！　ハアハア、なんか興奮してきちゃったかも」
「や、困ります……ああ……おかあさ～ん」
控え室の入り口あたりから、深々としたため息が聞こえた。
「はぁ～～～～。イリアさん、リーシャ姉になにやってんだよ？」
呆れ声をあげたのは、シュリだった。
いろいろあってイリアが弟子として迎え、アルカンシェル劇団の新人アーティストとして練習を積ませている十三歳の少女だ。
テヘッ、とイリアが舌を出した。
「あまりに、もみ心地がいいものだから、つい♪」

ようやく不埒な両手から解放され、リーシャはへたりこんでしまう。
シュリが肩をすくめた。
「リーシャ姉、なんか急いでるんだろ？　早く行ったほうがいいんじゃないか？」
「う、うん……ありがとう、シュリちゃん」
「シュリ、本当にすごいのよ⁉　あんたも、もんでみる？」
「いや、遠慮しとく……」
「ううぅ……イリアさん、午後の練習には戻りますから……失礼します！」
リーシャは、他のスタッフにも挨拶しつつ、逃げるように通用口から劇場の外へ出た。

「はぁ、イリアさんたら……本気で急がないと……」
物陰に隠れる。
次の瞬間、黒い影が現れた。建物の壁を蹴って、屋根へと飛ぶ。
顔を仮面で隠し、黒衣をまとった者が、人知れず東へと向かうのだった。

その部屋には、ふたりの男がおり、地下水のように冷たく洞窟のように暗い禍々しい気

配と緊張感が満ちていた。
一方の男――
部屋の主は、鋭利な刃物のような雰囲気の青年であり、名をツァオ・リーといった。
表向きは黒月貿易公司の若き支社長だが、正体は犯罪組織《黒月(ヘイユエ)》の幹部である。
「フフ……さすがは銀(イン)殿だ。まさか、これほどの成果をあげてくださるとは……《黒の競売会(シュヴァルツオークション)》の失敗により、ルバーチェ商会は大幅に勢力を減じました。この街(クロスベル)の裏社会、予定より早く牛耳ることができそうですよ」
銀(イン)と呼ばれた、もう一方の男は――
顔を仮面で隠し、黒いローブをまとっている。
実は、理由(わけ)あって声まで変え、男装をしている、リーシャであった。
アルカンシェル劇団の新人リーシャ・マオと、犯罪組織の幹部が厚く遇する黒衣の男《銀(イン)》――その両方の立場が彼女だった。
感情を隠した平坦な口調で返す。変装のために歪んだ声だった。
「私が受けたのは、オークションの出品物を確認する依頼だけだ……」
「フフ、そうですね……騒動を起こしたのは警察の特務支援課ということになっているとか。それこそ素晴らしい。自分たちが手を汚すことなく、競争相手を蹴落とすことができたのですから」

「…………」
リーシャは、当時のことを思い出す。

あの夜――
《銀(イン)》として依頼を受け、出品物を調べるために会場へと乗りこんでいた。
ところが、保管部屋に押し入った直後、ロイドたち特務支援課が現れたのだ。
「なっ……!? あんたは……!!」
「……妙な気配がするかと思えば、お前たちも入りこんでいたか」
まっすぐな目をした青年と対峙して、リーシャは戦うことなどできなかった。
ロイドたちは、先日、イリアと劇団のために尽力してくれた。リーシャにとっての恩人であり、友人だから。
しかし、別のことも考える。
（でも、ここで簡単に協力するのは不自然よね？　正体がバレたら困るし……）
熟考の末、こんな言葉を放った。
「フフ、お前たちを始末するのは簡単だが……この場を任せても面白いことになりそうだ」
「なに……!?」
「奥の部屋に競売会後半の出品物がある……《黒月(ヘイユエ)》に流れた情報によると、面白い〝爆弾〟

があるらしいぞ？　その目で確かめてみるといい」
　そう告げて、屋敷を後にした。
　リーシャは物思いから意識を戻す。
「フン……」
　今にして思えば、なぜロイドたちに任せようと思ったのか？　なぜ出品物を確かめずに屋敷を離れたのか？
　自分のことながら腑に落ちない。
（まるで、それらが運命であったかのよう……運命？　私らしくもない……）
　リーシャは思考を振り払った。
　ともあれ、結果だけ見れば、黒月（ヘイユエ）にとっては願ってもない展開になっている。
　いつも本心を隠している雇い主（ツァオ）が、それとわかるほど上機嫌になるほど。
「フフ、すでにルバーチェ商会のルートを幾つか押さえることができました。今、あちらは目立った行動が取れませんからね。一方的すぎて少々物足りないほどですよ……さすがは、伝説の凶手（きょうしゅ）、銀（イン）殿です」
「私は依頼があったから動いた……そして、利用できるものはすべて利用する……それだけのこと」

　口ではそう言いながら、リーシャは内心で、申し訳なくて仕方ないのだが。
（はぁ～……ロイドさんたちを利用する気なんてなかったのにな。マフィアから報復がないといいけど……あのとき、私が出品物を任せなければ……）
　ツァオが黒い笑みを浮かべる。
「フフ、本当に恐ろしい方だ。今後とも我々の、よき協力者であってもらいたいものです」
「……時間があれば、依頼は引き受けよう。今日は、ここまでだ」
「また〝時間〟ですか？」
「フ……」
（もう、午後の練習が始まっちゃう）
　そういえば――とツァオが口を開いた。
「銀（イン）殿には興味のないことかもしれませんが、特務支援課とルバーチェ商会の間で、進展があったようです」
「…………」
　無関心を装って黙りこんだが、内心では気になって仕方なかった。
「ルバーチェ側から警察に、手打ちを提案したようですね。支援課に報復や訴訟をしない代わりに、《黒の競売会（シュヴァルツオークション）》で彼らが見つけたものは、自分たちと関係がないことにしてくれ、と」

「……警察側は受けたのか？」
「非公式ながら。法廷で捜査の合法性と、ルバーチェの違法行為の両方を立証するのは難しい、と判断したのでしょう」
「フ……この街の警察は腑抜けばかりだな」
（よかった〜、ロイドさんたちは安全になったのね！）
　リーシャは内心で安堵した。
　ツァオが机のうえの報告書をなでる。
「おかげで、私の仕事は順調ですよ。これ以上ないほどに」
「……時間だ」
　銀は壁に向かって歩く。ぶつかる直前、自らの姿を歪ませて、その部屋から音もなく姿を消した。
　ツァオは薄笑いを浮かべていた。

　午後の練習——
「リーシャ、もっと抑揚をつけて！」

「はい！」
　イリアの声が響いた。
　劇団のスタッフたちには、充分に完成しているように見えていても、彼女の目には、さらなる高みが映っている。
「もっと早く！　そう！」
　舞台の左右からジャンプしたリーシャとイリアが、中央で交差する。
　見守っているスタッフたちから、おお……と感嘆がもれた。
　練習用の衣装で、セットもない舞台だが、そこにイリアの描いている完成形を幻視したのかもしれない。
「いい調子よ、リーシャ！」
「は、はい！」
　踊るイリアの顔に笑みが浮かんでいた。
　リーシャも笑みをこぼす。
　充実している。
　生きていると実感する。
　イリアには、いくら感謝しても足りない、そうリーシャは感じていた。
　リーシャに才能があると見込んで、劇団アルカンシェルに誘ってくれたのは、他ならぬ

トップスターのイリアだった。
決められた暗闇の道を歩くことしか知らなかった自分に、光を教えてくれた女性。太陽のように。
音楽が終わる。
同時に全員が動きを止めた。
ふぅ〜、と誰ともなく息を吐く。
一曲ぶんの練習が終わり、小休止となった。
イリアがやってくる。
「リーシャ、最近、なにか気がかりがある様子だったけど、もう心配はなくなったようね？」
「えっ⁉　……気づいていたんですか……イリアさん」
「フッフッフッ、一緒に演じていれば、当然よ。創立記念祭の後からよね。最終日の打ち上げ（パーティー）から消えたことと関係あるのかしら？」
「す、すみません……」
「まぁ、それで気の抜けた演技をしてたら、厳しく言わせてもらったけど、完璧だったからね」
「え？　そうなんですか？　じゃあ、どうして気づいて？」
「私は完璧よりも上を目指してるから♪」

「あ……」
舞台のことを口にするとき、イリアは真剣な顔をする。そして、舞台の将来を語るときは幸せそうに笑うのだ。
「完璧な演劇をすれば拍手はもらえるわ。でも、それだけじゃ足りない。お客さんが感動するのは、完璧を超えたときなのよ」
「はい……」
「今のリーシャなら、完璧の上を目指せると思う。もちろん、私も立ち止まってるつもりはないけどね」
リーシャは心地よい緊張と高揚に包まれる。
自然と笑みがこぼれていた。
「私、がんばります」
「よし！」
ぱんぱん、とイリアが手を叩く。
「さあ、休憩は終わりよ！　次の曲をかけて！」
イリアとリーシャのテンションは上がりっぱなしで、周りのベテランたちも集中していたが、端で話を聞いていたメンバーのなかには、必要以上にプレッシャーを感じてしまった者もいた。

シュリが緊張しすぎて目を回してしまう。
「い、いくぞ……うわっ⁉　とっ、とととと……ととと……」
セットも置いていない舞台でつまずき、ととと、と中央までたたらを踏んだところで、ずべりと倒れた。
あわてて、リーシャは駆け寄る。
「シュリちゃん、大丈夫⁉」
「ご、ごめん……イリアさん、リーシャ姉……オレ……」
泣きそうなシュリの頭を、イリアの手がくしゃくしゃとなでる。
「ごめん、ごめん！　ちょっと練習がハードだったわね。考えてみれば、最近、休みもなかったし。疲れからミスが出て当然だわ」
「イリアさん、オレ、まだ……‼」
「体調管理もプロの仕事！　と言いたいところだけど、あんたの歳なら、教えている私の仕事よね」
「大丈夫だよ！　まだ練習できる！」
「いいから言うこと聞きなさい。今日は、お休みにするわ。みんなも、急で悪いけど、一息入れましょう」
団員たちから「そいつは助かるな～」とか「ようやく休みか～」と笑い声がこぼれた。

半分はシュリを気遣ってのことだろうけれど。
こういうとき、リーシャは、ここにいる団員たちが家族のように感じられる。
不服そうなシュリの頭を、もう一度イリアがなでた。
「休日に英気を養うのもプロの仕事よ？　あんたに、それができるかしら？」
「む……休むことなんか、誰にだってできるだろ。オレは、ひとりでだって練習するからな！」
「ダメよ。私と一緒に来なさい。休日のなんたるかを教えてあげるわ！」
客席で舞台を見ていたアバン劇団長が、ゴホン！　と咳払いをした。
「大見得を切ったところ悪いが……イリア君、練習のあと、取材（インタビュー）があると言っておいたはずだな？」
「どうも～‼　おひさしぶりです！　クロスベル通信（タイムズ）のグレイス・リンです！」
エメラルド色の瞳を輝かせて記者の女性が入ってきた。
その横で、カメラマンの青年が、パシャパシャとシャッターを切る。
グレイスがマイクを向けた。
「イリアさん、練習を終えての手応えを、ひと言！」
「ふふ、創立記念祭の公演を経て、私を含めた団員たち全員が成長しているのを感じるわ。次は前回より素晴らしい舞台を披露できそうよ」

「わ～お！　もしかして、もう具体的なアイディアが、おありなんですか⁉」
　ねぎらいや挨拶ではなく、演劇の話から始めるあたり、イリアの性格を知っている。さすが地元の記者だ。
「アイディアね……話すと長くなるかしら。ねえ、リーシャ」
「はい？」
「シュリと遊んできてくれる？　劇団長、すこし小遣いを渡しておいてよ。どうせ、ほとんど手持ちがないに決まってるんだから」
「やれやれ、イリア君にはかなわないな」
　リーシャはあわてて両手を振る。
「そんな！　ミラなんて……」
「オレは、休みなんかいらないって、イリアさん！」
　シュリの反論に、イリアが顔をしかめた。
「あんたね、今さら照明や音響のスタッフに、やっぱり休みなしって言う気？　恨まれるわよ？」
「うっ……」
　すでに大半のスタッフは引き上げていた。
　呼び戻すことさえ難しいだろう。

「リズムもなしでは練習にならないでしょ？　明日、居残りで見てあげるから、今日は休みなさい」
「わ、わかったよ……そのかわり、明日！　絶対だからな！」
「あんたこそ、早々にへばるんじゃないわよ？」
　ヒラヒラと手を振ると、イリアは記者たちのほうへ向かっていった。
　グレイス記者が、もみ手しながら待っている。
「うふふん♪　イリアさんのアイディアって、もしかして、そこの若手の子と関係があります？」
「おっ、鋭いわね～。でも、それはナイショ」
　リーシャは、劇団長から「まぁ、イリア君から押しつけられたと思って受け取ってくれ」とお小遣いを渡された。
　シュリと一緒に着替えをして、劇場を出る。
　ひとまず、中央広場に来てみたものの、なにをしていいやらわからなかった。
　シュリが首をかしげる。
「リーシャ姉、どうする？」
「どうしようか？」

「いつも、休日はどうしてんの？」
「え……」
《銀》として依頼を遂行するか、なまらないように訓練をしているか――などと言えるわけがなかった。
　黙ってしまう。
　シュリが肩をすくめた。
「なんだ、リーシャ姉もオレと同じか」
「ええっ⁉」
（ま、まさか、シュリちゃんまで裏社会の……刺客⁉）
「休みの日なんて、寝てるよな～」
　リーシャは胸をなでおろす。
「はぁ～、そ、そうよね。でも、お小遣いをもらっちゃったから、家で寝てるってわけには……」
「そんなこと言われてもな。オレ、服と食事以外にミラの使い道なんか知らねえよ」
「たしかに、防具と回復薬くらいよね。セピスのほうがクオーツに合成できるぶん使え――」
「はあ？」
　シュリに怪訝な顔をされてしまった。

　あわてて、リーシャは口元を押さえる。
　気が緩んでいたらしい。
「あ、いえ……ちょ、ちょっとした冗談なの。面白かったでしょう？　笑ってもいいのよ？」
「リーシャ姉って、ルックスも演技もすごいけど、ジョークのセンスはイマイチだよな」
「ううぅ……すみません」
　クロスベルに来るまで、冗談どころか雑談もろくにしてなかったのだから無理を言わないで欲しい、と思う。
　そのとき、見知った顔が歩いているのを見つけた。
「あ、ロイドさん！」

ロイドたち四人はウルスラ病院から戻ってきて、鉱山町マインツに向かう途中だった。
中央広場で声をかけられる。
「あ、ロイドさん！」
呼ばれたほうを見ると、黒に近い紫色の髪の少女と、まるで少年みたいな格好をした女の子が、こちらに歩いてきていた。

英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～

特務支援課メンバーが過ごす
クロスベル自治州のゆる～い(?)日常！

第6回

©YUKIYA MURASAKI, KUBOCHA

エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、『碧の軌跡』シリーズ。続編となる『閃の軌跡』、『創の軌跡』においても激動の中にあり、様々な壁が立ち塞がっていたが、怯むことなく立ち向かっていったのがロイド・バニングス率いる特務支援課メンバーだ。そんな特務支援課メンバーが、もしかしたら過ごしていたかもしれない日常を描く、魅力たっぷりの一冊をご堪能あれ！

「やあ、リーシャに、シュリじゃないか」
　リーシャが丁寧におじぎして、シュリがぶっきらぼうに片手を挙げる。
「こんにちは、みなさん」
「ちわ」
　エリィとティオが挨拶を返した。
「こんにちは」
「……どうもです」
　ランディが驚愕に目を見開く。
「なんてこった！　今日はついてるぜ！　こんなところで、アルカンシェルのスター、リーシャちゃんと会えるなんて‼」
「そ、そんな、大げさですよ」
「リーシャ姉の場合、大げさでもないんじゃねえの？　最近、ファンレターもすごいしな」
　シュリにまで言われ、リーシャが赤面する。
　ロイドも彼女の演技に見惚れたひとりだから、ファンの気持ちはわかるが……これ以上、言ったら、本当に困らせてしまいそうだ。
「今日は、リーシャたち、練習が休みなのか？」
「はい。お休みになったものだから、困ってるんです」

「休みになったから、困る？」
　ロイドは首をかしげた。
　エリィたちも不思議そうな顔をする。
「どういうことかしら？」
「実は、お休みに慣れてないもので、なにをしたらいいのかわからなくて」
「な、なるほど……」
　シュリが唇を尖らせる。
「あんたたち、支援課だろ？　オレたち市民なんだから助けてくれよ」
「う、うーん……休日の使い方か……」
「家で寝てるってのは、ナシだぞ。それ、オレが提案して、リーシャ姉にダメ出しされたからな」
「いくらなんでも、それは提案しないから安心してくれ」
　ティオが手を挙げた。
「ん」
「おっ、いい案があるのか、ティオ？」
「ふふ……完璧です。休日といえば、ゲームです。とくに、対戦型の導力ネットゲームは、いくら時間があっても足りないほどです。〝ポムッと！〟といって、まだ開発段階のもの

なんですが――」
「すみません……それは面白そうですが……私、導力端末を持ってませんから……」
「オレ、難しいのはパスな。眠くなるから」
「がーん」
　ティオが膝をついた。
　今度は、エリィが前に出る。
「まだまだ導力端末は広まってないものね。だけど、本ならなにもなくても読めるわ。ここからだと、市立図書館も近くにあるし」
「ん～……すみません。できれば、シュリちゃんと楽しめるものがいいと思うんです」
「だから、難しいもんはパスだって！　本なんか表紙を見ただけで眠くなるだろ‼」
「そ、そうよね……」
　しゅん、とエリィがうなだれる。
　不敵な笑い声をあげたのは、ランディだった。
「この休日マスターの出番が来たようだな！　休日なら任せろ！　俺こそが、キング・オブ・休日‼」
「ランディ、お酒とギャンブルと非道徳的な場所は勧めないでちょうだいね？」
　エリィに釘を刺されると、キング・オブ・休日が、グッと言葉に詰まった。

　ティオが眉をしかめる。
「……ランディさん、最低です」
「そ、そ、そんなんじゃねえ！　え～～～っと、そうだ！　今から俺たちマインツに向かうんだけど、一緒に行くなんてのはどうだ？」
　シュリが手厳しく返す。
「はぁ⁉　なにしに行くんだよ？　マインツなんて、山しかないんだろ⁉」
　しかし、リーシャは興味を示したようだ。
「もしかして、シュリちゃんは、マインツに行ったことないの？」
「ノーザンブリア自治州から流れてきて、やっとクロスベルに着いたんだぜ？　わざわざ街から出ないって」
「大変だったときは、そうでしょうけど……今は、少しくらい遠出する余裕があるんじゃない？」
「まぁ、昔とは違うけどさ……」
「マインツは鉱山町で、特別な観光地ではないけど、行ったことがないなら、見ておいたほうがいいと思うわ」
「うーん、他に案はないのかよ⁉」
　シュリに訊かれて、ロイドは頭をかいた。

「いや、考えてみたら、実は俺も休日にはトレーニングとか、釣りくらいなんだよなぁ」
「はぁ～、つまんねえヤツだな」
「うう……返す言葉もない」
「仕方ねえ、リーシャ姉がいいって言うなら、つきあうか」
「ふふ、ありがとう、シュリちゃん」
リーシャが微笑んだ。
ランディが小さく拳を握る。
「おし！　乾いた仕事に、潤いが！　可憐な花が！　道中が楽しくなりそうだぜ」
エリィとティオがジト目になっていた。
「どういう意味かしら？」
「……聞き捨てなりませんね」
「え？　あ、いや……それはだな……」
ランディがあれこれと言い訳する。
ロイドはリーシャたちと顔を見合わせ、苦笑していた。

マインツに向かうため、西通りを通って住宅街のほうへ向かう。
途中、リーシャが尋ねてきた。
「誘っていただいたので一緒に来ちゃいましたけど、よかったんですか？　お仕事の最中だったんじゃ？」
「支援要請を受けてるけど、べつにマインツまで一緒に行くだけなら、大丈夫だよ」
「ふふ、よかった」
「リーシャこそ、本当にマインツでよかったのか？」
「はい……街だけにいると忘れそうになるものを、いろいろ思い出させてくれますから」
「なるほど。そういう感性がアーティストには大切なのかもしれない。さすがだな、リーシャは」
「そ、そんなことは……」
また彼女が照れて困ったような笑みを浮かべる。
シュリが割り込んできた。
「こらっ、リーシャ姉にベタベタすんなよ」
「いや、ベタベタしてるつもりはないんだけど……」
「シュリちゃんってば……実は、ロイドさんと仲良くしたかったの？」
「はあっ!?　どうしてそうなるんだよ、リーシャ姉!?」

「えっ、違うの?」
「オレが、こいつと仲良くしたいわけないだろ!」
シュリが睨みつけてくる。
「ははは……まいったな……」
最初に出会ったとき、いろいろあったせいで、ちょっと苦手に思われてしまっているようだ。
ロイドとしては不可抗力だと思っているのだが。
「そもそも、あんたら、マインツなんかに、なんの用事なんだよ?」
少し長くなるけど——と前置きして、ロイドは受けている支援要請について話すことにした。
「——鉱山町で働いてる人は大勢いるんだが、みんな忙しいせいか、健康診断を受けに来ないらしくてね」
「へー休みもなく働いてるのか……大変だな……」
「ああ……」
人によっては、酒盛りや夜遊びに忙しいこともあるようだが。
「そのため、定期的にウルスラ病院から医師が健康診断に行ってるらしいんだ。大勢が病院に来るより効率的だからね」

「そういや、オレはまだ受けてないけど、劇団(アルカンシェル)でも健康診断があるんだよな」
「入団したときに説明があったわね」
リーシャがうなずいた。
そりゃ、当然だな——とランディが言う。
「イリア・プラティエやリーシャちゃんが健康診断に来たら、ファンが集まっちまって大変なことになるぜ」
エリィが苦笑して、ティオが肩をすくめて嘆息した。
「そうね。想像できてしまうだけに、怖いものがあるわ」
「……健康診断どころではなくなるかと」
人気者になるのも大変だが、人気者というのも大変らしい。
シュリが興味なさそうにしつつも続きをうながす。
「んで、その健康診断がどうかしたのか? あんたたちが、やるとか?」
「俺たちは警察官であって医者じゃないから無理だよ。実は、ウルスラ病院から出た医師と看護師が、まだマインツに到着してないらしくてね」
「どこかで寄り道でもしてんのか?」
「そうかもしれない。なにか理由があるんだと思う……意外と、すこし遅れただけで、もう到着しているかもしれないけどね。俺たちはウルスラ病院で頼まれたから、様子を見に

行くことにしたんだ」
ランディが、ロイドの肩に手を置く。
「なんせ、同行した看護師ってのが、ロイドの姉のセシルさんだしな！」
ティオが補足する。
「……そして、担当医はヨアヒム先生です。あれこれ理由をこじつけて、釣りをしているのかもしれません」
今回の健康診断を担当する医師はヨアヒム・ギュンターといい、腕は確かなのだが、仕事を抜け出して釣りに興じるという悪癖があった。
リーシャが不安そうな表情を浮かべた。
「連絡がつかない看護師って、セシルさんなんですか……」
「うん……そういや、リーシャはセシル姉と会ったことがあるんだな」
「はい。イリアさんの幼馴染みとして、創立記念祭の初日に、紹介してもらいました」
シュリが思案顔をする。
「そういや、オレも挨拶くらいはしたな……優しそうな人だよな」
警戒心の強いシュリが、初対面の相手を褒めるなんて珍しい。それだけ、セシルの人柄が温かいということか。
「ん？　な、なんだよ？　オレ、変なことは言ってねえぞ？」

「うん。セシル姉は優しい女性（ひと）だよ」
ロイドはうれしくて笑顔をこぼしていた。
マインツ山道に出たところで、バス停が見えてくる。
リーシャは誰にも聞こえないほど小さな声で「なんだか、嫌な予感がする……」とつぶやいた。

「どうしたのかしら？　いつもより待ってる人が多いみたいだけれど……」
エリィが首をかしげた。
列の先頭にならんでいる青年が、こちらに気づいて声をあげる。
「おお！　あんたら、支援課だろ⁉　なんとかしてくれよ！」
ロイドたちは駆け寄った。
「どうかしましたか⁉」
「時間を過ぎても、バスが来ないんだよ！　こっちは仕事があるってのに！」
他のならんでいる人たちも口々に文句を言いだした。

落ち着いてください、すぐ調べます――とロイドは請け負う。
　あっ、とティオが指を差した。
　最初は気づかなかったが、列の最後尾にならんでいる白衣の男は――医師のヨアヒムだった。
「ヨアヒム先生です」
「いや～、君たち、こんなところで会うなんて奇遇だね」
「こんにちは！　こちらにいらしたんですか、ヨアヒム先生」
「ん？　その様子だと、僕に用事があるのかな？」
「はい。ウルスラ病院から〝マインツへの到着が遅れているようだから様子を見てきて欲しい〟と依頼されまして」
　ヨアヒムが苦笑する。
「いや～、まいったな……ちょっと、いいポイントを見つけちゃったものでね」
「やっぱり、釣りをしてたんですか……」
「こればかりは、やめられなくてね！　だけど、健康診断は研修医のリットン君に任せたから大丈夫のはずなんだけどね……行ってないのかい？」
「え？　先に向かったんですか？」
「いくら僕が釣り好きとはいえ、忙しい鉱夫たちを待たせるわけにはいかないからね。リットン君に〝いいかね、今から君に研修課題を出すよ――マインツで健康診断をして、その結果をレポートとして提出したまえ〟と……」
　ロイドたち全員が呆れていた。
　やれやれ、とヨアヒムが首を左右に振る。
「研修医ともなれば、それくらいやれなくてはね。まったく困ったものだよ」
「……困ったものなのは、ヨアヒム先生のほうかと」
　ぼそり、とティオがつぶやいた。
　ロイドは少し考えて――
「徒歩で行ってみるしかないな」
　と結論づけた。
　エリィが観念したように、うなずく。
「導力バスが故障したのかもしれないものね。乗客は外に出なければ安全だと思うけど、動けなくなっているかもしれないわ」
「……そうですね。今のわたしたちであれば、問題なくクロスベルかマインツへ護衛できるかと。街道には、さほど強い魔獣はいませんから」
　ティオの言うとおりだろう。
　ランディもうなずく。

「ふぃ～、しゃあねぇな！　マインツまでだと、けっこうな距離になっちまうが、体力つけるには、ちょうどいいハイキングになるだろ！」
「はは……そうだな。警察学校でのサバイバル訓練を思い出すよ」
「俺も警備隊を思い出すぜ」
　意気投合するロイドとランディに対して、エリィとティオは歩きはじめる前から疲れたような顔をしていた。
　リーシャは、ずっと嫌な予感を抱えていた。
　徒歩で行くと決めたロイドが、こちらへと視線を向ける。
　彼は丁寧に頭を下げた。
「すまない、リーシャ、シュリ……トラブルが起きたようだ。バスは来ないし、今日はここで――」
「私も行きます！」
「えっ⁉」
　リーシャは真剣な口調で告げた。ロイドたちだけでなく、シュリまで驚いて目を丸くする。
「なんでだよ、リーシャ姉⁉　そんなにマインツに行きたいのか⁉」

「いえ、そういうわけじゃなくて……あの、その……直感というか……」
（ああ、どう説明したら……⁉）
　リーシャは苦悩する。
　ロイドがうなった。
「う～ん、街道なら徒歩でも危険は少ないと思う……でも、どうしてそんなに行きたいんだ？　マインツに用事があるわけじゃないんだろ？」
「それは……悪い予感というか……」
「え？」
　リーシャは頭をかかえる。『銀（イン）としての直感が、危険を察知しているのでな』と言えたら楽なのだが、そんなことは、寝言でも口走れない。
　しかし、放ってもおけない気持ちだった。
　意を決して――
「ううう……あ、あの！　私、ダイエット中だから、ちょうどいいかなと思いまして！　ハイキングとか、体力もつきそうですし！」
「ダ、ダイエット？」
　ぽかん、としてるロイドに対して――

ハッ、とシュリが顔色を変えた。
「体力⁉　そういうことか、リーシャ姉！　おい、オレも行くぜ」
「シュリまで⁉」
「イリアさんに、〝早々にへばるんじゃないわよ？〟って言われたんだ。それって、オレに体力がないって意味だろ⁉」
「まぁ……そう取れなくもないと思うけど……」
うん、とシュリがうなずく。
「なるほど、ハイキングか。これぞ、有意義な休日の使い方って感じだよな～。劇場の中じゃできないことだ」
「待ってくれ、シュリ……ここから、マインツまでは、かなりの距離がある。子どもの足では――」
「はぁ？　オレは毎日、アルカンシェルで特訓を受けてるんだぞ。そこのチビッコよりは歩ける自信があるぜ」
いきなり天秤に掛けられたティオが、口をへの字に曲げる。
「……もしかして、チビッコというのは、わたしのことでしょうか？　非常に不本意なのですが」
「とにかく、あんたたちと一緒なら安全なんだろ？　なら、いいじゃんか」

押し問答していると、バスを待っている人たちが、ざわつきはじめた。「イリアさん？」「アルカンシェル？」「あれって、リーシャ・マオじゃ？」「まさか。スターがマインツなんて行くわけないだろ」「でも……似てるよなぁ～……？」
エリィがロイドに耳打ちする。
「ちょっと、まずいわよ？　騒ぎになっちゃうわ」
ティオもささやいた。
「ロイドさん……置いて行きましょう」
「まぁ、行きたいって言うなら、いいんじゃねえの？　このふたりなら〝途中で休憩〟なんて言い出さないだろうし……道中の安全は、このランディ・オルランドにすべて任せなさいって！」
魔獣のマの字もないような場所だというのに、巨大なスタンハルバードをぶんぶんと振り回す。
シュリが肩をすくめた。
「まぁ、ダメだって言うなら、リーシャ姉とふたりで勝手に行くけどな」
街道を徒歩で行くことが禁止されているわけではない。
ロイドが降参した。
「はぁ～、仕方ない……ただし、安全第一だ。俺たちの言うことは聞いてもらうからな」

「いいけど、変なこと命令するなよ？」
「するわけないだろ!?」
　ぺこり、とリーシャは頭をさげる。
「すみません、ロイドさん。わがままを言ってしまって……シュリちゃんのことは、私が面倒を見ますから」
「うん。俺たちも気をつけるけど、よろしく頼むよ」
「はい……」
　リーシャは、シュリと一緒でなければ、ひとまずロイドたちと分かれ、《銀（イン）》の姿になってから追いかけることもできたのだが。
（ううん……シュリちゃんのことは、イリアさんに頼まれたんだから）
　ぐっと気を引き締める。
（なにが待ってるかはわからないけれど、私が、シュリちゃんもロイドさんたちも守らないと‼）
「おお、リーシャ姉が真剣だ……やっぱりハイキングって、効果的な練習なんだな」
　いろいろとシュリに誤解されている気がした。

　できるだけ急いだほうがいいのは間違いないが、到着したときにバテバテでは意味がない。
　ロイドは、魔獣との接触を避けつつ、みんなの調子を気にしながら進んでいった。
　最初はシュリのことを一番心配していたが、すぐに大丈夫だとわかった。
　アルカンシェルのふたりは充分に健脚らしい。
　むしろ、大きな魔導杖（オーバルスタッフ）を持っているティオのほうが、大変そうだった。
「すこし休憩しようか？」
「……問題、ありません……はぁ、ふぅ……このくらい、へっちゃらです」
「うーん、そうか。無理はしないでくれよ、ティオ」
「もちろんです、ロイドさん……はふっ……」
　山の中を進んでいた一行だが、ぐるりと左へ曲がったところで、視界が開けた。
　マインツの山々を眺めることができる場所だ。
「すごい……」
　シュリが立ち止まり、その景色に目を奪われていた。
　その横にリーシャもならんで、うなずく。
「街を少し出るだけで、こんなにも素敵な場所があるのね」

「ん？　リーシャ姉は知ってたんだろ？」
「ゆっくり立ち止まったことはないから……」
「あ、そうか……こんなところ、ふつうなら徒歩で来ないもんな」
「ロイドさんたちに感謝しないと……あ！　ごめんなさい、つい見入ってしまって」
「いや、そろそろ休憩しようと思ってたから、ちょうどいいよ。だいぶハイペースで来たからな」
　ティオは魔導杖を支えにして、なんとか、しゃがみこむのに耐えていた。
　エリィのほうも、汗をハンカチでぬぐっている。
　ランディは重たいスタンハルバードを担いで、まだ余裕がありそうだった。それとなく、周囲を警戒してくれている。
「バス、見かけなかったなあ？」
「トラブルから回復して、もうマインツに向かったのかもしれないな」
「ちょいと楽観的な気もするけど、意外とそんなとこかもな」
　ランディが肩をゆすって笑う。
　ティオが魔導杖を掲げた。
「見晴らしもいい場所ですし、付近をサーチしてみます」
「もう大丈夫なのか？」

「……わたしは、最初から問題ありません。子ども扱いされるのは心外です」
　シュリを意識しているのか、いつも以上にティオが意地を張っている。
　すこし心配になるロイドだったが、ここは信頼することにした。
「じゃあ、頼むよ」
「はい……」
　ティオがうなずくと、シュリが物珍しそうに尋ねてくる。
「なんだ？　なんかやるのか？」
「だ、だめよ、シュリちゃん……お仕事の邪魔をしたら」
　リーシャがたしなめた。
　とはいえ、なにをするかくらい教えてあげてもかまわないだろう。
「ティオは特別なセンサーを持っていて、その感度を高めることで、かなり遠くのことも把握できるんだ」
「マジかよ⁉　すげえじゃん！　ただのチビッコじゃなかったんだな！」
　シュリが瞳を輝かせて賞賛した。
　魔導杖を構えたまま、ティオが赤面する。
「こ、これくらい……どってことありません……」
　ちょっぴり得意そうな様子に、ロイドたちは苦笑してしまった。

おほん、とティオが、わざとらしく可愛い咳払いをする。
「……すこしだけ、静かにしていてください」
「おう、わかった！」
うなずくと、シュリは両手で口元を押さえた。
他のメンバーも固唾を呑んで見守る。
風の音と、鳥の鳴く声がした。
「アクセス。……感度、最大……付近をサーチします……」
ティオの髪飾りの三角部分が、赤く明滅しはじめる。
魔法陣が浮かび上がった。
穏やかな青白い輝きが、彼女を包んだ。
そして——
「ッ⁉」
「ティオ、なにかわかったのか？」
「この先で、魔獣が戦っている音がしました！　それと、金属音も……」
「なんだって⁉」
「距離は、20セルジュほどかと」
「それなら一息に走れるな……行こう、みんな！」

「はい」
「わかったわ！」
「おっしゃ、急ごうぜ！」
ロイドの呼びかけに、ティオ、エリィ、ランディが声をあげた。
リーシャとシュリもついてくる。
「シュリちゃん、魔獣がいたら、絶対に私から離れないで」
「わかってるって！」
ほどなく、ロイドたちの耳にも、戦いの音が聞こえてきた。

停留所の手前、吊り橋をくぐった直後の場所に、バスの姿があった。
あんなところで停まる予定はないはずだ。
白煙をあげている。
ガシャン！　ガシャン！　と金属音がしていた。
ロイドは目を見張る。
「魔獣だ！」

「でかいぞ！　よりによって、バスを攻撃してやがる！」
ランディがスタンハルバードを構えた。
バスのなかで乗客が助けを求めているのが、窓越しに見えた。
たちこめる白煙のせいで、その顔まではわからないが……
ティオが警告する。
「バスの導力機関が燃えているようです……車内に火が移る可能性もあり、あのまま乗っているのは危険かと！」
「バスを壊すなんて……街道の魔獣とは思えないわ……」
エリィが緊張した声をあげた。
ロイドは思考を巡らせる。
バスの乗客の安全が最優先だが、そのためには魔獣を遠ざけなくては。
「まず、魔獣を引き離す！　それから、バスの乗客を避難させるんだ！」
自分とランディが魔獣と戦い、ティオとエリィに乗客の誘導をしてもらおう――そう指示しようとしたとき、後ろからリーシャの声がした。
「ロイドさん！　私たちがバスに乗ってる人たちを避難させます！」
「えっ⁉」
「あの魔獣、手加減できる相手じゃありません！」

「わ、わかった……頼む、リーシャ！」
ロイドは仲間全員で、魔獣へと向かった。
リーシャが魔獣の強さを感じ取った理由はわからない。
しかし、バスを破壊してしまうほどの魔獣だ。かなり危険な相手なのは間違いなかった。
その魔獣は、紫色の頭を持ち、筋肉の塊のような身体を上半身だけ、地面の穴から出していた。
見えている上半身だけでも、ロイドより大きい。
全身を硬そうな体毛で覆っており、所々に棘のような長い毛が生えている。
なにより特徴的なのは、両手に備わった巨大な爪だった。
一本一本が剣のように鋭く太く長い。
その凶悪な爪で、バスの外装を破壊し、導力機関まで傷つけたようだ。
ロイドは注意を引きつけるべく、武器（トンファー）で殴りつける。
「さぁ、かかってこい！」
「歯応えありそうじゃねぇか‼」
同じように、ランディも打撃を加えた。
頑強だ。さほど効いた様子はない。
それでも、自分たちへ魔獣の意識を向けさせることはできた。

バスから遠ざける。
ティオが魔導杖を突き出し、《アナライザー》を使う。
センサーを集中させて敵の情報を収集する、彼女の得意技だった。
「なっ⁉　これは、グランドリューではありますが……危険度、大……手強いです」
以前、同じタイプの魔獣とは戦ったことがあるが、これほど強くはなかった。
人間にも強い弱いがあるように、個体差があるのだろう。
得られた情報をティオが数値化して教えてくれる。
ロイドたちに戦慄が走った。
「そんなに強いのか⁉」
「やばいぜ、ロイド……準備なしに戦える相手じゃない」
「くっ……」
「でも、まだ避難は終わってないわ！」
エリィの言うとおりだ。
リーシャとシュリが、バスの中に声をかけ、今、ようやくハッチが開けられたところだった。
白衣の青年と、看護師姿の女性が降りてくる。
「ロイド⁉　ロイドなの……⁉」

「セシル姉⁉」
バスに乗っていたのは、ロイドの姉のセシルと、研修医のリットンだった。
「ひ〜‼　た、た、たすけて〜‼」
「セシルさん！　今は、避難してください……‼」
「えっ⁉　リーシャさん⁉」
「理由あって手伝っています！　さあ、急いで避難を！」
「そ、そうね！」
リーシャにうながされ、セシルがうなずく。
運転手も降りてきた。
「あ、ありがとうございます！　バスに乗ってたのは、これで全員です！」
「急いで逃げてください！」
「はい！　って……リーシャ・マオ⁉」
どうやら、誘導は彼女たちに任せておいても大丈夫そうだ。
ロイドは魔獣に意識を戻す。
グランドリューが、ぐんっと身体を反りかえらせる。
「グオオオオオォォォォォォォォ〜〜〜〜〜〜‼」
恐ろしい雄叫びをあげる。

リットンが、腰を抜かしてしまった。
「ひっ……ひぃぃぃ〜〜〜⁉」
「しっかりしてください、リットンさん！」
セシルに叱咤され、シュリに引っ張られて、彼は倒けつ転びつ逃げはじめる。
「さあ、運転手さんも早く！」
「は、はい！」
リーシャに言われて、バスの運転手も走りだした。
街道をクロスベル方向へ逃げていく。
あとは、この魔獣を退治できれば、大丈夫だ。
「みんな！　全力でいくぞ！」
「わかったわ！」
「おう、任せろ！」
「いきます……」
ティオが魔導杖の先端を、グランドリューに向けた。
「……ガンナーモード、起動します……オーバルドライバー、出力最大………………
エーテル、バスター‼」
青白い閃光がほとばしる。

まぶしくて、目を開けていられないほど。
轟音が鳴りひびいた。
ティオの切り札であり、ロイドたちが使えるなかで、最も威力のある攻撃だ。
ところが、ティオが息を呑む。
「……ッ⁉　敵、反応あり！　しかも……そんな……」
ロイドは自分の目を疑ってしまう。
「なんだと⁉」
巻きあがった土煙が晴れたとき、そこには、さらに三体のグランドリューが現れていた。
ランディが舌打ちする。
「チッ……そういうことか。さっきの雄叫びで、仲間を呼びやがったな⁉」
「ど、どうするの、ロイド⁉」
エリィが拳銃を構えつつ尋ねてきた。
——時間を稼いで、逃走するか？
いや、ロイドたちはともかく、一般人であるセシルたちが、何セルジュも魔獣から走って逃げるなんて、無理だ。
彼女たちが遠くに逃げるまで時間を稼ぐのは、退治するよりも難しいだろう。
「俺たちが逃げるわけにはいかない……ここで倒すしかないんだ……‼」

「そ、そうよね……」
「へへ！　とっとと終わらせようぜ！」
ランディが空元気で鼓舞する。
ティオがうなずいた。
「こんなところで……負けるわけには、いきません……」

リーシャは、バスに乗っていた人たちや、シュリを連れて街道を走っていた。
しかし、一般人の研修医や運転手は、早くもバテはじめている。
セシルだけは気丈に振る舞っているものの、彼女とて限界は近いだろう。
なにより、嫌な予感が消えていない。
（本当に危ないのは、こちらではなく……やっぱり、ロイドさんたち……）
「ちょっと休憩を入れましょう」
リーシャの声に、ぷはぁ～と男ふたりがへたりこんだ。
シュリが不満そうに嘆く。
「かぁ～！　だらしないな！」
研修医のリットンが、息も絶え絶えに返す。
「ぜえ、ぜえ……そ、そう言わないでくれよ……僕はデスクワークのほうが得意なんだ……はぁ、はぁ……」
「わ、私も……持病の腰痛が……うぅぅ……すみませんね、お客さん……」
運転手のほうも、これ以上は走れそうになかった。
戦闘の音が聞こえないくらいには離れたし、特務支援課が魔獣を退治できれば、充分に安全だとは思うが……
おそらく、それこそが難しい。
（あの魔獣は、今のロイドさんたちでは……気配もひとつじゃなかったし……）
助けに行かなければ！
「あの、みなさん、ここで待っていてください。動けるようなら、できるだけクロスベルのほうへ」
シュリが目を丸くする。
「え？　リーシャ姉、どうする気だよ？」
「私は、ロイドさんたちの様子を見てくるわ」
「なっ⁉　なに言ってんだよ⁉」
「ごめんなさい、シュリちゃん……だけど、私、行かなくてはいけないから……」

「意味わかんないよ！」
唐突に、セシルが駆け寄ってきた。
リーシャは手を取られ、ぎゅっ、と両手で握られる。
「な、なんですか、セシルさん？」
「そう……そうなのね……リーシャさん……」
「えっ⁉」
「今まで、気づかなかったけれど、あなたは……」
セシルが真剣な瞳で見つめてくる。
（ま、まさか……私が《銀》だとバレた⁉　ううん、いくらなんでも、そこまでは無理よね……でも戦える力を持ってることは気づかれたのかも？　そういえば、この人は、イリアさんの親友だったっけ……）
セシルを紹介したとき、イリアは笑って言ったものだ。
〝有能かと思えば天然で、生真面目かと思えば意外と話せる。そして、いざというときには鋭くて、よく助けてもらったものだわ〟と。
それは、日曜学校での話だったが、あのイリア・プラティエが〝鋭い〟と評したのだ。
ウルスラ病院でも、若くして看護師チーフを任されていると聞く。
「ううぅ……」
（よりにもよって、ロイドさんのお姉さんで、イリアさんの親友である、この人に見抜かれてしまうなんて……）
しかし、まだ確信はないはず。
誤魔化せるかもしれない。
「あ、あの、なにを感じられたか、わかりませんけど……私は、べつに……」
「いいのよ、隠さなくても。さっきの表情を見て、確信したわ」
「そんな⁉」
リーシャは声から体格まで変えて、変装することができる。
演劇をはじめてからは、さらに磨きがかかったと自負していた。
（毎朝、鏡の前で表情の練習までしてるのに！）
セシルが微笑む。
「ぜんぶ、わかったわ、リーシャさん」
「くっ……どうやら、セシルさんには……き、気づかれてしまったようですね……」
声が震えた。
シュリが見つめている。
研修医や運転手が聞いている。
アルカンシェルでの日々を思い出して。

失われる光を想い。
　涙がこぼれそうになる。
「わ、私は……ロ、ロイドさんが……」
　――ロイドたち特務支援課が追っている、《黒月(ヘイユエ)》の協力者。東方人街の魔人。伝説の凶手。
《銀(イン)》

「リーシャさん、ロイドとお付き合いしてるのね!?」

「…………は？」
　セシルが乙女な瞳をキラキラさせていた。
「さっきの表情を見て、ピン！　ときたのよ。あれは、恋人を想う顔だって」
「い、いえ……あの……」
「ロイドもリーシャさんも、ひと言くらい教えてくれればいいのに。あっ、それとも、最近、お付き合いするようになったのかしら？」
「ちょっ……セシルさん……？」
「ああ、そうだわ！　リーシャさんは、アルカンシェルのスターだもの。男性とお付き合いだなんて、絶対に知られたらいけないのよね!?」

「まぁ、仮に、恋人ができたとしたら……劇団長に相談して公表するタイミングは選ぶと思いますけど……って、どうして、そういう話になってるんですか!?」
「いいのよ！　ぜんぶ、わかったから！　ごめんなさい、私が軽率だったわね。これからは、影ながら応援させてもらうわ！」
　もう彼女のなかでは、リーシャはロイドと秘密の関係にあるらしかった。
　イリアが聞いたら、脚本のネタとして喜びそうだが。
（ああ……そういえば……イリアさんから〝天然〟とも評されていましたね、セシルさん）
　脱力してリーシャは肩を落とした。この疲労感は、マインツ山道を登ってきたよりも酷い。
　シュリが顔を真っ赤にして、拳を握っていた。
「リーシャ姉！　そうだったのかよ！　オレにもナイショだったなんて！　あ、でも、イリアさんは知ってるんだろ!?」
「はぁ～……シュリちゃんまで……」
「あんなやつに、リーシャ姉はもったいないって思うけど！　でも、ほ、他のヤツよりはマシだし……オレ、反対しないから……」
「あ、うん……そっか……」
　リーシャだって、ロイドのことは憎からず想っているが、恋人になったわけでもないの

に、応援されたり、認められたりしても――

　とっても切ない。

　すごく恥ずかしい。

　わりとみじめ。

　しかし、ここで誤解を解くよりも、利用したほうが話が早そうだ。

（そうよね。私は《銀》――利用できるものはすべて利用する……それだけのことよね。ううぅ～）

　乙女心が痛すぎて、ちょっぴり涙が出てくるけれど。

　リーシャはうなずいた。

「私、ロイドさんのところへ行かないと……わかってもらえますよね？」

「もちろんだわ！　恋人が応援してくれたら、きっと励みになると思うの。ロイドのこと、よろしくお願いね！」

「リーシャ姉……幸せになってくれよな」

「う、うん……行ってきます！」

　顔を上気させているセシルとシュリと、ようやく息を整えた男たちに別れを告げて、リーシャは街道を戻る。

　セシルたちの視界から隠れた。

次の瞬間――

黒衣の男が、大地を蹴った。

「だああああっ！　タイガァーーーチャーーージッ!!」

ロイドは必殺技を叩きこんだ。

「ギョアアァァァァ〜〜〜〜〜〜〜!!」

絶叫をあげて、巨体が崩れ落ちる。グランドリューを一体だけ、ようやく退治できた。

しかし、目の前には、まだ三体もの魔獣が爪を光らせていた。

多くの攻撃を受け止めたランディが膝をついている。

ティオは魔導力も体力も限界のようだ。

毒に犯されてエリィの顔色が青ざめている。

ロイドは渾身の大技で、なんとか一体を倒したものの、残る三体を相手にするだけの余力は、もう残っていなかった。

「くっ……こんなところで……」

負けられるものか！

武器を握る手に力を込める。

そのとき、上のほうから、聞き覚えのある声が降ってきた。

「――無様だな」

「なっ⁉」

振り向く。

街道をまたぐ形で吊り橋がかかっている。その支柱の上に、人影があった。

黒衣をまとい、顔を仮面に隠している。

歪められた声と、強烈な威圧感。

「あんたは……銀(イン)⁉」

「ぐっ、くっ……やばいぜ、ロイド……こんなときに……」

ランディがうめく。

エリィとティオも武器を構えるが、戦う力など残っていなかった。

黒衣の男が、鼻で笑う。

「フ……その程度の雑魚に苦戦とは……相変わらず、非力な連中だ」

「ううぅ……」

ロイドには言い返すことができなかった。

銀が殺意を放つ。
「……まとめて、始末してくれる‼」
「どれほど強大な相手でも……俺たちは絶対に諦めない！」
ロイドは歯を食いしばる。
――どうする⁉　今、大技を受けたら、俺もみんなも耐えられない！
銀が飛び上がった。
「我が舞は、夢幻……去り逝く者への手向け……眠れ、銀の光に抱かれ……縛ッ‼」
両手から幾本もの鎖が伸びる。
巨大なグランドリューたち三体の動きを封じた。
「ギョワ⁉」
「ギュルッ⁉」
「グルアアァッ⁉」
悲鳴をあげ、身じろぎするが、魔獣たちが自由を得ることはない。
黒衣の男がローブ下から、巨大で幅広な刀を取り出した。
影が走る。
大刀が頑強な皮を裂き、肉を断ち、骨を砕いていった。
銀が裂帛の気合いを放つ。

「ズゥァァァァァァァァァ……滅ッ‼」
「「「ギュアァァァ～～～‼」」」
魔獣たちが絶叫した。
次々と倒れ伏す。
「な……に⁉」
ロイドは自らの身体を確かめる。グランドリューとの戦いで負った傷はあるが、それだけだった。
「俺たちを……攻撃しなかった……のか？」
「フ……運だけはいいようだな」
相変わらず高い場所から、黒衣の男が言った。
助けられた？
まさか！
ロイドは問いただす。
「どういうつもりだ⁉　それに、どうして《黒月》に雇われているはずの銀が、マインツ山道なんかに⁉」
「む」
「しかも、徒歩で……？」

「そ、それは……」
「それは……⁉」
「……ハイキングだから」
「ん？　なんだって？」
　わずかに沈黙があった。
「今、お前たちに教える必要は、ない」
　銀(イン)が背を向けた。
「どこへ行くつもりだ⁉」
「フ……この場で、お前たちを始末するのは簡単だが……手負いを倒すほど退屈なことはない……私を捕らえたいのであれば、せいぜい強くなることだ」
「ま、待て！」
　ロイドの声も虚しく、黒衣の男は姿を消してしまう。
　魔獣は消え、銀(イン)もいなくなった。
「くっ……」
　気を張っていたロイドだが、戦いが終わった途端、痛みに膝をついてしまった。
「大丈夫か、ロイド⁉」
「あ、ああ……ランディこそ……」

「ヘッ、俺は気力を溜めてたのさ。ヤツが近づいてきたら、一撃かましてやるつもりだったんだがな。逃げられちまったか」
　軽口を叩く彼に、ロイドは笑いかけた。
　ティオがエリィの毒を除去する魔法(アーツ)を使う。
「ふぅ……どうですか、エリィさん？」
「ありがとう、ティオちゃん」
「それにしても、銀(イン)の目的はいったい……あれでは、まるで、わたしたちを助けに来たようなものですが……？」
「不思議ね。伝説の暗殺者とまでいわれた銀(イン)が、とくに用もないのに私たちを助けるとは考えにくいけど……」
「妙ですね……」
　エリィとティオがそろって首をかしげた。
　ロイドは立ちあがり、武器をしまう。
「よし……ひとまず、セシル姉たちと合流しよう」
　うん、と仲間たちがうなずいた。

ロイドたちはクロスベル方面へと急いだ。
戦いになる前に休んでいた、見晴らしのいい場所まで戻ると、そこにセシルたちが待っていた。
リーシャ、シュリと、研修医のリットンとバスの運転手もいる。
セシルが手を振る。
「ロイド～!!」
「セシル姉、無事だったんだね！」
急いで駆け寄った。
「ええ、ロイドとみなさんのおかげね……ありがとう」
「俺も他の人に助けられたんだけど……なんにしても、よかったよ」
ロイドは心から全員の無事を喜んだ。
ティオが、「エニグマで、クロスベルに連絡しておきました。しばらくすれば、救護車が来ると思います」と告げた。
エリィとランディがため息をつく。
リットンが天に向かって感謝の言葉をならべたてた。
「おお、女神(エイドス)さま、ありがとうございます！　助かった～」

運転手が怖々と訊いてくる。
「す、すみません……あの大型の魔獣は、どうなったんですかね？」
「一体は俺が仕留めましたけど……他の三体は、通りがかりの銀(イン)が倒してくれたんです」
リーシャがすごく驚いた顔をする。
「銀(イン)……って、あの銀(イン)が現れたんですか!?」
「ああ」
「インってなんだ？」
そういえば、シュリは前の事件のときは、まだアルカンシェルに在籍していなかった。
「東方人街の魔人なんて呼ばれてる伝説の暗殺者らしいんだけどな」
「悪いヤツなのか!?」
「クロスベルでは、まだ大きな事件を起こしてないけど……放ってはおけない相手であることは確かだよ」
「そんなヤツが、通りがかって助けてくれるなんて、変じゃね？」
シュリの疑問は当然だ。
ロイドたちも感じていた。
ぱたぱた、とリーシャが手を左右に振る。
「き、きっと、なにか事情があったんじゃないでしょうか？　本人に聞いてみないと、正

解なんてわかりませんし……深く考えても仕方がありませんよ」
「そうだな……」
　ロイドがうなずくと、なぜかリーシャが吐息をついた。
　セシルが、じっと見つめてくる。
「ロイド、リーシャさんとは、どういう関係なの？」
「え？　まさかセシル姉、また勘違いしてるんじゃ……俺とリーシャは無関係というか……知人……いや、友人くらいだと思うよ」
「あ、あはは……」
　リーシャが複雑な笑みを浮かべた。
　セシルは不服そうだ。
「さっき、リーシャさんはロイドたちの応援に行ったのではなかったの？」
「いえ、何度も説明しているとおり、戦いの様子を見に行ったんです……で、でも、怖くて近くまで行けなくて……」
「そうだったのか」
　ロイドは冷や汗をかいた。あのグランドリューと戦っているとき、リーシャが来ていたら守る余裕はなかった。
　シュリが明るい表情を見せる。

「ははっ！　まぁ、そんなこったろうと思ったぜ。おまえなんかに、リーシャ姉はもったいなさすぎるもんな！」
「俺だって、そんなに大それたことは、考えたこともないよ」
　ロイドは苦笑する。
　リーシャが首を左右に振った。
「そんな！　私なんて普通ですから、ロイドさんと不釣り合いなんてこと……あっ！　そ、そういう意味ではなく……!!」
「はは……ありがとう、リーシャ。そんなふうに言ってもらえるなんてうれしいよ」
「あ、う……」
　リーシャは耳まで赤くなっていた。
　ロイドはうなずく。
「たしかに、俺たちの間で上とか下とか言うのも変な話だな。これからもよろしく頼む」
「……はい」
　どうやら恋人という仲ではないらしい、と納得してセシルは、ため息をついた。しかし、友人を得たことは喜んでくれているようだ。
　シュリが、ロイドとリーシャの間に割り込んできて、ベタベタすんなよ～と邪魔をする。
　エリィとティオが、いつもの調子でジト目になっていた。

「はぁ……あんなこと言って、自覚がないなんて……」
「……まぁ、天然ですから」
　バスの運転手が、街道の先を指さす。
「救護車だ！　お～～～い！」
「おお、お助け～‼」
　ずっと女神様に感謝を述べていたリットンが、両手をぶんぶん振りたくる。
　ランディが荷物を担いだ。
「おっし！　行くか」
「ああ、戻ろう、クロスベルに！」
　ロイドの言葉に、みんながうなずいた。
（ふぅ……）
　リーシャは安堵の吐息をついた。
　みんなが救護車へと乗りこんでいくのを一番後ろで眺める。
　ロイドたちの言動から、疑われている様子はなかった。
　証拠など残していないはず。
　そっとリーシャはつぶやくのだった。
「…………大丈夫。バレてない……よね？」

第5話

『ダドリーとバースデーパーティー』

かすかに薬品のニオイがただよっている。
ロイドは特務支援課の仲間たち――エリィ、ティオ、ランディとともにウルスラ病院を訪れていた。
中庭や受付に、いつもより多くの患者や見舞客の姿がある。
「なんだか、あわただしい感じがするな……」
「あれだけ大きな事件だったんだもの。無理もないわ」
エリィの言葉に、ティオもうなずいた。
「……市民だけでなく、警察や警備隊からも大勢の被害者が出ていますから」
「そうだな」
ロイドは先日の大規模な事件を思い出して、しばらく目を伏せた。
ランディが「おっ」と声をあげ、ブンブンと手を振る。
「セシルさん、こんちわッス！」
顔をあげたロイドは、栗色の髪の女性セシル・ノイエスがやってくるのを見つけた。
彼女は病院の看護師チーフという立場で、今もナース服に身を包んでいる。
ロイドとは実の姉弟（きょうだい）のような仲だ。
「こんにちは、セシル姉」
「あら、ロイドじゃないの！　それに、みなさんも……今日は、お仕事？」

「うん。入院しているルバーチェ商会の人たちから話を聞きたいんだけど……できるかな？」
セシルが思案顔になる。
「そうね……何人かは、もう話をするくらいなら大丈夫だと思うわ。念のため、先生に確認してみるけど」
「よかった」
「ありがとうございます、セシルさん」
「……お仕事中にすみません」
エリィとティオが丁寧に頭をさげると、セシルがひらひらと手を振って返す。
「気にしなくていいのよ。これも仕事のうちだから」
「さすがです……」
妙なところで感心するティオだった。
ランディが身を乗り出す。
「セシルさん、お仕事、大変そうッスね！」
「ぜんぜん平気よ、と言いたいところだけど……これだけ患者さんが増えるとね」
「俺でよかったら気晴らしに付き合いますよ！」
「ラ、ランディ、なに言ってんだ……!?」

ロイドは女性関係に奔放な友人の襟をつまんで、猫つかみで引っ張る。
セシルは笑っていたが、エリィとティオはいつものようにジト目になっていた。
「まったく、ランディは……」
「……ダメダメですね」
案内してくれるセシルについて行き、まずは担当医師の部屋に向かう。
その途中で、彼女がうれしそうに教えてくれた。
「今朝、先生がおっしゃってたんだけど……症状が軽い患者さんのなかには、そろそろ退院できる人もいるのよ。警備隊の方とか」
「そうなんだ。よかった」
「ふふ、本当にね。リハビリはしてもらう必要があるけれど、ちゃんと元通りに回復できるらしいわ」
「なるほど。それなら……あ……」
廊下で、見知った相手とすれ違う。
軽くウェーブのかかった金色の髪に、エメラルド色の瞳の女性だった。
一瞬、目が合ったかと思ったが、相手は気づかなかったかのように通り過ぎてしまう。
警備隊の制服ではなく病院服を着ていたから、すぐにはわからなかったが、彼女は――

振り返ると、ランディが気まずそうな顔をして肩をすくめた。
「ランディ、今のは、ミレイユ准尉だよな？」
「ああ、そうだな……」
「声くらいかけたらいいんじゃないか？　その……親しくしてるんだろ？」
「なあに、元同僚ってだけさ……まぁ、あいつは、これしきのことで参っちまうほどヤワじゃねぇから心配するな」
「そうか……ランディがそう言うなら……」
金色の髪の女性は、廊下の先にある扉へと入っていた。
オホンッ、とエリィが咳払いする。
「レディがシャワー室に入るのをじっと見てるなんて、恥ずかしいことしないの」
「えっ⁉」
ロイドは赤面し、そんなつもりはなかったと釈明するのだった。

担当医師の許可を取ってから、ルバーチェ商会の者たちの話を聞き、知り合いを見舞って、受付へと戻ってきた。

「ありがとう、セシル姉。助かったよ」
「どういたしまして。ところで、もうすぐお昼だけど、ロイドたち、ご飯はどうするの？」
「とくに決めてなかったけど……」
「私、そろそろ休憩の時間だから、よかったら一緒にどうかしら？」
「そうだね」
「おっ、いいッスね！」
ランディが話に乗って、エリィとティオも異存はなさそうだ。
それでは、とウルスラ病院にあるオーベルジュ《レクチェ》へ向かおうとした。
そのとき――
「む、特務支援課か」
精悍な顔つきと、黒縁のメガネが印象的な、いかにも几帳面そうな男性が、ロイドたちのほうへと歩いてくる。
肩幅のある身体を背広に包んでおり、きちんとネクタイまで締めていた。
「あ、ダドリー捜査官！」
やってきたのは、クロスベル警察の捜査一課に所属するエリート捜査官、アレックス・ダドリーであった。
ティオが「……メガネスーツです」とつぶやき、ジロッと睨まれる。

「ふん。バニングス、またなにかあったのか？」
詰問するような口調だが、べつに疑っているとか怒っているとか、そういうことではなく、これが彼の地である。
ロイドは苦笑しながら頭をかいた。
「いえ、先日の事件の経緯を詳しく報告するために、関係者から話を聞いてるだけで……とくに変わったことは起きてません」
「そうか。ならばいいのだがな」
「はは……いくら俺たちでも、そうそう大きな事件に当たったりはしませんから」
「そう思うのなら、お前たちが、ここ数ヶ月で解決してきた事件の報告書を見直してみることだ」
「報告書ですか……？」
「いくつもの大きな事件を解決していることを……忘れたわけではあるまい」
ダドリーは仏頂面のままだったが、どうやら、支援課のことは評価してくれているらしい。
ティオが「……ツンデレです」とつぶやき、また睨まれた。
ロイドたちは苦笑する。
「えっと……ダドリー捜査官は、なにかあったんですか？」

「当然、仕事で来たのだ。詳しいことは捜査上の機密だから教えることはできないが……それより、お前たちはまだ病院に用事があるのか？」
「いえ、もう終わりましたけど……」
「そうか。であれば、早く次の支援要請に取りかかることだ……私は特務支援課の成果をあるていど評価している。成果をあげた者には実力があると判断する。そして、実力がある者は、さらなる成果をあげるべき――というのが私の考えだ」
「な、なるほど……!!」
　元々生真面目なところのあるロイドは納得してうなずいた。感銘を受けたと言ってもいい。
　しかし、マイペース派のランディは、ため息で応じる。
　ティオも「……回し車のなかを走るハムスターみたいです」とこぼして、またダドリーに睨まれてしまった。
　ダドリーが号令する。
「まだこの街（クロスベル）は多くの問題を抱えている。お前たちは実力を示した。であれば、相応の働きをするのが義務だ！」
「は、はい!!」
　追い立てられるように、ロイドたちはウルスラ病院を出る。

　セシルが手を振って見送ってくれた。
「お昼は、また今度ね。がんばって、ロイド。みなさんも」
「はは……ごめんね、セシル姉。また来るよ！」
「くぅ～、セシルさんとのランチが……」
　ランディがこれ以上なく肩を落としていた。
　バス停に向かう途中――
　ティオが唇を尖らせる。
「……支援要請に応えるのは望むところですが……ツンデレメガネスーツは堅物すぎます」
「仕方ないわね。お昼はクロスベル市内で取りましょう」
　エリィがなだめる。
　ロイドも、ひさしぶりに会ったセシルとの昼食は残念だったけれど――ダドリー捜査官の職務に打ちこむ姿に、尊敬の念を抱いていた。
「俺たちも全力を尽くしてるつもりだけど、ダドリー捜査官は本当にすごいと思うよ。兄貴とは違った意味で目標だし、学ぶべきところも多い」
　エリィがうなずいた。
「そうね……ロイドのお兄さんも、とても仕事熱心だったんでしょう？」
「うん。仕事なのか遊びなのか、わからないようなときもあったけど」

「ふふ、型破りな人だったみたいね」
「今にして思うと、あれは情報収集だったのかな。ときどき兄貴はカジノやバーで盛りあがって朝帰りして、セシル姉に心配されてたよ」
「そういえば、ロイドのお兄さんと、セシルさんは……」
　エリィの表情が、わずかに陰る。
「ああ……」
　ロイドの兄ガイ・バニングスと、セシルは婚約していた。
　そして、彼女は今でも亡くなったガイのことを想いつづけているようだ。
　ロイドは青い空を見上げる。
「俺は、いつか兄貴に追いつけるのかな？」

　くいっ、とダドリーはメガネを直す。
　ロイドたち特務支援課を見送っていた看護師――セシルへと視線を向けた。
「騒がしくして申し訳ない。仕事柄か、どうも声が大きいようだ」
「ふふ、大丈夫でしたよ。いつもお忙しそうですね、ダドリーさん」
「これでも、だいぶ落ち着きました。病院のほうこそ患者が増えて大変でしょう」
「似たようなものです。数日前に比べたらよくなりました。ダドリーさん、今日はお仕事ですか？」
「警備隊の一部が退院できそうだと聞きまして」
「あら、耳が早いですね」
「それも仕事のひとつですから。面会することはできそうですか？」
「大丈夫だと思いますよ。一応、私も同席しますね」
「ご協力、感謝します」

　ウルスラ病院３１８号室――
「なるほど……隊員たちが集められ、上官から直接、手渡されたわけだな？」
「はい」
　金色の髪の女性が、はっきりと答えた。
　後遺症はあるらしいが、もう話しているだけなら、影響は感じられない。
　彼女はベッドに腰掛けて、ダドリーは向かい合う形でパイプ椅子に座っていた。
「そのとき、拒否した者は？」
「いませんでした。命令を疑っていては私たちの組織は成り立ちません」

「ふむ」
病室の扉が開かれる。ガラガラと台車を押して、ナースがひとり入ってきた。
「こんにちは～。ミレイユさん、お昼ですよ～」
もうそんな時間か——とダドリーは腕時計に目を落とした。
セシルが声をかける。
「おつかれさま、シロンさん」
「あ、セシルさん、おつかれさまです～!!」
「ここは、私がやっておくわ」
「だいじょうぶですよ～、まかせてください！　ミレイユさん、お食事で～す！」
差し出されたトレーには、特別な治療なのかと思うくらい小さな器に、少ない食事が載っていた。
ミレイユが眉をしかめる。
「…………いただきます」
しかし、不服など言わずに受け取った。
ちょっと待って——とセシルが止める。
「シロンさん、これシズクちゃんのぶんじゃない!?」
「あれ？　ああ、間違えちゃいました～!!」

「では、私のは……？」
「あはは、こっちです、こっちです。ごめんなさ～い！」
「……シロンさん、本当に大丈夫？」
「もちろんです、セシルさん！　いつまでも失敗ばかりしてられませんよ～」
ダドリーは捜査手帳を開く。
（ふむ……明らかに子供用のメニューを出されても、文句ひとつ言わないか。彼女の証言は、あるていど信用してよさそうだな）
さらさら、とメモを書きこんだ。
パイプ椅子から立ちあがる。
「では、このへんで失礼するとしよう。ミレイユ准尉、調査書作成の協力、感謝する」
「もうよろしいのですか？」
「入院患者の食事を邪魔するつもりはないのでな」
「わかりました……なにか気になることがあれば、またいくらでも聞いてください。司令部からも、可能なかぎり捜査に協力するよう言われています」
「了解した。それでは」
ダドリーが敬礼し、ミレイユもベッドに腰掛けたままではあるが、敬礼を返した。

病室を出ると、一緒に退室したセシルが尋ねてくる。
「これで終わりですか？」
「ええ」
「そうですか。ダドリーさんは、お昼はどうされるんですか？」
「昼食か……とくに考えていないが……」
「ふふ、警察の方って、みなさんその調子ですね。ちゃんと三食を規則正しく取らないと、体を壊してしまいますよ」
「これは、面目ない」
思わぬところで注意されてしまった。
たしかに、忙しいと食事を抜くことも多くなる。いざというときのためにも、できるときは規則正しい食生活を心がけるべきだろう。
セシルが優しげな笑みを浮かべる。
「ふふ……ロイドもすぐ食事を抜くんですよ。無理しないように言ってるのに……ガイさんも同じでした。一生懸命なのはわかるのですけれど」
「そうですか。あいつらも……」
「でも、なにをするにも健康でないと。そのためにも、食事は大切だと思うんです」
「心に留めておきます」

「ダドリーさん、よかったら《レクチェ》で、ご一緒しませんか？」
「え……？」
「私も、今から休憩に入りますから」
「あ、いや、私ですか……？」
「もしかして、急ぎの用事がありましたか？」
「いえ、今日は本当は非番なので」
民間企業風にいえば、休日出勤とかサービス出社とか、そういう形だった。
だからこそ、市街を離れて病院まで来ることができたという面もある。
ダドリーは思案した。
（ひとりでサンドイッチでも食べたほうが早く食事を終えられるが……このセシル・ノイエス嬢は、ウルスラ病院の看護師チーフで、今回の被害者たちと長く接している。思わぬ情報が得られるかもしれんな）
「ふふ、もしかして、またお仕事のことを考えてますか？」
「あ、その……」
「仕方ありませんよね、警察官なんですから」
「……そうですね。でも、お食事はご一緒させてもらえますか」
「はい」

ウルスラ病院オーベルジュ《レクチェ》――

ダドリーは、セシルと同じ〝特製ビーフシチュー〟を食べた。彼女がお勧めするだけあって、野菜が豊富で、味もなかなかのものだった。

食後のコーヒーも文句なしだ。

セシルが微笑みかける。

「どうでしたか？」

「美味しかったです。それに、いろいろと知らなかった話も聞けましたし」

「お役に立ちますか？」

「捜査に直接関係があるかはわかりません……しかし、こういったことの積み重ねが大切だと思います」

症状の経過や、患者たちの精神状態や、効果のあったケアなど、有意義な情報だといえる。

「ふふ……よかったです」

笑顔の温かい女性だな、とダドリーは思った。

そのとき、隣の席で甲高い声があがる。

「きゃ～、このケーキ美味しいわ～!!　リンも食べればいいのに♪」

「いいっての。私が甘いの苦手なの、エオリアだって知ってるだろ？」

「こんなに美味しいのに～。この味が楽しめないなんて、リンってば可哀想～」

「また太るよ……？」

「ひどい！　お姉さん、泣いちゃうわ！」

騒がしい。

ダドリーは眉をひそめた。

（リンにエオリア……クロスベルの遊撃士たちか……）

警察こそが市民を守る組織だというプライドを持っているので、『民間人の保護』を掲げる民間団体――遊撃士教会(ブレイサーギルド)には強い対抗心を抱いているのだ。

とはいえ、病院で揉めるつもりはないが。

彼女たちの会話が聞こえたのか、セシルがメニューを見せてくる。

「ここのお店、ケーキも美味しいんです。カロリー控えめでも味を落とさないのがポリシーだとか」

「いや、私は甘いものは……」

「苦手ですか？」

「そ、そうですね。甘くないケーキならいいのですが……」

「くすっ……あ、ごめんなさい。ちょっと思い出したことがあったもので」
「思い出したこと？　なんですか？」
「昔のことです。聞いても、お役には立たないと思いますけど……」
「どんなことですか？」
「本当に、たわいない話ですよ――私、初めて大きなケーキを作ったとき、レシピを間違えてしまって……まったく甘くないケーキになっちゃったんです。むしろ、しょっぱいくらいの！　それなのに、味見したガイさんは、美味しいって言ってくれて」
「……あいつらしいな」
「ふふ、てっきり、優しさからお世辞を言ってくれたんだと思ったんです。ところが、本気で美味しいと思ったみたいで」
「え？」
「なんと、上司のお誕生日に持って行っちゃったんですよ」
「そ、それは……あいつらしいな！」
「うふふ……びっくりしちゃいました」
「大丈夫だったんですか？」
「そのときの上司は、セルゲイさんでしたから。結局、アリオスさんと三人で、ぜんぜん甘くないケーキを食べたみたいですよ」

「なるほど……」
　セシルが作ったのだと嬉しそうにしているガイを前に、微妙な味のケーキを黙々と食べるセルゲイとアリオスの姿が目に浮かぶ。

「どーだい、この甘くないケーキは！　イケてるだろ!?」
「お、おう……まぁ、斬新ではあるな……」
「………………うむ」

　思わず笑いがこみあげた。
　あまり表情を出さないダドリーだが、唇の端が引きつってしまう。
　セシルはころころ笑っていた。
「そういえば、ちょうど、この時期だったかしら……？」
「ん？　セルゲイさんの誕生日ですか？」
　ダドリーは手帳を開いた。
　わざわざ日付に丸を付けるようなことはしていないが、警察関係者のプロフィールは控えてある。

「本当だ。今日だったのか……」
「あら、それじゃあ、お祝いしたいですね」
「うーむ……」
　特務支援課も忙しいだろう、とは思うが――
（忘れて過ぎていたならともかく……気付いたのに、なにもしないのは落ち着かないな）
　セシルが珍しく身を乗り出す。
「ロイドたち、パーティとかするのかしら？」
「まさか。仮にも警察署で……いや、支援課（あいつら）のことだからな」
「ふふ……ロイドもお世話になってるし、急患が入らなければ、夕方にお祝いを持って行くくらいしようかしら」
「……そうですね」
「なにかするのか、ロイドに聞けるといいのだけれど……あ、そろそろ、休憩の時間が終わりみたいです」
「それでは、私も失礼します」
　ダドリーは病棟に戻っていくセシルを見送る。
　ふと、隣の席を見ると、難しい顔して書類と睨めっこしているリンの横で、エオリアが三つ目のケーキに手をつけていた。

「うふふ～♪　低カロリーだから、だいじょうぶ～♪」
（それは無理だ！）

　クロスベルに戻ったダドリーは、百貨店《タイムズ》に立ち寄った。
　中央広場にあり、ふたつの針がぐるぐる回る看板が目印の総合小売店で、高級品から日用雑貨まで幅広く取り扱っている。
　入口から階段へ向かう棚に、みっしぃグッズが売っていた。『プレゼントにも最適！』とポップにはあるものの。
（うーむ……さすがに、これをセルゲイさんにプレゼントするのは、ありえないな）
　二階にあがり、いつも利用している靴屋に顔を出した。
　この店では、年に何度か革靴を仕立てている。
　仕事柄、すぐに靴がダメになってしまうからだ。同僚にはスニーカーを履く者もいるが――捜査官ならスーツと革靴だろう、とダドリーは信じている。
　店主のハンソンが、にこやかな笑みで迎えた。
「おおっ、いらっしゃいませ、ダドリー様。また新しい革素材が入荷しました。ぜひ見ていっ

てください」
「ほう……」
「どうですか、この革の艶は？　帝国方面から入ってきたばかりの品でして。なかなか珍しいですよ」
「むむ、たしかに……この革でオーダーメイドの革靴を作ったら……あ、いや、今日は知り合いへの贈り物を探しているところでな」
「贈り物ですか？　サイズは、おいくつでしょうか？」
「それは……」
　手帳を開いてみたが、セルゲイのプロフィールに足のサイズまでは書かれていなかった。ため息をつく。
（さすがに、そこまでは調べてなかったか……足に合わせて仕立てた革靴を履いたときの、あの雲のうえを歩くような心地よさを、セルゲイさんにも味わってもらいたかったが！）
　残念ではあったが、当てずっぽうに用意できるものではない。
「すまん。邪魔したな……また寄らせてもらう」
「お待ちしております」
　ダドリーはアクセサリーなどを扱っているコーナーを見てみることにした。
「うーむ……」

　並んでいる商品に視線を巡らせる。
　ネクタイやタイピンは『肌身離さず』という意味合いから、恋人が贈る物らしい。衣服なども同じだ。
　ハンカチは『別れ』の意味があるのだとか。
　時計は『勤勉をうながす』という意味があるらしく、目上に対しては失礼になる。
「ええい！　意味がない贈り物はないのか!?」
「お客様、いかがなさいましたか？」
　店主のベイカーが声をかけてきた。孫もいるという初老の男だ。
「いや……職場の上司が誕生日なのでな」
「なるほど、ダドリー様のご職業でしたら、署名される機会も多いでしょう。万年筆などはいかがですか？」
「万年筆か……なるほど、さすがだな」
「畏れ入ります。種類はいろいろありますが……これなど、熱烈な愛好家がおり、あのクロスベル国際銀行の総裁ディーター・クロイス様もお使いだとか」
「ほほう」
「お値段は、それなりですが」
「ふむ……なに、これくらいの手持ちはある。包んでくれ」

「有り難うございます」
初老の男が、うやうやしく頭を垂れた。

プレゼントを持って、ダドリーは特務支援課のビルへと向かった。
ロイドたちは飛び回っているが、課長であるセルゲイは、支援課ビルにいることが多い。
玄関扉を開ける。
ソファーの置かれた応接スペースには、巨大な白狼が寝そべっていた。
「グルル……ゥ……」
ツァイトが片目を開いてダドリーのことを睨み、また目を閉じる。
（……入ってもいい、ということか？　番犬というには強烈すぎますよ、セルゲイさん）
「失礼する」
ダドリーが特務支援課のビルに入ると、厨房になっている部屋から赤毛の青年――ランディが「ん？　お客さんか？」と顔を出した。
「げっ⁉」
という声をあげて、げっ⁉　という顔をして、すぐに引っこむ。

「うおっ、お、おい！　ロイド！　やばいぞ……」
「……えっ⁉　ダドリー捜査官だって⁉」
そんな会話が聞こえてきた。さらに、女性陣の声も。
「げっ……という感じですね……」
「うーん、ちゃんと話せばわかってくれるんじゃないかしら？　悪いことをしてるわけではないのだし」
「ねーねーロイド、どうしたの？」
ティオとエリィと、幼い女の子の声まで聞こえてきた。
ダドリーは眉をひそめる。
（やれやれ、なにをしているんだ、支援課の連中は？　セルゲイさんにプレゼントを渡して早く帰るか……）
課長室へと足を向けた。
そのとき――
エニグマの着信音があがる。
ダドリーは反射的に胸元に手をやったが、この音は自分のものではない。
厨房からロイドの声が聞こえてきた。
「はい！　えっ⁉　ああ……そうか。わかった……いや、それが支援要請なら、俺たちは

受けさせてもらうよ！　場所を教えてくれ。詳しいことは依頼者から聞く」
　通話を終えたロイドと、支援課の面々が厨房から出てきた。
「おつかれさまです、ダドリー捜査官！　すみませんが、今から――」
「事件か、バニングス!?」
「はい！　〝いなくなった飼い犬を探して欲しい〟という支援要請です！」
「ッ!?　い、犬か……」
「犬です。行ってきます！」
　ロイドが走って玄関へと向かう。
「あ、ああ……」
　さすがに休日を犬探しに捧げる気にはなれないダドリーだった。
　ティオとエリィが、ロイドに続く。
「……どんな犬でしょうか？　わたし的には、まふまふできる長毛の大型犬が好みですが」
「ん～、私は部屋の中で飼える小型犬が好みかしら？」
　最後に「しゃあねえな～」と文句を言いつつランディが出ていく。
「気をつけてね～」
　厨房から顔を出して、ライムグリーンの髪の幼い女の子が小さな手を大きく振っていた。

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！

3名様
「黎の軌跡Ⅱ」2WAYアクリルキーホルダー
ジュディス、エレイン、アニエス、スウィン、ナーディア、ヴァン6キャラを1セットで3名にプレゼント！

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/
メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.141プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①「黎の軌跡Ⅱ」「お伽の庭城」のパーティー編成は？
　アンケート②「黎の軌跡Ⅱ」一番お気に入りのBGMは？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧
1：英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN- 最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
4：創の軌跡　THE MISERABLE SINNERS
5：ファルコムニュース
6：暁の軌跡最新情報
7：英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を

応募締め切り　11月25日（金）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。

ロイドたち四人が出動し、支援課ビルにはダドリーと、その幼い女の子――キーアだけが残された。

ずっと寝ているツァイトもいるが。

キーアの大きな瞳に、じっと見つめられる。

「えへへ、こんにちは！」

「うむ……留守番か。大変だな」

「キーアはへいきだよ」

「いつも、こうなのか？」

「ん～、だいたいこんなかんじ。ロイドたち忙しいから」

「そうだな……」

やはり子どもを育てる環境としては不適切ではないか――と感じるダドリーだが、それでも、当のキーア本人がロイドたちの元に留まることを望んでいるらしい。

（……そういえば、バニングス兄弟も似たような境遇だったか。どんな場所が幸せかは人それぞれかもしれないな）

英雄伝説 零の軌跡
～午後の紅茶にお砂糖を～

第8回

特務支援課メンバーが過ごす

クロスベル自治州のゆる～い(?)日常！

エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、『碧の軌跡』シリーズ。続編となる『閃の軌跡』、『創の軌跡』においても激動の中にあり、様々な壁が立ち塞がっていたが、怯むことなく立ち向かっていったのがロイド・バニングス率いる特務支援課メンバーだ。そんな特務支援課メンバーが、もしかしたら過ごしていたかもしれない日常を描く、魅力たっぷりの一冊をご堪能あれ！

キーアのことを見つめていると、『?』を浮かべて首をかしげられた。
「どうしたの？　ダドリー、今日もぶすっとしてるね」
「ぐっ……別にずふっとしているわけではない！　相変わらず年長者に対する礼儀がなっていないようだな」
「えへへ、なにかご用だった？」
　ダドリーの抗議は、さらりと流された。
　ぐぬぬっと歯がみするが、子どもの言うことだ。こらえておく。
「今日は、セルゲイさんに渡すものがあってな」
「かちょー？　おでかけしてるみたい。帰ってくるのは夕方かな」
「ふむ、本部だったか」
「うん」
　子どもの世話は大変なばかりだろうと考えていたが、まるで受付のようだった。実は意外と役に立っているのかもしれない。
「セルゲイさんは、ご不在か。仕方がない……渡す物は机にでも置いておくことにしよう」
「うん、わかった！　かちょーに言っておくね！　じゃあ、キーアはお料理があるから」
「ん？　待て。お前がひとりで料理をするというのか？」
「うん！　かちょーが帰ってくる前に作らないとね！」

　にこにこと笑顔でキーアが厨房に入る。
　中を覗きこむと、いくつもの食材が作りかけで置いてあった。
　そういえば、ロイドたちは料理中に支援要請を受けて出動したのだったか。
「んと、油物は後にしないと冷めちゃうから……先にスープかな」
　キーアが包丁を手にする。
　幼い彼女に、厨房の調理台は高すぎるようで、背筋を伸ばして身を乗り出すような格好で野菜を切りはじめた。
　ダドリーはあわてて止めに入る。
「ま、待て……子どもが刃物を使うなど危ない」
「ほえ？　へいきだよ」
「すこしは言うことを聞かんか！」
「……でも、今のうちにやらないと、パーティーに間に合わないし」
「パーティーだと？」
「うん！　かちょーのお誕生日パーティーだよ」
「あいつら、勤務時間に……‼」
「料理したらダメだったの？」
「あ、いや……待機中に料理を禁止するという規則はないが、常識的に考えてだな……」

せいぜい、買ってきたケーキを食べるていどにするのが、普通ではないか？　まったく特務支援課は型破りだ。
キーアが大きな棚の上段へと手を伸ばす。指先をぷるぷるさせるが、届かないようだ。
「う～～……」
「どうした？」
「お塩が切れちゃってるの。前に買っておいたのが、棚の上にあるんだけど……」
「これか？」
当然ながら、ダドリーにとっては、なんでもない高さだった。紙袋を取ってやる。
「うん、これ！　ありがとー、ダドリー‼」
「まったく……子どものしつけ方について支援課（あいつら）にひと言、言っておかねばな……」
「じゃあ、料理しちゃうね」
キーアが小さい体にもかかわらず、テキパキと準備を進めていく。
「バニングスたちが帰ってきてからにしたらどうだ？」
「だって、いつ帰ってくるかわからないし……」
たしかに、いなくなった犬を探すなんて、いつになるか。
ダドリーはこめかみを押さえて、ため息をついた。
「仕方ない……私も手伝おう」
「え？　ほんと⁉」
「子どもが、ひとりで料理をするなど、危なっかしくて見ておれんのでな」
スーツを脱いで、シャツの袖をまくる。ロイドのエプロンを借りることにして前にかけた。
きらきらとキーアが瞳を輝かせる。
「ダドリー、やっさしぃーー‼」

たいへん不本意ながら、ダドリーは料理を手伝うことにした。
手を洗って準備を終える。
「はじめは、なにを作ればいい？」
「なにが得意なの？」
「と、得意な料理か……」
正直なところ、それほど慣れてはいないのだが、子どもの手前、そんなことは言えない。
「……どんなものでも任せるがいい」
背筋を冷や汗がつたった。

ん〜、と考えてから、キーアがレシピを指さした。
「じゃあ、この《フレッシュサンド》を作ってもらえる？」
「うむ、これなら♪　あ、いや……なんでもない。まかせておくがいい」
思わず明るい声が出てしまった。とりつくろうように、ことさら重々しく答え、ぐいっと胸を張る。
キーアが笑顔を浮かべた。
「ありがと〜‼」
期待に応えるべく調理をする。
ゆで卵を作るために、まずお湯を沸かす。その間に、きゅうりを刻んだ。
温めた卵をナイフで細かくし、きゅうり、マヨネーズ、塩、こしょうと混ぜ合わせる。
焼きあげたトーストに乗せ、ハムとレタスもはさみこむ。
完成だ。
「よし、上出来♪　あっ……う、うぉほん！　ふん、これでいいのか？」
また弾んだ声をあげてしまった。
すこしだけ頬が熱くなる。
くいっ、とメガネを直した。
キーアが手をたたく。

「わぁ〜、美味しそう♪」
「ふ、ふふ……まあ、当然だな」
子ども相手ではあるが、褒められて悪い気はしないダドリーだった。
「お前のほうは、どうだ？」
「んと、キーアはね、《薬膳麻婆豆腐》ができたとこ」
「なっ⁉」
いつの間にか、キーアの手によって完成度の高い麻婆豆腐ができあがっていた。
濃い赤色と香辛料の匂いが食欲をそそる。
子どもの腕前とは思えない。
むしろ、素人のレベルではなかった。
「こ、これは……なんということだ……」
「えへへ、じゃあ、次はね――」
「どんなものでも任せてもらおう！」
「ほんと⁉　じゃあ、《匠風オムライス》を作ってね！」
「ただのオムライスではなく、匠風に仕上げろという事なのか…!?」
「あ、無理そう？」
「むむ……い、いや、もちろん大丈夫だ！」

「えへへ」
　ダドリーはレシピを見ながら頑張ってみたが、とき卵を薄く広げたり、崩さずに巻くのは本を読んだだけでは難しかった。
　ぐしゃぐしゃになる。
「うっ、いかん……メガネが曇って……」
「え……ダドリー、だいじょうぶ？」
「これは……その……」
　オムライスを目指した別の料理ができあがってしまった。
　失敗料理というやつだ。
「ん～と、どうしょう？　食べてみたら、意外と美味しいかも？」
「パーティに出す料理ではないな……仕方ない。これは、私が食べるとしよう」
「え、でも……」
「いいか、たとえ失敗しても、食べ物を粗末にするのはダメだ」
「わかった。じゃあ、ツァイトにあげようよ！」
「む……食べるだろうか？」
　ダドリーは充分に冷ましてから、ずっと寝ている白狼のところへ失敗オムライスを持っていった。

皿を持って現れたダドリーとキーアに、ツァイトが身体を起こす。
「グルル……」
「ツァイト～、ごはんだよ！」
「ガウッ」
「えへへ、〝美味しそうな匂いがする〟だってさ」
「まるで言葉がわかるみたいに言うのだな」
「わかるよ～」
「ふっ……そうか」
ダドリーはうなずいた。
子どもは夢があるものだな――と微笑ましい気持ちになる。
身を起こしたツァイトの前に皿を置いた。
ガフガフと食べはじめる。
「ツァイト、おいしい？」
キーアがにこにこしながら聞くと、白狼がひと声、鳴いた。
「ウォンッ！」
「へー、そうなんだ～。〝なかなか美味しい。この料理を作った者は才能がある〟だってさ！」
「あ、ああ……」

犬の食事を作る才能を褒められても、あまりうれしくなかった。
そもそも、失敗した料理だし。
ダドリーは、そっとため息をついた。
「よし、次こそ！」

そして、数分後――
キーアが気まずそうな顔をする。
「えっと……じゃあ、その《フライドフィッシュ》になれなかった料理は、コッペに」
「う、うむ……」
屋上へ行き、黒猫に失敗した魚料理を与えた。
「にゃゃゃあ～!!」
「これは……喜んでいるのか？」
「にゃ～お」
食べ終えたコッペが、支援課ビルの裏へと消えた。
空になった皿と食べかすを片付けていると、すぐに猫が戻ってくる。
「にゃぁ～～～お」
ころり、とダドリーの前に、黒色の石を落とした。

「なんだ？」
　ゴロゴロゴロ……とコッペが喉を鳴らす。
　石を手に取った。
「もしかして、私に？　こ、これは《時》系統のクオーツか⁉　しかし、形は同じだが、なにか違うような……」
　ふと思い出す——配備予定の試作品として見せられた新型エニグマのことを。
　戦闘時の行動力を支援するクオーツに、似たようなものがあったはず。
「まさか、新型のクオーツなのか⁉」
「にゃおーん」
「この猫……何者だ⁉」
「にゃぁおお〜ん」
　コッペは満足そうに鳴き声をあげると、よく日の当たる屋上で、ころりと丸くなった。
　ぬぬぬ、とダドリーはうなる。
（売られてもいないクオーツを入手してくるとは……もしや支援課の活躍の陰には、この猫の働きが⁉）
「……ふっ……まさかな。偶然だ。このクオーツは遺失物として届けておくとして……一応、猫のことは一課の書類に追記しておくか」

　後日、引き取り手の現れなかった《行動力1》のクオーツは、ダドリーの手に戻り、配備されたばかりのエニグマⅡに装着されるのだった。

　キーアの指示に従って、あれこれパーティーの準備をしていると、玄関のほうから声がした。
「こんにちはー」
「む？　来客のようだな」
　ダドリーたちが厨房から顔を出すと、玄関口には警備隊の制服に身を包んだ少女の姿があった。
「わあい、ノエルだ〜」
　キーアが笑顔で迎える。
「こんにちは、キーアちゃん！」
「ふむ……君は、ノエル・シーカー曹長だったかな？」
　問いかけると彼女は目を丸くした。

「あれ？　もしかして、捜査一課のダドリー捜査官でいらっしゃいますか⁉」
「ああ、そのとおりだ」
「ご苦労様です！　……って、ここ支援課ですよね？　なにをされてるんでしょうか？」
「見てわからんのか？」
　ダドリーはスーツを脱いで、エプロンを巻いている。
　ノエルが首をかしげた。
「ちょっとわからないです……どうして、一課の捜査官が、支援課でキーアちゃんと料理を？」
「……そうだな。どうしてだろうな？」
　ダドリーのほうが教えて欲しいくらいだ。
「ふふ、なかなか面白いことになっているみたいね」
　ノエルの後ろから、クールで理知的な雰囲気の女性が姿を見せた。
　やはり警備隊の制服を着ているが、左胸の階級章が将校であることを示している。
　今度はダドリーが目を丸くする番だった。
「ソーニャ・ベルツ副司令⁉」
「お邪魔してもいいかしら。アレックス・ダドリー捜査官？」
「警備隊の実質的なトップが、警察のいち部署である支援課に……まさか、なにか事件

が⁉」
「ふふ、そういうわけではないの」
「ロイドたちは支援要請で出動していますが……？」
「ええ、知ってるわ」
　ソーニャの言葉に、ノエルが説明を添える。
「あたしたち、警備隊本部の近くでロイドさんたちに会って、誘われたんです」
「セルゲイの誕生日パーティーをするらしいわね。しかも、サプライズなんですって？」
「ふふ、楽しそうじゃない」
　警備隊副司令ソーニャ・ベルツが、らしからぬ少女のような笑みを浮かべた。
　おおっ、とノエルが驚いた顔をする。
　そういえば……とダドリーは思い出した。
（……セルゲイさんと、ソーニャ副司令は……ならば、私がとやかく言うことではないな）
　ひとつ、うなずく。
「わかりました。パーティー料理の準備中なので、お茶くらいしか出せませんが、中で待っていてください」
「ふふ、おかまいなく」
「あたしにも手伝わせてください！　美味しそうな匂いがしてますね。もうケーキは買っ

てあるんですか？」
「えへへっ、ケーキも作るんだよ」
「えっ、手作りなの⁉」
「うん！」
元気よく答えたキーアに、ダドリーは驚愕の声をあげる。
「おい待て、今からケーキ……だと⁉」
「そのほうが楽しそうだもん」
「しかし……」
「あら、大変そうね。私も手伝おうかしら？」
ソーニャがうれしそうに袖をまくる。
今度はノエルが声をあげた。
「ええっ⁉　副司令が⁉」
「あら……私だって、料理くらいできるわよ。まあ、ここ数年、ごぶさただけど」
そこに、さらに来客があった。
「あの……すみません……」
「む？」
もじもじと気後れした様子で、黒髪の美しい少女が姿を見せた。

ダドリーは我が目を疑う。
「なっ⁉　もしかして……リーシャ・マオ嬢か⁉」
劇団アルカンシェルの看板スターのひとりである。
リーシャが困ったような顔を浮かべた。
「やっぱり、ご迷惑なんじゃ……」
彼女の背を押すようにして、栗色の髪の少女が入ってくる。ウルスラ病院の看護師セシルだった。
「ふふ、ロイドが大丈夫って言ってたから平気よ」
華やかなふたりが来たら、部屋の空気まで変わったように感じられる。
リーシャが、ぺこりと頭をさげた。
「すみません……セシルさんから、ここでお祝いのパーティーをやるからとお誘いを受けまして……」
「うふふ、すこし前に、リーシャさんに助けてもらったことがありましたから」
はたはたとリーシャが左右に手を振る。
「いえ、そんな！　たまたまロイドさんたちと一緒にいただけです」
「だとしても、助けてもらいましたから。いつか、お礼をしたいとロイドと話してたところだったんです」

「あれは、むしろ私のほうが、ロイドさんにお礼を言いたいくらいで……」
この調子だと、延々と同じことを繰り返しそうだ。
ダドリーは割って入る。
「だいたい話はわかりました……つまり、リーシャ・マオ嬢も、セルゲイさんの誕生日パーティーに来たんですね？」
「はい。支援課のみなさんには、お世話になってますから、お祝いができたらいいな、と思いまして」
「なるほど……」
プライベートでの参加であれば、ダドリーの立場から、どうこう言うべきではないだろう。
セシルが確かめるように尋ねてくる。
「ロイドが誘っても大丈夫って言ってたし、きっとセルゲイさんも喜んでくれますよね？」
「まぁ、経緯はともかく……リーシャ・マオ嬢に来てもらったら、普通はよろこぶでしょう」
セシルとリーシャが安堵したように表情をやわらげる。
ノエルが元気よく腕まくりした。
「よし！　人数も増えてきたことですし、じゃんじゃん料理しちゃいましょう！」
セシルとリーシャも手伝いを申し出てくる。

「お料理の最中でしたか？　よかったら、手伝わせてください」
「私もなにか……炒飯とか担々麺とか、東方系の家庭料理なら得意です」
キーアが瞳を輝かせた。
「わあい！　みんなでがんばろ～!!」
小さな手をにぎりしめて、号令をかけた。
「おー!!」
ノエルとセシルが、ノリ良く合わせる。
リーシャとソーニャは微笑んでいた。
騒々しくなったせいかファイトが起きて、階段をのぼっていく。
ダドリーは皿を並べたり、食材が足りないと言われて買い出しに行ったり、息つく暇もないほど働いた。

夕方――
「ただいま～」
ロイドが帰ってきた。エリィとティオとランディも一緒だ。

そして、それぞれが驚きの声をあげた。
「パーティーの準備が終わってる⁉」
「いい匂いがするわね」
「……すごい料理がならんでます」
「おいおい、まるでパーティー会場みたいじゃねぇか⁉」
料理をテーブルにならべていたダドリーは、咳払いをした。
「みたいではなく、ここはパーティーの会場だ。企画したのは、お前たちだろうが」
キーアが厨房から飛び出してきた。
「ロイドー‼」
「ただいま、キー……おいおい、手が……⁉」
幼い女の子の手は、なにやら白いものまみれになっていた。
しかし、ロイドに向かって突進する勢いは止まらない。
べちゃり！
「うっ……キーア……」
「あれ？」
ロイドの服に、べっとり白いものがついていた。
キーアのほうも鼻や口元に、べたべた白いものをつけている。

ぺろり、と舐め取った。
「えへへ～、甘～い♪」
「……キーア、これ生クリームか？」
「うん！」
服をクリームでべたべたにされたロイドだったが、優しくキーアの頭をなでる。
「今日は、みんなでパーティーの用意をする予定だったのに……ごめんな。こんなに遅くなっちゃって」
「ううん！　お仕事だからいいの。へいきだよ！」
けなげな様子に、ティオが涙ぐんで、キーアのことを抱きしめる。
「……キーア！」
「んあ？　ティオにもクリームついちゃうよ？」
「いいんです。そんなの気にしません」
「キーアちゃん、お料理とか大変だったでしょう？」
エリィの言葉に、キーアが首を横に振る。
「みんなが手伝ってくれたから！」
厨房から、ノエル、ソーニャ、リーシャ、セシルが顔を出した。
それぞれが、ロイドたちに、ねぎらいの言葉をかける。

ランディがテンションを跳ね上げた。
「うおっ⁉　リーシャちゃんに、セシルさん⁉　本物か⁉　それとも夢か幻か⁉」
ロイドたちは驚いたり、お礼を言ったりと、大変だった。
ようやく落ち着いた頃——
玄関から、ひとりの青年が入ってきた。
「やれやれ……大騒ぎだね。僕も仲間に入れてもらっていいのかな？」
「あっ、外で待ってたのか？　もちろん歓迎するよ」
ロイドが迎え入れたのは、中性的な美貌と、皮肉めいた笑みが印象的な青年だった。
ダドリーは一瞬、言葉を失ってしまう。どうにも驚くことの多い一日だ。
「………ぬおっ⁉　貴様はワジ・ヘミスフィア⁉」
「やあ、お久しぶり。ダドリー捜査官」
ワジは不良グループ《テスタメンツ》のリーダーである。
「支援課は、一応、警察の組織だ。どうして、お前がここにいる？」
ティオが小さな声で「……一応は余分では？」とつっこんだ。
それはともかく、ワジが応じる。
「どうしてって、彼に誘われたからさ」

「む……どういうことだ、バニングス⁉」
ダドリーが睨むと、ロイドは当然という顔をしていた。
「支援要請を受けて探してた飼い犬なんですけど、旧市街のほうへ逃げてしまって……隠れるところが多いから、これは大変だと思ってたら、ワジが協力してくれたんです」
ワジが話を引き取る。
「旧市街は野犬同士も縄張りを持ってるからね。迷いこんだ犬の逃げこむ先は、それほど多くないのさ……その犬を説得したのは、ティオだけどね」
「……話せば、わかってくれました」
納得できるような、できないような話だ。
「協力してもらったのは、確かなのだろう……しかし、不良グループのリーダーを招くなど——」
「あの、ダドリー捜査官。誰であろうと、この場に来てくれた人を追い返すというのは、お祝いに水を差してしまうことになりませんか。それに彼なら、おかしなことはしないと思います」
（……もしかして、知り合いなのか？）
そう言ってかばったのは、意外にもノエル曹長だった。
ダドリーは納得しかねるが、そもそも、パーティーの主催者はロイドだ。

そして、なにも言わないということはソーニャ副司令までワジの同席に異論ないのだろう。
ため息をついた。
「まぁ、パーティーとは、こういうものか……」
ワジが肩をすくめる。
「ふふ……なかなか異色の取り合わせだね。捜査一課のエリートと、警備隊の人たちと、ウルスラ病院の看護師さんと、アルカンシェルのスターかい？　そのうえ、不良グループのリーダーまで呼ばれて、警察官のお誕生日会だなんて……こんな妙なパーティー、いくら僕でも経験ないよ」
楽しそうに笑っていた。
まったくもって非常識だ、とダドリーは思う。
ロイドはクリームまみれの服を着替えに自室へあがり、エリィとティオはキーアの顔をぬぐってあげる。
子どもとは思えないほどしっかり者に見えたキーアだが、世話されている姿は、まだまだお子様だ。
そして、予定通りの時刻に、本日の主役が姿を見せる。

特務支援課の課長、セルゲイが帰ってきた。
会議スペースの大きな長机には、いっぱい料理がならんでいる。
ホワイトボードには『HAPPY BIRTHDAY』の文字。
そして、笑顔で出迎えた面々は——支援課のロイド、エリィ、ティオ、ランディ、キーアと、警備隊のノエル曹長、ソーニャ副司令。劇団アルカンシェルのリーシャ・マオ。ウルスラ病院の看護師のセシル。さらに、テスタメンツのワジだ。
もちろん、捜査一課のダドリーもいる。
いつの間にか、ツァイトも戻ってきていた。
タバコをくわえたまま、セルゲイが唖然として、つぶやく。
「……なんだ、こりゃあ……？」
「かちょー、お誕生日おめでとー!!」
キーアが最初に、お祝いの言葉を投げかけた。
みんなも口々にお祝いする。
セルゲイが目を白黒させていた。

ソーニャが、グラスを手渡す。
「乾杯くらいしたら？」
「あ、ああ……」
みんなが言葉を待っていた。セルゲイが困ったような笑みを浮かべる。
「クク……数日前から、なにかやってるとは思ってたが……やれやれ、この忙しいのに、元気なやつらだな」
ロイドたちが照れ笑いで返した。
セルゲイがグラスを掲げる。
「誕生日を祝うような歳でもねえが……ま、礼は言っておこう」
みんなで乾杯した。
ロイドたちはノンアルコールにしておく。ランディなどは残念そうだったが。
たくさんならべられている料理に、セルゲイが感嘆をあげた。
「ほう、こいつはすごいな……誰が作ったんだ？」
キーアが説明する。
「んとね、その匠風オムライスはノエル！　こっちの龍老炒飯がリーシャで、あっちの煮出し魚鍋はソーニャだよ！」
「……煮出し魚鍋か」

セルゲイは唇の端をゆるめ、小皿に分けて、煮出し魚を口にした。
「……懐かしい味だな」
「ふふ、本当に覚えてるのかしら？」
　ソーニャが苦笑していた。
　ワジがテーブルの端に、酒瓶とグラスをならべる。
「人が多いし、僕はバーテンの真似事でもしようかな」
「ちょっと、ワジ君、ここ警察署だよ⁉」
「わきまえてるよ、ノエル。ノンアルコール・カクテルも作れるさ。これなんかオススメだよ」
　手際よく作られたのは、《ベルベリージュース》だった。
　アルコールは使われていない様子だから、と飲んでみて、ノエルは目を丸くする。
「す、すごい！　美味しい……とっても甘いのに、すっきりしてて」
「ふふ……そうだろ？」
　キーアが、ロイドに声をかける。
「ねえ、そろそろ、ケーキを出そうよ！」
「えっ⁉　ケーキまで、ちゃんと作れたのか⁉」
「えへへっ！　セシルが手伝ってくれたもん。キーアもがんばってかわいくしたんだよ」
「そいつは楽しみだな。よし、丁寧に運んでこよう」

「俺も手伝うぜ」
　ロイドとランディで厨房からテーブル中央へ誕生日ケーキを運んだ。
　キーアが書いたというメッセージ入りの手作りケーキを前にして、セルゲイが目頭を押さえる。
「クク……まったく、おまえたちは……」
「すごいです。プロ顔負けですよね」
　リーシャが褒めると、セシルが頬を赤くした。
「前に失敗してから、何度か作ってみたから……少なくとも、味のほうは普通だと思うわ」
「普通じゃない味のケーキを作っちゃったんですか……？」
「甘くないケーキになっちゃったことがあるの」
　セシルが小さく舌を出す。
「そういや、そんなこともあったな」
　昔のことを思い出したらしく、セルゲイが苦笑していた。
　玄関がノックされる。
　ダドリーは振り向いた。
「むっ……バニングス、まだ来客があるのか？」
「え？　いえ、俺の知ってるかぎり、これで全員だと思いますけど」

「では、誰だ?」
　ダドリーが玄関扉を開けると、マイクを持ったグレイス記者と、カメラを構えたレインズが入ってきた。
「こんばんはー‼　クロスベル通信(タイムズ)です!」
「帰れ」
「うわっ⁉　ダドリー捜査官……どうして支援課に⁉　まさか、出向ですか?」
「わ、私が支援課に出向するものか!　今は記者など入れるわけにはいかんのだ」
「ええー⁉」
「まったく、どこから嗅ぎつけてきた?」
「ふっふっふっ……記者としての直感が、なにかあると……こう、ピュキーンと」
「とにかく帰れ」
「うあ〜、わかりました!　じゃあ、記事にしませんから!　その交換条件でどうですか⁉」
「つまり……追い返したら記事にするわけか……その約束、守ってもらうぞ?」
「もっちろん!」
　ずいずいと奥に入ってくる。
「うふふん♪　あ、セルゲイ課長、お誕生日、おめでとうございます!　つまらないものですけど、これ」
「お、おう……そっちは、最近、大活躍じゃねえか?」
「いや〜、新市長体制になって、あれこれ大激変ですから書くことが多くて多くて」
「だろうな。それなのに、こんな小さなことに時間を使っててていいのか?」
「ん〜、なにがあっても、支援課からは目を離さないほうがいい気がするんですよね……ま、私の記者としての勘ですけど」
「ククク……期待に添えるといいがな」
「うふふふっ……」
　記者魂の宿った瞳が、めらめらと燃えていた。
　盛りあがっているグレイス記者にカメラマンのレインズが耳打ちする。
「あの〜、グレイス先輩……」
「なに、レインズ君?」
「これ記事にしないって約束なら、写真は撮らないほうがいいですよね?」
「うーん、たしかに、ここで撮影すんのは、ちょっとね……でも、せっかく来たのになにもしないんじゃ、甲斐がないでしょ?」
「いや、僕はべつに……」
「そうだ!　集合写真を撮りましょうよ!　プリントしたら感光クオーツごとセルゲイ課

長に渡すわ。それでどう⁉」
「ククク……まぁ、俺が決めることじゃねえな」
「どう⁉」
　今度はダドリーが尋ねられた。
　セルゲイが預かるのなら、文句はないが――
「やはり、ここはお前が決めるべきだろう、バニングス」
「俺ですか⁉」
　すこし考えてから、ロイドがうなずく。
「……うん……撮られたくない事情のある人は映らなければいいんだし、撮ってもらおう。こんなふうに集まれるのは、とても貴重なことだと思うから」
　エリィとティオも同じ気持ちのようだ。
「大切な思い出だもの、残せたらうれしいわ」
「……キーアが、がんばってくれたことも記録されますね」
「えへへっ！　写真とるの⁉　やったあ！」
　キーアが両手を挙げた。
　他の参加者たちもかまわないとのことで、みんなしてケーキの前にならんだ。
　レインズが、どこから持ってきたか脚立にのぼり、角度をつける。

「グレイス先輩、レフ板、もうちょい高くお願いします」
「ぐぐぐ……もう、これ以上は背が伸びないっての！」
「がんばってください。あきらめないのが記者魂だって、いつもグレイス先輩が言ってるじゃありませんか」
「うぐ〜」
　撮影になった途端、上下の立場が逆転して、すっかりアシスタント扱いのグレイスだった。
　レインズがカメラを構える。
「いいですか、撮りますよ〜、3、2、1、はい。ありがとうございました！」
　撮影が終わり、ほわっとした空気になる。
　そのとき、ロイドのエニグマに着信があった。

　懐から取り出して、カバーを開く。
「やあ、フラン……え？　なんだって⁉　そんなことになったら……くっ‼」
　ロイドの様子から、大変な事態が起きたことは、すぐ推測できた。

「ああ……わかった……すぐ現場に向かう！」
ロイドが通話を終える。
ダドリーはスーツの上着を羽織り、装備（インペリアル）を確認した。
「バニングス、今度こそ事件のようだな!?」
「はい！　ジオフロントの扉が故障して開いたままになり、住宅街に多数の魔獣が現れているそうです！」
「なんだと!?　捜査一課としても放っておけない事態だ。よし、特務支援課、合同強制捜査だ！　私についてこい！」
「了解!!」
「市民の避難もしないと」
エリィの言葉に、ティオがうなずく。
「……逃げ遅れた人の探索（サーチ）は任せてください」
「よっしゃ！　とっとと片付けようぜ!!」
ランディがスタンハルバードを肩にかついだ。
ノエル曹長が進み出る。
「あたしも協力します！　装備は最低限しかありませんが、市民の誘導ならできますから！」

「そうね……警備隊の軽装甲車なら、ジオフロントの魔獣にも対抗できると思うわ」
ソーニャ副司令が直々に承諾してくれた。
ダドリーはうなずく。
「願ってもない！　協力、感謝する！」
こんなときだというのに、ワジが動じることなくカクテルを作っていた。
「やれやれ……相変わらず落ち着かないね。まぁ、僕は帰りを待つことにするよ。まさか、これでお開きじゃないだろ？」
ロイドが笑みをこぼす。
「もちろん、できるだけ早く退治してくるよ……支援課ビルには、課長もツァイトもいるから大丈夫だと思うけど、セシル姉やリーシャたちを頼む」
「ja（ヤー）．他ならぬ君の頼みだ、引き受けよう」
セシルとリーシャが、心配そうに見つめていた。
「気をつけてね、ロイド。ケガしないで帰ってきて」
「ロイドさん、お気をつけて……」
「ありがとう！」
それから、ロイドはキーアの頭をなでた。
「ごめんな……ちょっと行ってくる」

「うん。がんばってね、ロイド！」
出動に際しても、セルゲイは黙って見ているだけだった。
なにも命令しない。
ただ、視線を交わして、互いにうなずく。
信頼しているのだとわかる。
これが支援課の流儀なのか——とダドリーは思った。
ロイドたちは自分で考え、自分が信じる道を全力で進でいく。
ダドリーのやり方とは違う。
しかし、彼らを認める気持ちは以前よりも強くなっていた。
ロイドが扉を開ける。
「さあ行こう！　みんな！」
仲間たちと表に出るロイドの後ろ姿に——ダドリーは、彼の兄ガイ・バニングスを重ねる。
「ふっ……いや、まだまだ遠いな。しっかりと私が指導してやらねば」
夜のとばりに包まれた街を守るため。
事件の現場へと走りだすのだった。

第6話

『キーアのいちにち』

英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～

最終回

特務支援課メンバーが過ごす

クロスベル自治州のゆる～い(?)日常！

エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、『碧の軌跡』シリーズ。続編となる『閃の軌跡』、『創の軌跡』においても激動の中にあり、様々な壁が立ち塞がっていたが、怯むことなく立ち向かっていったのがロイド・バニングス率いる特務支援課メンバーだ。そんな特務支援課メンバーが、もしかしたら過ごしていたかもしれない日常を描く、魅力たっぷりの一冊をご堪能あれ！

チチチ……と小鳥の鳴き声がする。
窓からはもう朝の陽光が差しこんでいる。
静かな寝息が、やむ。
「んにゅ」
ライムグリーンの髪の幼い女の子が、ベッドのなかで身じろぎをひとつ。
もう一度、チチチ……と、さえずりが聞こえる。
「ん？　あ……もう、あさ？」
幼い女の子がまどろみから浮かびあがる。つぶやきに答えるかのように小鳥が再三の声をあげる。
チチチ……
「え？　そんな時間!?」
勢いよく起きる。
ぱちっと目を開いた彼女の瞳は、きれいな金色をしている。
意志の光が宿り、その想いを伝える手が、ふわりと持ち上がると、まだ隣で眠っている青年の顔へと舞い降りる。
ぺちぺちと頬を叩く。
「たいへん、たいへん！　ロイド、朝、朝！」

「うっ、わっ……なんだ!?」
ロイドと呼ばれたブラウンの髪の青年は、不作法な頬への来襲者から逃れるように顔をそむけつつ、体を起こす。
「や、やあ、おはよう……キーア」
「おはよ、ロイド！　もう朝だよ！」
「ん？」
青年はベッドの脇に置いてある《ＥＮＩＧＭＡ》——戦術オーブメントのうち第５世代のものを指す——を手に取る。
無機質な導力器が告げるのは、とうに起床時刻が過ぎているという無慈悲な事実。
ロイドは魔獣から攻撃をされたような悲鳴をあげる。
「うわっ!?」
「ちこくしちゃう！」
「キ、キーア、急ごう!!」
「うん！」
言いながらふたりはベッドから飛び出す。
ロイドはクローゼットからシャツやズボンを取り出し、寝間着を脱ぎ捨て、着替えはじめる。

キーアのほうは服を置いてあるのが自分の部屋なのでドアへと足を向け……

あ、と窓へと振り返る。

外に向けて。

「鳥さん、起こしてくれてありがと～!!」

満面の笑みを浮かべ、小さな手を大きく振ると、今朝は玄関の前にパンをちぎって置いておこうと決め、それから部屋の外へ出る。

今日もいい天気になりそうだ。

紫色のシャツに白色のパーカーを羽織り、オレンジ色のスカートをはく。

着替えを済ませたキーアは三階にある自分の部屋から一階まで階段を駆け下りる。

トントントトンと後を追いかけてくるのは、お尻まである長い髪。

キーアの住んでいるのは特務支援課ビルという。特務支援課は、この街——クロスベルを守る警察のいち部署であり、すこし風変わりではあるが、ロイド・バニングスは捜査官で、キーアは養われの身だ。

そして、支援課ビルにはロイドとキーアの他に四人と二匹の仲間がいるのだが、それは

追々……
　先に着替えを済ませていたロイドが、もう台所に立っている。
「やあ、おはよう、キーア」
「おはよっ、ロイド！」
　起き抜けのときは、お互いに大慌てだったので、改めて挨拶を交わす。
　ロイドが苦笑いを浮かべる。
「あやうく、みんなの朝食が遅くなるところだったよ。起こしてくれてありがとうな、キーア」
「えへへ、今日はロイドが朝ごはんの当番だったもんね。あ、《モルジュ》には行かないの？」
　西通りにあるベーカリーカフェ《モルジュ》の焼きたてパンときたら、外はサクッとして香ばしく、中はやわらかくてふわふわしていて、頬が緩む美味しさなのだ。
「うーん……買い物してる時間はなさそうだな。堅焼きパンがあるから、こちらにしておこう」
「うん、そうだね」
「あとは、スクランブルエッグを作るとして……ハムを焼こうかな？」
「じゃあね、キーアはスープを作る！」
「大丈夫か？　たいした材料は残ってないけど……」

「少しお野菜があれば、だいじょうぶだと思う」
「そうか。頼もしいな」
「えへへっ」
　料理をしているうちに、とんとん、と上品な足音が降りてくる。
　パールグレイの髪を腰まで伸ばした美しい少女が、キッチンに顔を出す。支援課の仲間であるエリィ・マクダエルだ。
　キーアは元気いっぱいに挨拶する。
「エリィ、おはよ！」
「おはよう、キーアちゃん、ロイド」
「やあ、おはよう、エリィ。すまないが、もうすこし待っててくれ」
「なにか手伝いましょうか？」
「ありがとう。皿を出してくれるかな？」
「ええ、わかったわ」
　ことり、ことり、と静かな音をたてて皿がならべられていく。エリィが扱うと、いつも使っている器なのに、ちょっと高級品になったように感じられるから不思議だ。
　朝食の用意ができた頃、ライトブルーの髪に白い肌の少女が姿を見せる。
　ティオ・プラトーだ。

なぜか、ぬいぐるみを引きずって。
みっしぃというクロスベルで大人気のマスコットキャラクターで、ＭＷＬ（ミシュラムワンダーランド）なんていう遊園地まである。
「やあ、ティオ、おはよう」
ロイドが挨拶すると、ぼんやりした表情だった少女の頬に、朱が差しこむ。
「うっ、あ……これは……」
「ティオちゃん、顔、洗ってきたら？」
「そ、そうします」
エリィに言われ、ティオがそそくさと洗面所へ消える。
どうやら、すこし寝ぼけていたらしい。
しばらくして再び現れたティオは、どこへしまったのか、ぬいぐるみを手にしておらず、胸甲をつけ、いつものクールな表情を見せる。まるで先ほどの寝ぼけた姿などなかったかのように。
「おはようございます、ロイドさん、エリィさん、キーア」
「ああ」
「おはよう、ティオちゃん」
「おはよ、ティオ！」

特務支援課の課長は、いつも朝食には姿を見せないので残るはひとりだけ。
エリィが首をかしげる。
「ランディはどうしたのかしら？」
「……まだ眠ているようですね」
「昨夜は遅かったみたいだからな。今日は非番だし、ゆっくり寝かせておいてやろう」
ロイドの言葉に、みんながうなずく。
「じゃあ、いただきまーす！」
キーアが手を合わせ、すこし賑やかな朝食の時間となる。
そうそう、とキーアはパンをすこしちぎって、ポケットにしまう。
あとで、玄関の前に置いておくのだ。

支援課ビルの玄関を入ってすぐの場所には、ソファーとテーブルがあり、応接スペースとなっているのだが、もっぱら、キーアはリビングとして使っている。
ここで、本を読んだり、歌を歌ったり、ツァイトとおしゃべりして過ごす。
ツァイトは警察犬として支援課ビルにいるが、本当は伝説の白狼らしい。

応接スペースは、居心地がいい。なにより、ロイドたちが仕事から帰ってきたとき、一番に出迎えることができるから。
キーアは図書館で借りてきた本を広げる。
そこへエリィがやってきて。
「あら、キーアちゃん、絵本を読んでるの？」
「うん！　エリィも見る？」
「ふふ……じゃあ、いっしょに見ましょうか」
「えへへっ、やった！」
ソファーにならんで座り、絵本を開く。
こうしていると、まるで母娘のようにも見えそうだが、そういうことを言うとエリィが「まだ18だから……」と真剣な顔をするので控えておく。
絵本をエリィが美しい声で読み上げる。
「──おれいに、トマトをたくさんもらいました。ミネストローネをつくりましょう、と姉のジーナがいいました。あたたかい、ミネストローネをいっぱい……」
「ねえねえ、エリィ、ミネストローネってなに？」
「トマトを使ったスープかしら？　私も食べたことはないけど……この絵本の書かれた国の鍋料理みたいね」

本には、大きな鍋で赤いスープを作る姉弟(きょうだい)の絵が描かれている。
冬は雪に閉ざされて、買い物に出かけるだけでも大変な国であるらしい。
「トマトのスープってどんな味なのかしら？　なんにしても、きっと体の温まる料理なのでしょうね」
「きっとそうだね！　面白いよね、エリィ。絵本には、寒い国がすごく大変って書いてあるけど、書いたひとは、この国のことが大好きなんじゃないかな？」
「私もそう思うわ」
「でも、この国のことが好きなんて書いてないのに、不思議だね」
「そうね……直接的に書いてある下りはないわ。これは間接的表現というものだけど……」
「んと、エリィは、どのへんから読み取ったの？」
「んー……この下りは象徴的よね。姉弟が母親のために暖かい料理を作るところ。寒くて大変な国だからこそ、家族が互いのことを大切に想っているのが伝わってくるわ」
「お母さんのためって書いてないのにね」
「そうね。だとすると、作者が一番表現したかったのは……あっ」
「なに？」
「楽しく絵本を読んでるのに、考察とか興醒めよね。まるで留学先の学生たちと話してるみたいな気分になっちゃって……キーアちゃん、ときどき鋭いことを言うから、びっくり

しちゃうわ」
「えへへっ、そうかな？」
「そうよ。さっきの洗濯の下りでも……あ、そういえば、私、洗濯物を干さないと」
　エリィが腰を浮かせる。
「ごめんなさい、キーアちゃん。また後でね」
「お洗濯？　キーアも手伝う！」
「まあ、ありがとう」
　カゴに洗濯物を入れて、屋上へと階段をのぼっていく。
　途中でロイドと会う。
「お、今から干すのか……手伝うよ、エリィ」
「そんな、悪いわ」
「朝食の準備を手伝ってもらったから、お互い様さ」
「そう？　じゃあ、お願いするわね」
「キーアも手伝うよ！」
「おっ、えらいぞ、キーア」
　三人で屋上に出る。

　導力を利用した洗濯機が開発されたのは、それほど昔のことではない。
まだ手洗いで済ませる家庭もあるが、政府や警察には企業が試験運用を兼ねて目新しい製品を提供してくれている。
　例えば、この支援課と警察本部をつなぐ導力ネットワークも、魔法(アーツ)を使うために必要な戦術オーブメントも、エプスタイン財団から提供されたものだ。
　最新装備のおかげで捜査が効率的になる反面、急な仕様変更で面倒が増えることもあるのだが。
　いずれにしても、洗濯物をお日様に当てるのは、鉄の塊が空を飛ぶほど導力技術が進歩している今日(こんにち)でも、人の手によって行われるしかなかった。

「キーアちゃん、そっち持った？」
「うん！」
「じゃあ、広げるわね」
　シーツの端と端を持って、キーアはエリィといっしょに大きな白布を物干し竿へとかける。
　ぴんと引っ張ると、シワが消えて寝心地がよくなるのだ。
ほどよい風が、支援課ビルの屋上を撫でていく。

「あ……みなさん……」
　屋上の入り口を見ると、ティオが手に黒色の物を持って立っている。
　はて？　とキーアは思う。
　ロイドとエリィも首をかしげる。
　どこか、いつもとティオの雰囲気が違う。
　なにかが足りないような。
「あの……これも干したいのですが……場所はありますか？」
　ティオが手に持った黒色で三角形の機械を差し出す。
　まるで猫の耳のような。
「あ！　いつも頭につけてるやつか！」
　ロイドが言って、キーアもエリィも、それだ！　と気づく。
　ティオが手にしていたのは、頭につけている猫の耳のような三角形の髪飾りだ。
「それ、取れたんだね」
「……キーア、おかしな誤解をしないでください。これは、センサーですから。いつもは頭に載せているだけですし、完全防水なので水洗い可能です」
「なんか、すごいね」
　キーアは妙に感心してしまう。

　エリィが不安そうに尋ねる。
「ティオちゃん、それ洗濯バサミで挟んじゃっていいのかしら？」
「……平気ですが、陰干しのほうがいいかと」
「それなら、階段室の陰がいいわね」
「はい」
　ロイドが肩をそびやかす。
「そのセンサーとか、胸の甲を外してると、ずいぶん印象が変わるもんだな」
「えっ……おかしいですか？」
「まさか。いつもとは違うけど、どちらもかわいいよ」
「あ…………」
　ティオが頬を染める。
　ふぅ、とエリィがため息をつき、
「またそういうこと言って」
　とジト目になる。
　相変わらずロイドはわかっていないようで、「？」と小首をかしげる。
　そんなふうに、おしゃべりしながらも、カゴから洗濯物を取って次々と干していく。
　ハッ！　とティオが顔色を変える。

「な、なにをしているんですか、ロイドさん⁉」
「え？　洗濯物を干してるんだけど……？」
「どうしてロイドさんが⁉　あ……いや、今日は全員が非番の日……予想しておくべきでした！　わたしとしたことが」
ティオが顔を赤くして、わなわなと震える。
理由に気づいたエリィが、申し訳なさそうに言う。
「あの……ロイド、その手にしてるのは……」
「ん？　洗濯物だろ？」
「いえ、だから、それは……女の子のでしょう？」
「そりゃあ、こんな小さな下着、俺やランディが使えるわけが……」
ぴらっ、とレースのついたショーツを広げ、そのあたりで、ようやく歩く鈍感、天然ジゴロ、超ニブちんさんも事態の重大さに気がついたらしい。
「ご、ごめん！　これ、ティオのだったのか⁉」
「誰のでもいいんです！　そういうのは、エリィさんに任せて、見なかったことにしてください！」
そう叫びながら、ティオがロイドの手から小さな布をひったくる。
「ああ、そうか、なるほど」

「ごめんなさいね、ティオちゃん。私も気が回らなくて」
「いえ……これは本当にわたしのミスですから。エリィさんが謝るようなことでは……」
ティオの顔は、反応したセンサーみたいに真っ赤になっている。
キーアは不思議で仕方ない。
「ロイドがティオのぱんつ干したらダメだったの？」
「ダメということはないですが……できれば、避けたいことなんです」
ため息まじり。
そして、キーアも大人になればわかります、とつけ足される。
ふぇ～と、うなずく。
大人の世界は複雑怪奇だ。
どうにも居所のなくなったロイドが引き上げて、結局、洗濯物はエリィとティオとキーアで干すことに。

お昼ご飯は、ティオの当番だ。
スパゲッティを茹でて、ミートソースをかける。

手を抜いているわけではないが、ティオは料理にあまり時間を使わない。
効率よく手際がいい、という感じだ。
「ランディさんは、まだ起きてこないようですね」
「そうみたいだな」
ロイドがうなずく。
「キーアが起こしてこようか?」
尋ねると、エリィが頭を横に振る。
「大丈夫だと思うわ。お腹がすいたら起きてくるでしょう」
「はは……動物みたいだな」
ロイドが笑うと、応接スペースで寝そべっていたツァイトが、グルルとうめく。
ティオが肩をすくめる。
「……『動物の生活は、もっと規則正しい』だそうです」
「な、なるほど」
「ツァイトにも、ごはんをあげないとね」
キーアは皿に牛乳を注ぎ、パンをちぎってひたして白狼の前におく。
「ガウッ」
「えへへ……お肉は、晩ごはんにね」

ツァイトがお昼を食べはじめるのを横目に、キーアも食事に戻る。
前々から思っていたのだけれど、とエリィ。
「固いパンをあげるときは、牛乳にひたして出しているわよね。でも、鉄すら噛み砕いてしまうツァイトには、かえってやわらかくなりすぎないのかしら?」
「あ……」
「どうでしょう? 物足りないですか、ツァイト?」
ティオが尋ねると、口のまわりを牛乳で白くした白狼が、ガウッと返す。
キーアとティオはうなずく。
ふたりは動物の言葉がわかるという、不思議な力があるのだ。
「……『ぱさぱさした味は好みではない』らしいです」
「牛乳にひたしたパンは、おいしいんだって」
「なるほど、グルメ的な意味があったのね」
エリィが納得する。
神狼と呼ばれ、超然としているツァイトが、固いパンより牛乳にひたしたパンのほうが美味しいから好きというのが、なんだか微笑ましい。
おしゃべりしながら、食事は進んでいく。
ランディは起きてこない。

昼食が終わって、お片づけを手伝ったあと、キーアはツァイトの毛繕いをする。
その体毛は、毛玉のひとつもできないほど完璧ではあるけれど、櫛でとかしてあげるともっと綺麗になるのだ。
ツァイトが目を細める。
「えへへっ、気持ちいい？」
「ガウ……」
「そう？　こっちもね」
まふまふした尻尾まで櫛をいれる。
そうやって、なでているうち、キーアのまぶたが落ちてくる。
お腹はいっぱいだし。
お日様はぽかぽかだし。
「ん……」
まったりとしているツァイトの背に、ぽさりと頭をあずける。
すー、とキーアの寝息。
ツァイトは身じろぎもせず、その幼く小さな身体を受け止めている。
静かな時間が流れて……

「じゃあ、行ってくる」
ロイドの声に目を覚ます。
「ん……？」
顔をあげると、ちょうど玄関にロイドとエリィの姿があって、ふと目が合う。
「あ、起こしちゃったか、キーア」
「ロイド……お出かけするの？　またお仕事？」
「いや、買い物に行くんだ」
「キーアちゃんも、いっしょに行く？」
エリィが誘ってくれる。
「いいの⁉　じゃあ……」
ふとティオだけは見送る側で、食堂としても使っている会議スペースに残っていることに気づく。
「ティオは行かないの？」
「そうですね。買い物はロイドさんとエリィさんにお任せして、わたしはここの掃除をす

るつもりです。たまの休みにやっておかないと、どんどん汚れるばかりですから」
「ん！……じゃあ、キーアはティオを手伝う！」
「え？」
ティオが目を丸くする。
「……キーア、ロイドさんたちと一緒に買い物に行くほうが、楽しいのでは？」
「そうかもしれないけど、おそうじ、ティオひとりだと大変でしょ？」
じ～～ん、とティオが感動に震える。
目尻に涙までにじませて。
「キーア……明日、みっしぃクッションを買ってあげます。期間限定で発売されるそうですから」
「えっ、いいの⁉　わ～い！」
ティオはキーアに甘々だ。
ロイドがエリィと顔を見合わせ、苦笑する。
「はは……ちょっとくらい過保護でも、キーアは大丈夫だと思うけど……」
「むしろ、ティオちゃんの将来が不安ね」
「む……なんですか、ロイドさん、エリィさん？　おかしなことは言っていませんよ。労働に対する正当な報酬というものです」
「かまわないけど、でも俺やランディが手伝ってもなにも買わないだろ？」
「ふーむ……おふたりが、みっしぃクッションを喜んでくれるなら買ってきますが……」
「いや、それは……話が噛み合ってないような……？」
「みっしぃグッズをプレゼントして喜んでもらえるのは、わたしにとっても、ご褒美なのです」
「うーん……ティオがキーアとみっしぃのことを大好きだってことは伝わったよ」
「ふふ……それがわかってもらえれば充分です」
ティオが満足げにうなずき、やっぱりロイドたちは苦笑するのだ。
ロイドとエリィは買い物に出かけ、キーアはティオと一緒にまず会議スペースを掃き掃除。
バケツに水をくんできて、モップがけ。
最後に細かいところを拭きあげる。

そろそろ、終わろうか――
という頃になって、のっしのっしと足音が降りてくる。

「う〜……頭、ガンガンする……」
現れたのは、ランディ・オルランド。
長身で赤毛の青年だ。すこしふらつき、壁に手をついて体を支える。
キーアは笑みを浮かべて。
「あっ、ランディ！」
「む……おう、キー坊か。相変わらず、声が甲高いな」
「なにか食べる？」
「そうだな……まず水をくれや。あと……なんか、やわらかいもんがいいな」
キーアはティオと視線を交わす。
――やわらかい食べ物‼
「あれでいいかな？」
「あれがいいでしょう……」
ランディが食堂のイスに崩れるように腰掛け、うーとか、あーとか、うめいている。そこへ、急いで用意した皿を置く。
「どーぞっ、ランディ！」
「ランディさん、お水です」
「お……すまねえな……ごくっ、ごくっ」

水で喉をうるおしてから、濁った目つきで皿を覗きこむ。
「ん？　ああ、パンを牛乳にひたしてあるのか」
「えへへっ」
「どうぞ……やわらかくて、ぱさぱさしてなくて美味しいかと」
「ああ、そうだな」
「ちゃんとスプーンを使ってね？」
「あー……ねえぞ？」
「そうでした、スプーンが必要でした。すぐ持ってきます」
「おう……？」
妙なことを注意されて、ランディが首をひねる。
持ってこられたスプーンを受け取り、牛乳にひたしたパンをすくう。
ティオがキーアに耳打ちしてくる。
「……大きくて、毛が長いところが似てます」
「うん。なんか今日のランディは、ゆっくりしてるしね」
小さなふたりに、まじまじと見つめられ、やや居心地悪そうにしつつ、ランディが皿を空にする。牛乳にひたしたパンは美味しかったらしい。
応接スペースのほうで、ツァイトがウォン！　と鳴いて、キーアとティオは、くすりと

笑う。
ぐぐ～っとランディが伸びをする。
「ふぅい～～～、サンキュ……マシになったぜ」
「キーア、お茶にしましょう」
お掃除もひと段落ということで、ティオが紅茶をいれてくれる。
香りのいいフレーバー。
「うん！」
元気よくうなずいて、キーアはイスに腰掛ける。
ティオとランディと――この三人でティータイムなんて、ちょっと珍しい。
お砂糖を多めに落とした紅茶が、キーアの前に差し出される。
「はい、どうぞ」
「ありがとう、ティオ！」
「ランディさんも……」
「ブランデーはないのか？」
「ありません。あっても出しません」
「冗談だ」

「昨夜は、ずいぶん遅かったみたいですね？」
言われて思い出したのか、にやりとランディが笑う。
「ふっふっふ、休みの前なんで久々にカジノに行ったら、ポーカーで大勝ちしてよ。明るくなるまでバーで大騒ぎしちまったぜ。いや～、とうとう俺のギャンブラーとしての才能が開花したようだな」
「はぁ……カジノのうえに、朝までバーですか……ランディさん、最低です」
ティオのジト目もなんのその、ランディは鼻歌まじりで得意気だ。
キーアが身を乗り出す。
「ランディ、ポーカーってなに？」
「知らないのか？　よし、教えてやるよ」
「やった―!!」
「ちょっ……ランディさん!?」
険しい表情になったティオに、ランディが片手をあげる。
「わかってるって。ミラなんか賭けねえし、どうせカジノには入れねえ。ババ抜きや、セブンブリッジみたいなもんだ。ポーカーのルールくらい知っといても損はないだろ？」
「むー……」
「日曜学校で友だちとやってるぶんには、ただのトランプ遊びさ」

「あ………そうですね。キーア、せっかくだから教えてもらいましょう」
「いいの？」
「キーアには、そういう遊びも経験して欲しいです」
ちょっとだけ寂しそうに、ティオが微笑む。
そういえば——とランディは思い出す。とある事件に巻きこまれたせいで、ティオは子ども時代を奪われている。
友だちとのトランプ遊びなど、経験あるまい。
「ティオすけもやるか？」
「……お気遣い、ありがとうございます。でも、わたしは、夕方までに済ませておきたい用事がありますから」
「そうか」
「んじゃあ、キーアが覚えたら、こんど遊ぼ、ティオ！」
「ふふ……そうですね。負けませんよ？」
「キーアも強くなるよ！」
「ふっふっふっ……お子様たちには悪いが、俺は強いぜ？」
「ランディさん、くれぐれも……」
「わかってる、ミラなんか賭けたりしねえよ」

「キーア、悪い大人に騙されてはいけませんよ？」
「うん！」
何度も念を押してから、ティオは自分の部屋へと引き上げていく。
やれやれ、とランディが肩をすくめつつ、トランプを取り出す。
ポーカーというゲームは——

「そ、そんな……ばか、な……」
「わぁい、また勝った！」
「三連続のフルハウスだと⁉　どんだけ強いんだよ⁉　こっちに手が入ったときは、あっさり降りられるし……」
「だって、カードが強いときのランディって、ニコニコしてるんだもん」
「いや、してねえって！　それが顔に出るようじゃ、カジノのポーカーで勝てるわけがねえ！」
「そうかな～？」
「ううぅ……もしかして、癖とかあんのか……？」

ぺたぺた、と自分の顔をなでるランディ。
「えへへ、ランディ、もういちどやる？」
「やるやる」
何度やっても、ほとんどキーアの勝ちが続いてしまう。
ランディが肩を落とす。
「ううぅ……負け……ました……」
「わぁい！」
「はぁ～」
「ランディ、ポーカーって楽しいね！」
「お、おう……ダメだ。どうやら、昨夜で運を使い切ったらしいな。しばらく、カジノに行くのはやめておくか……」
ため息まじり。
キーアはトランプを片づけておく。
「また遊ぼうね」
「おし！」
ランディが立ち上がる。
「どうしたの？　またカジノに行くの？」

「いや、もう行かないっての。ミラを賭けてたわけじゃねえが……こんだけ負けて、なにもナシってんじゃ、男がすたる。ちょっと外へ行こうぜ」
「もう夕方だよ？　ロイドとエリィが買い物から帰ってくると思うけど？」
「そんな遠出も寄り道もしねえさ。ちょっと出店を見るくらいで、夕飯までには帰るって」
「ん……」
「なにか買ってやるよ、キー坊」
「わぁ……あ……」
ばんざいしかけて、キーアが止まる。
「ん？　どうした？」
「ランディ、悪いオトナ？」
「今は、良い大人だ」
「じゃあ、行く！」
「ははは……」
外に出ると、もうお日様は傾いていて、玄関前に置いておいたパンはきれいになくなっている。
「さて、急ぐか」
「うん！」

キーアはランディに連れられて、東通りへと向かう。
露店街には夕飯の買い物をする人が溢れていて、活気がある。
「おっ、風車なんかどうだ？」
「いいの!?」
「もちろんさ。何色にするかなあ？　一色のもあるし、二色を組み合わせたのもあるぞ」
「じゃあ、赤と緑の」
「え〜っと……これか。どうして、赤と緑なんだ？」
「えへへっ、ランディとふたりでお出かけして、ランディに買ってもらったから。緑色がキーアで、ランディが赤色でしょ？」
ランディが固まる。
ちょっとだけ頬が赤くなって。
「はは……まいったな」
「あれ、おかしい？」
「いいや、そんなことねえさ。ただ、どっかの天然ジゴロみたいだと思ってよ。これで美人に育ったら末恐ろしいぜ」
「ほえ？」

「あ、いや……忘れてくれ。妙なこと言って、ティオすけやお嬢に知られると、あとが面倒だ」
「うん、わかった！　でもキーアは、ランディに買ってもらったこと覚えてるよ」
「おう」
「ロイドとお寝坊したことも、ランディとポーカーしたことも、エリィに絵本を読んでもらったことも、ティオとお掃除したことも……ぜんぶ、覚えてるから」
「……そうだな」
「そんで、キーアは美人になると末恐ろしいの？」
「そいつは本当に忘れてください」
ふたりして笑う。
支援課ビルに帰る。
途中で、特売特売と声をあげている入荷したばかりの安くて新鮮なトマトを買って。

支援課ビルの玄関扉を開けると、ロイドとエリィが出迎えてくれる。
キーアはロイドのお腹に飛びこんでいく。
「ただいま〜〜〜!!」

「おっ、いいタックルだ」
　ロイドが笑う。
　エリィがランディに尋ねる。
「私たちも、今、帰ったところなんだけど、ランディたちも出かけてたの？」
「たんなる散歩さ」
「そう——あら？　それ、もしかしてトマトかしら？」
「なんか安く売ってたもんでな」
「東通りの露店街じゃない？」
「なんで知ってんだ？」
「私たちも、ちょうど買ってきたところなのよ」
「げ……」
「アルモリカ村から、たくさん入荷したみたいね」
「はは……今夜は、トマトがいっぱいだな」
　ランディが苦笑して、エリィが頭をかかえる。
　いくら安かったとはいえ腐らせるのはもったいない。冷蔵庫なんて飲食店の厨房にしかない。
　芋や青物などに比べると、トマトは傷みやすい野菜なのだ。

　ロイドが首をひねる。
「うーん、さすがに夕飯が山盛りトマトというのは、厳しいな」
「うへ、かんべんしてくれ……」
　四人で思案していると、ティオが自室から降りてくる。用事は終わったらしい。
　ふた袋もあるトマトを見て、いぶかしむ。
「今日は、なにを作るんですか？」
「実は、それを悩んでるんだよ」
　ロイドの説明に、ますます不思議そうな顔をする。
　キーアは、ぽんと手を叩く。
「ミネストローネにしようよ！」
　ああ、とエリィだけが表情を明るくする。ロイドとティオとランディは首をかしげて。
「なんだい、それは？」
「聞いたことありません」
「トマトを使った料理なのか？」
　エリィが説明を引き受ける。
「え〜っと、この絵本に出てきたの。たくさんトマトを使う鍋料理らしいわ」
「そうだったのか……でも、レシピがないと作れないんじゃないか？」

ロイドの疑問に、エリィが弱った顔をする。
ティオが会議スペースに置いてある導力ネットワーク端末へと向かう。
「凝った料理は無理ですが、基本的なレシピであれば、調べられるかもしれません」
「まあ、そんなことができるの⁉」
「ネットワークは日々、拡大中です。トランプ遊びのルールだってありますよ」
「ほー」
ランディが感心した声をあげる。
おしゃべりしながらも、ティオの指先は高速でキーを叩く。
「将来的には図書館の本をすべてデータ化するプロジェクトもあります。そうなったら、あの膨大な本の山から、ひとつの言葉を探すことさえ一瞬になるかと」
ロイドたちは驚いて声をあげる。
「すごいんだな、導力ネットワークって」
「本当ね、捜査にも役立ちそうだわ。まぁ、私は本の形も好きだけれど……」
「はい。本は本の形で楽しみたいというひとも多いです……ん？　あ、これではありませんか？」
端末の画面に、本当に簡単な調理手順が表示される。
レシピというよりは、異文化の紹介という趣のデータだが。

エリィが熱心にうなずく。
「なるほど……そういう料理なのね。全部の材料があるわけじゃないけど、代わりは用意できそうだし、これならすぐに作れそうよ」
「わかった、作り方はエリィに任せるよ。手伝うから、なんでも言ってくれ」
「じゃあ、まずはトマトを洗ってもらおうかしら」
「よし」
「キーアも手伝う！」
「もちろん、わたしも……」
「ふふ、ありがとう。ほら、ランディもトマトを洗うのよ？　なに雑誌を持ってソファーに腰掛けてるのかしら？」
「うっ……」
ランディが肩をすくめ、ロイドやキーアが笑みをこぼす。
みんなで料理する。
絵本で見たミネストローネ。
赤いスープができあがる。

支援課ビルの玄関が開けられ、タバコをくわえたヒゲの男が入ってくる。
キーアは厨房から顔を出す。
「あっ、かちょー、お帰り！」
「おう……」
セルゲイ課長だ。この特務支援課の責任者で発起人である。
「なんだか、いい匂いがしてるな？」
「うん！」
「ミネストローネです。トマトのスープなんですよ」
エリィが答えると、彼はタバコをくわえたまま唇の端をゆがめる。
「また変わったことをしてるな」
セルゲイ課長は、ロイドたちが普通でないことをするのが、むしろ楽しみのようで、小さな笑みを浮かべる。
ミネストローネをティオが皿によそって、ランディがテーブルに運ぶ。
ロイドはパンを切る。

初めて作る料理でお疲れのエリィは、もうイスに座って待つ側だ。
支援課ビルの屋上を寝床にしている猫のコッペと、白狼のツァイトに茹でたお肉をあげてから、キーアは席につく。
目の前に置かれた赤色のスープ。
ニンニクとオリーブオイルの香りが、やたらと食欲をかきたててくる。
「おいしそ〜」
「みんなの、お口に合うといいけど……」
エリィが不安げにつぶやく。
全員が席について、手を合わせる。
今日の糧（かて）を女神（エイドス）に感謝して。
ミネストローネをスプーンですくうと、口に運ぶ。
一瞬、静かに。
キーアは笑みをはじけさせる。
「おいし〜〜〜!!」
うん、とティオがうなずく。
「これは、なかなか新鮮な味です。それでいて、懐かしいような食べやすい料理ですね」
「いいんじゃねえか？　鶏肉にも味がしみてるし、こういうのは好みだぜ」

いつもは料理の感想など口にしないランディが、珍しく饒舌だ。
ロイドも満足げにうなずく。
「パンにつけても美味いな」
ほっ、とエリィが安堵の吐息をこぼす。
セルゲイが、ふぅ～とスープに息をかけてから口に運ぶ。
「日が沈んでから、ちょっと冷えこんだが……こいつは体が温まるな」
キーアはエリィと顔を見合わせ、
「絵本といっしょだね」
「ふふ、そうね」
と笑みを交わす。
濃厚ミネストローネは大成功だ。

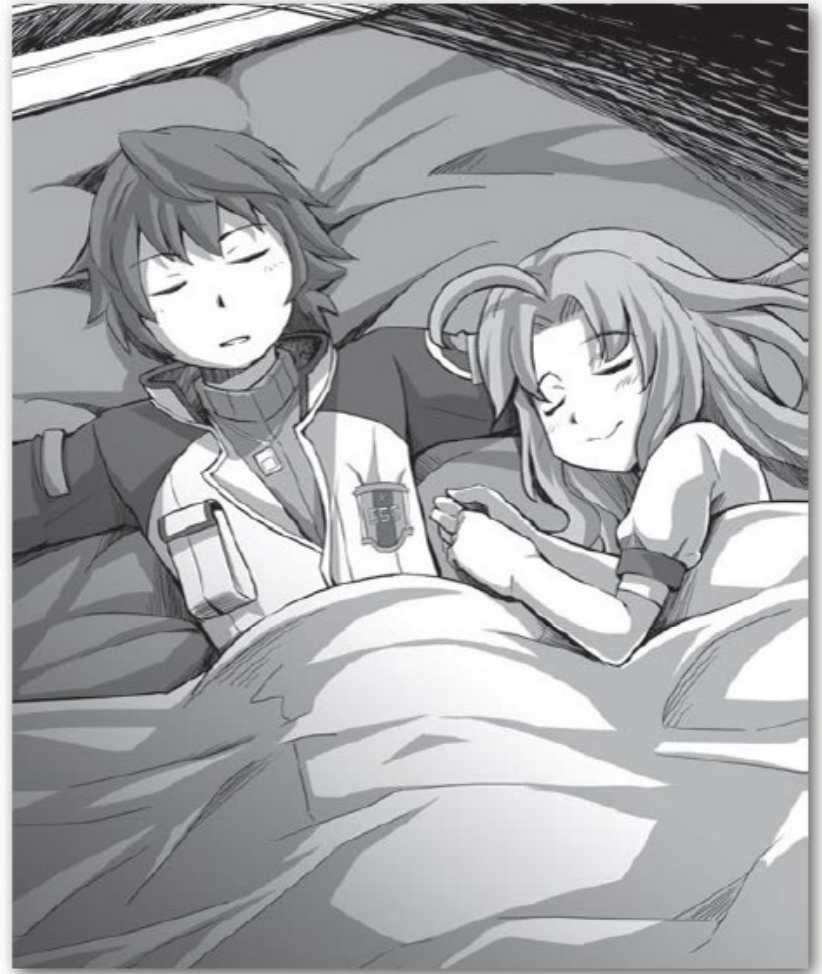
ざあ～っ、と流れるお湯。
けむる湯気。
キーアはティオと一緒に湯船（バスタブ）につかる。
洗い場ではエリィが石けんを泡だててお肌をきれいに磨いている。
今日は、三人でお風呂だ。
エリィは手足が長くて、腰が細くて、スタイルがいい。
「ほぅ……」
隣で、キーアと同じようにエリィを眺めていたティオが、ため息をこぼす。
「きれいです」
「うん」
「しかも、ぐらまーです」
「おっきいね」
「あそこまでのは、大人の女性（ひと）でも、なかなかいません」
「ティオはちっちゃいもんね」
「うっ……あ、いえ……わたしは……こ、これからなので」
意外と真剣な表情だ。
頬を赤くしてエリィが咳払いする。
「オホン……な、なんの話をしてるのかしら？」
「……発育（レベルアップ）に関する……女神様の不条理と未来への希望についての考察でしょうか？」
ティオが視線をそらし、キーアは元気に声をあげる。

「おっぱいの話だよ！」
「はぁ……そんなこと気にしなくていいのよ」
　眉をひそめたエリィが、両手で隠す。
　ティオがブツブツと物質の構成因子のゆらぎについて不平不満をのべる。
　ぽつり、とキーアはつぶやく。
「でも、大きいほうがいいんでしょう？」
　どういうこと⁉　とエリィとティオが身を乗り出す。
「なっ……だ、誰が言ってたの⁉　まさか、ロイドが⁉」
「そうなんですか⁉　一大事です」
「ううん。前にランディが言ってたの」
　空気が緩む。
　エリィが、ため息をひとつ。
「やあね……」
「ランディさん……アイスハンマーの刑です」
　拳をにぎったティオが、まったくもって容赦ない。
　エリィがキーアを手招きする。
「キーアちゃん、ばかな人の言うばかなことを覚えてなくていいのよ。髪を洗ってあげる

からいらっしゃい」
「はーい‼」
「あっ、キーアの髪は、わたしが……」
「そう？　じゃあ、私はティオちゃんの髪を洗ってあげるわね」
「わ、わたしは……そんな子どもではありません」
「ふふ、いいじゃない」
「む……これが、バスト・ヒエラルキー……？」
「そ、そんなんじゃありません！　もう、あんまり言わないでちょうだい。恥ずかしいんだから」
「なるほど……悩みは人それぞれですね」
「えへへっ、ティオ！　髪、洗って！」
「もちろんです」
「ほら、ふたりとも、こっちいらっしゃい」
「……エリィさん、本当にわたしの髪を洗うんですか？」
「たまには、いいでしょ？」
「……ひとに髪を洗ってもらうなんて……ひさしぶりです」
「うふふ……ティオちゃんの髪、すっごいなめらか。絹みたいだわ。うらやましいな」

「エリィさんの髪もきれいですよ？」
「そう？　ありがとう」
「キーアは？　キーアは？」
「きれいですよ。ちょと跳ねてるのが、元気よくてかわいいです」
「そうね。ライムグリーンの色も似合っているわ」
「えへへっ」
梳くように髪に泡をなじませる。指の平でなでてから、お湯をかけて流していく。
大切に。
綺麗になるように。

お風呂からあがったキーアはロイドの部屋に行く。
ドアを開けると、ブラウンの髪の青年がベッドのうえに寝転んで、本を読んでいる。
「ロイド、おじゃま？」
「やあ、キーア。そろそろ寝るところだよ」
そう言いながら、ロイドはエニグマの隣に本を置く。

「いっしょに寝てもいい？」
「今日もかい？　もちろん、いいよ」
「やったぁ！」
だーっとベッドに走っていき、寝転んでいるロイドに飛びこむ。
どん！　と受け止められる。
「おっ、いいダイビングだ」
「えへへっ」
毛布をかけて、お互いの体温であたたまる。
ロイドが手元のスイッチで明かりを消す。
窓からの月光が、かすかにふたりの顔を照らして、青い。
やさしげな顔と間近にある息づかいに、心が落ち着く。
「今日は、楽しかったかい、キーア」
「うんっ。ロイドは？」
「ひさびさに、よく休めたよ。エリィと図書館に寄ったんだけど、居眠りしちゃったみたいだ」
「あはっ」
「でも、探していた本が見つかったし、よかったよ」

「さっき読んでた本？」
「ああ……昔、兄貴が読んでいたんだ」
「そうなんだ」
「さ、もう寝ようか……明日も早い」
「えへへ……寝坊しないようにしないとね」
「はは……今朝は大慌てだったからな」
「おやすみ、ロイド」
「ああ、おやすみ、キーア」
やわらかな声。
静かに目を閉じる。
ゆっくりと、キーアは、眠りに落ちていくのだった。